
ふたつでひとつ。

水無瀬 紗音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたつでひとつ。

【Nコード】

N4794J

【作者名】

水無瀬 紗音

【あらすじ】

感情を持つ「双子の機械人形」と一人の少女の物語。一部グロテスクな表現ありの上に、人間を馬鹿にした表現がたくさん出てきます。そういう物に嫌悪感が少しでもある方は読む前にウターンの方を願います。

登場人物（前書き）

随時更新。

キャラとキャラの間に追加する可能性あり。

登場人物

アンジェラ・ウィンストーヴ

14歳の人間。5月27日生まれ。腰まで届く軽いウェーブのかかった金髪。青い瞳。軍から抜け出した感情のある双子の機械人形達を保護している。ブランドの服を作っている会社の社長令嬢。

レイラ

双子の機械人形。ネーナの姉。黒い巻き髪を下で二つに結んでいる。右眼が黒で左眼が赤。黒い花弁を自由に操る。《頭脳型》。普段は冷静だが、一度怒ると誰も手がつけられなくなる。

ネーナ

双子の機械人形。レイラの妹。黒い巻き髪を上で二つに結んでいる。右眼が赤で左眼が黒。赤い花弁を自由に操る。《力型》。機械人形なのにどこか人間に似た雰囲気を出している。

レイ

双子の機械人形。メイの姉。黒い中国っぽい服で短パン、ニーソックス。赤い三つ編みを左肩に垂らしている。《力型》。優しいお姉さんの存在。時々自分を見失う。

メイ

双子の機械人形。レイの妹。赤い中国っぽい服で短パン、ニーソックス。黒い三つ編みを右肩に垂らしている。《力型》。お姉さんの存在。姉とは違い自分を見失うことは無い。

クリス

双子の機械人形。ルイスの姉。黒い髪を肩のあたりで切りそろえ

ている。青い瞳。常にルイスと手をつないでいる。能力はなく、アンジェラの手によって生み出されたため、アンジェラを「マスター」と呼ぶ。（ルイス同様）

ルイス

双子の機械人形。クリスの妹。軽く膨らんだ金髪を肩のあたりで切りそろえている。青い瞳。常にクリスと手をつないでいる。右足の一部に「Angelia」と刻まれている。（クリス同様）

ミシェル

双子の機械人形。機械人形にしては珍しく男性型。シェリルの兄。赤っぽい髪と碧眼が特徴。《頭脳型》。いつも全てを敵に回したような瞳をしている。

シェリル

双子の機械人形。ミシェルの妹。少し長めの金髪で碧眼、紫と白を強調された服。《力型》ミシェルにずっとついて回り、兄の言うことにはなんでも従う。静かで冷たい碧眼。

サン

双子の機械人形。ルナの姉。人の中を自由に行き来することが能力。今はアンジェラの中にいる。髪はとても長く服も真っ白。薄いピンクのリボンをしている。赤い瞳。

ルナ

双子の機械人形。サンの妹。同じく人の中を自由に行き来することが能力だが、今は誰の中にいるかは分からない。

ランカ

双子の機械人形。アンナの姉。生まれた時から一切能力を持たず、

人間の実験体として過ごしてきたが、真実を知ってしまう。栗色の髪を一部後ろでまとめている。

アンナ

双子の機械人形。ランカの妹。同じく一切の能力を持たず、人間の実験体として過ごす。未だに真実を知らない。独りでいられないぐらい寂しがり屋。栗色の髪を一部二つに結んでいる。

ジュリア

アンジェラの妹。3月14日生まれ。現在8歳。7歳で家を追放され、現在行方不明。

オートマター
機械人形

戦争のために造りだされた人型ロボット。

プロローグ

人間は欲望の塊だ。

それだけじゃない。自分だけ楽しんで、辛いこと・苦しい事は他人に押しつける。

楽したいのはみんな同じなのに。

ある日、人々はおかしな水晶の欠片を見つけた。ピンクとも紫ともとれる美しい色をした水晶の欠片は、不思議なことに、人形の中に入れると人形を動かした。手足を動かし、人間の手に触れた。それだけじゃなく、会話もしたのだ。

それを目にした欲望の塊は当然それを利用しないはずはなく、水晶の欠片を探し出し、たくさんの人型ロボットを造った。

名を機械人形——オート・マターという。

水晶の欠片は、初めて見つけた場所だけではなく、とある国の各地から発見された。そして発見された水晶の欠片は全て機械人形に使われた。最初は機械人形も思う様に造れなかった。だが何度も失敗するうちによりやく完成品ができた。その最初の完成品を見本に、機械人形は大量生産された。

機械人形の使い方はひとつだけ。戦争の道具。初めて機械人形が作られたときに分かったのだ。「機械人形には『力』がある」と。力は主に二つに分かれる。一つは「頭脳」という力。人間でいう「考える」という力だ。機械人形には、この世の誰よりも優れた頭脳を持っていた。そのために、戦術予報士や戦略を考えるのに必要とされた。

二つ目は「力」。簡単にいえば「体力」だ。ちゃんとした呼び名は今はない。機械人形には一体一体に力が備わっており、それは個

々に種類があつた。まるで、人間に個性があるように。その力は筋力強化から魔法のようなものまで様々だ。これを戦争に使わない理由はないだろう。

しかし欲望の塊は、一つの水晶の欠片から一つの機械人形だけでは飽き足らず、「ひとつのモノからふたつ」造りだすことを考えた。そして自分の国が勝つ戦力を求めた。

しかし実験は失敗ばかり。水晶の欠片はこれまでにないほど無駄に捨てられた。

やがてある日、ようやく一つの水晶の欠片から「体」のみを生み出すことができた。それを成功の兆しと見た人間はさらに実験を繰り返し、ようやく力を持つて生まれる機械人形を造ることができた。しかし、誤算があつた。

確かに、力を持つて生まれることはできた。だがその力と言うのは、どちらか一方の機械人形に偏っていたり、『頭脳』と『力』が別れて備わってしまったり、ひどい場合だと全く力を持っていない人形ということもあつた。

それだけではない。「ひとつからふたつ生まれた機械人形」の一部は感情を持つて生まれていた。戦争に感情は不必要だ。そのため実験を行っていた人間は、感情を持つ機械人形を牢屋に入れ、感情を捨てるように言いつけた。その期間は5年。5年以内に感情をなくさなければ、戦争には使わないことを決めた。

「ひとつの水晶の欠片から生まれた感情を持ったふたつの機械人形」。これでは名が長い。そのため、人々はこのモノ達をこう呼んだ。

「双子の機械人形」と――。

これはある「双子の機械人形」と一人の「人間の少女」の物語である。

プロローグ（後書き）

はじめましての方は「はじめまして」ですね。

一つ目の小説が終わってないくせに次の作品投稿しているバカです。

この作品はもともリアルでノートの方に書いてたんですが、ちよつといろいろありまして、こっちに移すことにしました。

リアルの方とは内容が若干変わると思います。そのため、内容がおかしいことがあると思います。

もし、誤字・脱字・文章がおかしかったらいつでもご報告ください。

第1話 牢屋の中

「ねえ、ここから出して」

牢屋の中で一人の少女が、牢屋の外にいる一人の兵士に手を伸ばした。その手を兵士が笑いながら持っていた銃で殴る。殴られた痛みには少女が顔をゆがませて手を引っ込める。それを嘲笑いながらもだ若い兵士は言った。

「感情を捨てたら、こっから出してやるよ」

吐き捨てるように言って、兵士は牢屋から離れていった。それを牢屋の中から少女が見送る。

「……感情を捨てるなんて、できないよ」

少女が悲しげに顔をゆがませうつむく。それに合わせて巻き毛を上の方でツインテール結んだ髪が揺れる。先ほど痛めつけられたせいで、苦痛が瞳に揺らぐ。

少女がうつむいていると、また別の兵士が見回りにやってくる。

そのたびに少女は手を伸ばし、「ここから出して」と懇願した。そして兵士たちは決まって、「感情を捨てろ」と言っつてその場を去って行った。毎日毎日この繰り返し。

今日何人目かわからない兵士が通り過ぎていく。それでも少女が兵士に懇願していると、

「別にいいわよ、ネーナ」

同じ牢屋の中のもう一人の住人が口を開いた。

兵士たちに手を伸ばしていた少女——ネーナは声のした方へ振り返る。声の主はベッドの上に座って膝を抱えていた。

「どうせあいつらは私たちの言うことなんて聞いてはくれないわ」
声の主が顔を膝の中に押し付ける。ネーナに声をかけたのはレイ

ラ。ネーナの双子の姉だ。ネーナが頭の上でツインテールで結んでいるのに対し、レイラは首のあたりで結んでいる。服は白いワンピースのようなもので、腰には大きな黒いリボンが付いている。リボンの先は床に触れるほど長い。胸元には黒い薔薇がついていた。瞳の色はとても深い黒。ネーナの格好はレイラとは色違いなだけで、それ以外は一緒だ。

膝を抱えたレイラにネーナは言う。

「……お姉ちゃんはここから出たくないの？」

レイラとネーナは機械人形だ。オートマター感情を持った双子の機械人形。レイラには「頭脳」という力、ネーナには「力」という力が備わって生まれた。そして感情を持っていた。そのために、二人はこうして牢屋に入れられているのだ。

兵士たちはみな、「感情を捨てろ」という。決して力を均等にしろとは言わない。最近決まったらしいのだが、力が別れてしまっても感情がなければ使用するらしい。戦略を練る機械人形と戦う機械人形とを分けるらしいのだ。

顔を沈めたままレイラは答える。

「だって、いくら力が別れてても採用すると言っても、感情があつてはダメなんでしょう？感情を捨てるなんて、そんなことできないわ。私はネーナを忘れたくないもの……」

「お姉ちゃん……」

そう。感情を捨てるということは、お互いを忘れること。記憶としてお互いのことが残っていても、姉妹を愛していたことは忘れてしまう。そして感情を捨ててしまったら、もう二度と姉妹として触れあえない。今まで他の牢屋には、同じように感情を持った機械人形が5組ほどいた。しかしそのうち3組はレイラたちと同じように「感情を捨てたくない」と言つて5年が過ぎ、処分された。あとの2組は感情を捨てて採用された。

「でも早くしないと、あと1年で私たちは……」

レイラとネーナが生まれて4年。あと1年もすれば問答無用で処

分される。

「わかつてる。わかつてるけど、嫌なの……」

今まで二人は感情を捨てること以外に自由を得る方法はないかと考えた。ネーナの「力」で壁を壊して外へ出るという案は、壊しても基地内の機械人形がすぐに駆けつけてその場で壊される。兵士を脅すという案は、あまり好ましくない。そうやっていくつもいくつも考えては廃案になってばかりだった。

レイラは相変わらず膝を抱えたまま、足の指先を見ている。そんな姉の悲しそうな行動はもう見たくなかった。

「……ねえ、お姉ちゃん。ランカとアンナって知ってる？」

いきなりこんな話を始めるのはどうかと思った。けど、姉の悲しそうな姿を見るより何かを話していたかった。

「知らないわ。誰？」

「ランカとアンナはね、私たちと同じ感情を持った双子の機械人形なんだよ。でも二人とも力は持っていなかったんだって」

「……」

「そんな力を持っていない機械人形はただの人形だ、って処分されるはずだったの。でも二人は処分されなかった。かわりに二人に与えられたのは『人間の生活』」

「『人間の生活』？それって、人間として生きるってこと？」

「さすが、お姉ちゃんは頭いいね。そうなの。二人は人間と全く同じ生活で今もどこかで生きてるんだって。変だよ。私たちと同じ機械人形なのにこの扱い。羨ましいな、楽しそうで……」

「そうかしら」

ネーナは心からその二人が羨ましかった。ここにいても何もいいことはない。けど『人間の生活』なら可愛い服も美味しい料理もたくさんある。だが、そんなネーナの考えをレイラがあっけなく否定した。

「傍から見れば『とてもいい暮らし』かもしれないけど、それって

実験されてるんじゃないかしら。“もし機械人形に人間と同じ生活をさせたらどうなるか”。そういう実験をされてるのだと、私は思うわ。根拠はないけれど」

「………やっぱりお姉ちゃんは頭がいいね」

「でも弱いわ」

「そうだね。私の「力」、お姉ちゃんに半分あげられればいいんだけどな………」

そうネーナはつぶやいた。そう思ったのは今回だけではない。今まで何度も思ったことだ。

ふ、とレイラに変化があった。膝をベッドから降ろし、右手の人差し指を唇にあてて何かつぶやいた。

「そうか………。そうすればもしかしたら………」

「お姉ちゃん？」

姉のつぶやいている声が上手く聞き取れない。だが無理に聴く必要はなかった。レイラがベッドを下りてこちらに近づいてきた。

「いい？ネーナ。よく聞いて」

レイラがネーナの瞳を見つめる。黒い瞳が決意と不安に揺れていた。

「今から私の言う通りにして。そうすれば、ここから出られるかもしれない」

「………なに？」

姉の真剣さに、思わず息を飲んでしまう。牢屋の中の空気が緊張でピリピリと震える。

一度レイラは目を伏せた。そして再び開き、こう言った。

「お互いの眼を交換するのよ」

第2話 交換

今言ったことに、妹のネーナが目を大きく見開いて驚いているのがわかった。

「お姉ちゃん、今、なんて………?」

「お互いの眼を交換する、と言ったわ」

ネーナの言ったことに、レイラは落ち着いて答える。ネーナはしばらく目を開いたままだったが、やがて心を静めて、落ち着いた赤い目でレイラを見つめた。

「………反対は?」

何を考えてネーナが落ち着いたのかは外見からはわからない。とりあず賛成か反対かは聞くべきだろう。

「賛成だよ。でも、どうして眼なの?」

ネーナは即答した。同時にもつともな質問つきだ。

レイラは先ほど自分が考えたことをそのまま伝えた。

「私達を造った兵士たちは言うわね、『感情を捨てろ』と。もちろん、眼を交換するだけでは感情は消えないわ。いえ、感情は消したくない。それ以外に採用される方法を考えたのよ」

「それが、眼の交換?」

「ええ。私には『頭脳』という力、ネーナには『力』という力がある。その二つの力って本来は一つのものでしょうか?だったら分かれてしまった力を一つにすればいいのよ」

ネーナの瞳が少し揺らいだ。だがそれは一瞬のことで、またいつもどおりに戻る。

「………いいよ。やろっ」

「怖くないの………?」

あつさりすぎるネーナの返答に、逆にこちらが動揺した。レイラが動揺することなどあまりないため、レイラは動揺する自分自身に少し笑った。

「そうだね、ちょっと怖いかな。でもそんなこと言っても仕方ないし」

「……………」

「お姉ちゃん?」

突然黙ってしまったレイラの瞳をネーナが覗き込む。レイラの黒く深い瞳にネーナの燃えるように赤い瞳が映る。レイラが口元をほころばせた。

「わかったわ。それじゃ、左眼をくり抜いて」

言われたようにネーナが自分の左眼を根元からくり抜く。同じようにレイラも自分の左眼をくり抜いた。もともと眼があつたところから体内に空気が入ってくる。ネーナの方を見ると、眼があつたところから中の複雑に絡んだ機械が覗いている。

ネーナが手に持った左手をレイラに差し出した。

「これって左眼じゃないといけないの?」

「さあ?」

「……………適当に『左眼』って言った?」

「そんなところね」

「……………こういうところ、お姉ちゃんって適当だよね」

「さつさとするわよ」

レイラも自身の左眼をネーナに差し出す。二人はお互いの眼を交換した。

「……………いい?同時に入れるわよ」

「うん……………」

「いくわよ……………3、2、1」

二人は姉の、妹の左眼を自身のなくなった左眼の空間へと押し込んだ。

途端、二人の間におかしなイメージが湧き上がる。

闇のように黒かったレイラの色はネーナの赤い色と混じり、どす黒い固まり始めたような血の色へ。

燃えるように赤かったネーナの色はレイラの黒い色と混じり、どす黒い流れ出したばかりの血の色へ。

お互いの色がお互いの色と混じりあい、血の色へと変わっていく。

どこか変わった感覚が終わったと感じた時、妹の赤い眼が自分とシンクロするのがわかった。

す、と眼を開ける。

眼の前には赤い右眼と黒い左眼の妹が立っていた。おそらく、ネーナからは黒い右眼と赤い左眼のレイラが見えるだろう。

呆然としているネーナに向かってレイラは言った。

「気分はどう？もう一人の私——」

今までと変わらない無邪気な笑顔でネーナが答える。

「大丈夫。いつもと変わらないよ」

「ならいいわ。それじゃ、さっそく検査をしてもらいましょう」

オートマター

機械人形はどれも生まれたときに検査される。力の偏りや異常がないかを調べるためだ。感情がある機械人形はその検査が年に2回行われる。とくに辛い検査でもない。

だが、検査などしなくても当事者であるレイラとネーナには、ちゃんと力が分かれていることが容易にわかる。しかし検査をするのは、馬鹿な人間に力が均等に分かれたことを知らせる必要があるからだ。

牢屋の外に兵士の姿はない。もう少し待つ必要があるそうだ。

「……………思ったのだけれど、力が分かれても感情があれば採用されないのじゃないかしら」

牢屋に手をつきながらレイラが呟いた。ベッドの上で足をぶらぶらしていたネーナが動きを止め、レイラを見つめる。そしておかしように笑った。

「何よ？」

「お姉ちゃん、眼を交換したら自分の力も衰えた？」

ネーナはまだ笑っている。少しイライラしてきた。笑っていたネーナが続けた。

「大丈夫だよ。感情なんかどうってことないよ。きっと採用される。私の頭が計算した結果だと成功率は10パーセントにも満たないんだけどね」

「でも……」

「この方法を考えたのはお姉ちゃんだよ？提案した人がそんな不安定じゃあ、成功するものも成功しないよ」

言い終わるなりまた足をぶらぶらさせる。どこか楽しそうだ。

レイラはしばらくその様子を見つめた後、自分は馬鹿だ、とこっそり笑った。

そうしていると兵士が近付いてきた。レイラは検査をするように兵士に告げた。しばらくすると他数人の兵士も来て、二人を牢屋から出し、検査室へと歩かせた。

第2話 交換（後書き）

誤字・脱字、文章がおかしい などありましたらご報告願います。

第3話 怒り

検査はごく簡単で、機械人形オートマターの体を検査する装置に通すだけだ。

検査室に入ってもものの10分で検査は終わり、すぐに結果が出る。

「検査の結果、能力が均等に分かれています」

レイラとネーナを検査していた白衣を着た男性が、同じ部屋にいた5人の兵士たちに伝えた。この結果はどうでもいい。ここからが本題だ。

——私達を採用してくれるか。

採用されなくてもいい。とにかくあの牢獄から出たい。壊されたくない。

兵士たちが二人を見ながら何やら話している。どうやら眼のことに気づいたらしい。

辛抱強くレイラが「採用」「不採用」の結果が出るのを待っていると、ようやく結論がでたようだった。

この中で一番年配であろう体格のいい兵士が結論を口にする。

「感情があるなら一緒だ。連れて行け」

結果、不採用。

ネーナは言っていた。「私の頭が計算した結果だと成功率が10パーセントも満たない」と。

確かにその通りだ。否定はしない。そして現実になった。今、二人は再び牢屋に入れられることが決定した。

レイラが呆然と兵士たちを見ていると、ネーナが横から飛び出した。

「嫌だよ、どうして！？ちゃんと力、分かれたじゃない！」

「分かれても感情があるなら意味がない」

「どうして、感情があっちゃダメなの！？」

年配の兵士はネーナの反論に動じず、淡々と答えていく。

「戦争に感情があつては敵を倒すことはできない。戦争に悲しみは不要だ」

ネーナが驚いたように一歩後ずさる。

「戦争で“死”はつきものだ。当然だろう。なのに人は、仲間が死ぬたびに悲しみ、悲しんでいる間に殺された。そんなことを繰り返していたら、我々はいずれ負ける。それが現実にならないために、お前たち『機械人形』を作ったんだ。折角の『兵器』に感情があつては意味がないだろう？」

『兵器』

その言葉を聞いた瞬間、レイラの中で何かの糸が細くなっていくのが分かった。

「……私達は、『兵器』、なの？」

「それ以外に何かがある？」

「じゃあ、今まで死んでいった人たちは……？」

ふん、と年配の兵士は鼻で笑った。そして、

「『戦争の駒』だが？」

レイラの中で、プツンと何かが切れる音がした。

「お前たちは、死んでいった人間を『駒』としてしか見ないのかつ
！！」

隣のネーナが驚いたようにレイラの方を振り向くのが分かった。

『駒』。それは言いかえれば今の機械人形。機械人形は『兵器』。そうだ、こいつらは人の命を何とも思っていない。何とも思っていないから、平気で戦争を起こせるんだ！

「死んでいった者達はみんな軍のために、国のために、家族のために戦って散ったんだ！きつと大切なものを守るために必死だったんだ。なのに、それを『駒』と呼ぶなんて……。そんな言い方、死んだ人たちへ申し訳ないとは思わないの……。？」

「思うわけないだろう」

年配の兵士は続ける。

「あいつらは自らの意思で戦場に立ったんだ。そして死んだ。自分の身を自分で守れなかったんだ。悲しむ必要などない」

検査室に、真っ黒な花弁が散った。

その黒い花弁はレイラ能力だった。自らの意思で花弁を出し、それを自由に操る。その能力を知る者は誰もいない。現にレイラ本人も今、自分の能力を知ったところだ。

だがそんなことに驚く必要はない。

黒い花弁が出現したと思った途端、花弁達が年配の兵士のもとへと飛んで行った。

一瞬のことだった。花弁達は年配の兵士の指を切断した。

兵士の悲鳴が上がる。だがそれだけでは終わらない。花弁達は切断を止めない。

兵士の指が、耳が、足首が、腕が、膝が、眼球が、手首が、生首が、次々とただの肉塊へと化していった。

「ひい！」

同じ部屋にいた他の兵士達が叫び、逃げようとする。だがそれを、ネーナが許さなかった。

「あなたたちは、死ぬのが怖い？」

鼻がくっつきそうなくらいに兵士の顔にネーナの顔を近づける。

「怖い、怖いさ！だから頼む！殺さないでくっ」

兵士は最後まで言うことができなかった。
ネーナの周りを飛ぶ赤い花弁が兵士の口から上を、胴体から切り
離れた。

「……………最低」

そう呟くのがレイラにも聞こえた。

——気づいたら、周りは血の海だった。

本当に気付かなかった。あの年配の兵士の言うことに怒りを隠せ
なかったレイラとネーナは、力を最大限に開放し、構わず全ての人
間を肉塊へと変えていた。

「……………行くわよ、ネーナ。早くしないと機械人形が駆けつ
けてくるわ」

そう言うと、二人は部屋を飛び出し、基地の外へと出た。

第4話 街（前書き）

そろそろ本題に入っていくか。

第4話 街

基地の外は少し茶色く濁っていた。

その原因は流砂だ。基地は街より少し遠いところに建っていて、その周りがまるで砂漠のようなのだ。

一歩歩くたびに少し足が沈む。それでもそんなことには構わず、レイラとネーナは走った。早くしないと機械人形オートマターが駆けつけてくるため、捕まる前に姿をくramsする必要があった。

街にたどり着くと、濁っていた視界が開けて、市場で賑わう人々が目に入った。

「うわぁ………！」

ネーナが目を光らせる。そして勝手に歩き始めた。

レイラはそれを止めなかった。行き先が決まっていなかったため、今は適当に放浪していればいい。だが、

「待ちなさい、ネーナ。人間に私達が機械人形だつてバレては駄目よ」

くるつと振りかえったネーナは元気よく頷くと、今度は走りだした。

いくら適当に放浪してもいいと言ってもはぐれるのはまずい。レイラもネーナの後を追った。

先を走っていたネーナがとある店の中に入っていくのが見えた。続けてレイラもそこに入った。

そこはガラス売り場だった。

ガラスと言っても窓とかそういうものではない。ガラス細工のコップや花、飾りなどだ。窓辺に置いてあるものは太陽の光に輝き、さまざまな色の影を落としていた。

窓辺はとても明るく眩しい。ガラスがそこを煌めかせている。

だが店の奥は違った。

とても薄暗かった。

別に電気が点いていないわけではない。しかし、そこだけ同じようにガラスの置物があっても暗かった。

「お姉ちゃん、見て見て！すごく綺麗だよ！」

暗い部分のすぐ隣で、ネーナがレイラを手招きした。

「これイルカだね？すごく綺麗……！」

手にとってはしゃぐネーナ。まるで人間のような。

だがレイラにはそんなことより、隣の暗闇が気になる。

さりげなくそちらを振り向く。棚にはここや他と同じようにガラス細工が陳列している。その棚の前には――

小さな女の子が立っていた。

容姿からしておそらく10に満たないだろう。レイラとネーナは一応13歳ぐらいの姿らしい。前に兵士が言っていた。

汚れた布のようなものを着ている。その布にフードや袖のようなものがあることからして、かつてその布は服と呼ばれるものだったのだろう。

少女がレイラの視線に気づいてこちらを見る。

薄暗闇の中、少女の蒼い瞳が不気味に輝いた。

それを見た瞬間、自分の身が強張るのがわかった。

「あなた……？」

声をかけようとすると、少女はフードを深く被って店を出て行った。

少女の消えた扉を眺めていると、ネーナが「ねえねえ」と裾を引っ張った。

「どうしたの？」

「これ見て」

ネーナが窓を指さす。そこにはチラシが貼ってあるようだが、中からだと逆に見えるため読めない。仕方なく外に出てその字を読む。

《3月14日19時よりウィンストーヴ家主催のダンスパーティーが開催
場所はウィンストーヴ庭園……》

続きには長々とした小さな字があつたが、大見出しにはそう書かれていた。

「これって……」

「だんすばーていーってなんだろう？」

「人間が踊っているパーティーでしょ。これが何？」

「……面白そうじゃない!？」

「はあ……」

面白そうって、何が？

「うあ、ええつとさ、ほらあれだよ!人が集まるところなら、もしかしたら住む場所が見つかるかもしれないよ?」

確かにネーナの言う通りだ。実際、機械人形は何も食べずとも生きていけるし寝なくてもいい。だが服だけは困る。戦えばいずれ服はただの布へと化していくし、野宿となると汚れる一方だ。それならどこか二人を住ませてくれるところ探さないか。

「そうね。せめて一日だけでも泊めてもらえるところを探しましょう」

開催時間まではまだ時間がある。それまで二人は街を歩き回ることにした。

第4話 街（後書き）

一回ブログに下書き状態でUPしてから投稿してるから、激しく長くなってる……！

あうー…………。

すみません。許して下さい。PC直接入力だと一時保存できないから一回ブログにUPしてます。一時保存出来たらいいんだけどなあ。。。

誤字・脱字、文章がおかしいなどありましたらいつでもご報告ください。

後日修正します。

第5話 ダンスパーティー

嘘、だった。

レイラには「住む場所が見つかるかもしれない」と言ったのは嘘だ。

いや、半分ぐらいは嘘じゃない。
けれど本当は……

（どんな食べ物があるんだろ？どんな服があるんだろ？）

などと人間のようなことを考えていた。

ネーナの考えをレイラが知れば、きっと凄く怒られる。だからあえて言わない。

姉は楽しむことを拒んでいるみたいだが、ネーナは違う。折角外に出たんだから、もっと楽しみたい。

夜19時。ウィンストーヴ家の庭。

そこに、今レイラとネーナは来ていた。

思っていた通り、沢山の食べ物と沢山の服がある。サラダ、肉、魚、スイーツ、ピンクのリボン、紫の薔薇の髪飾り、白く光る靴。どれもがネーナの目には輝いて見えた。

おそらく、ネーナは目を輝かせていたのだろう。後ろでレイラのため息が聞こえた。

はっ、として後ろを振り返る。

「いい？ネーナ。一応は好きに動いてはいいけれど、気をつけなさいよ。ここには、人間の他にも機械人形オートマターが数体紛れ込んでるわ」

レイラの目が周りを探るように動く。

言われて初めて気づいた。

今このパーティーには一、二、三……少なくとも七体はいる。

「絶対に馬鹿な真似はしないで。約束できる？」

「うん、する。下手に変なことしたら、何があるかわからないもんね」

さっきまではしゃいでいたネーナの目が細められる。いくら人間の生体に興味があると言っても、ケジメをつけないければならない時は、ちゃんとケジメをつける。

レイラとネーナがお互い慎重に動くことを約束したとき、

『皆様、今宵、我がウインストーヴ家のダンスパーティーに参加いただき、誠にありがとうございます』

どうやらこの当主らしかった。左手にワインを持っていて、二階のバルコニーから挨拶をしている。

「あれって、ここの人かな？」

「多分ね。でも関係ないわ。さつさと泊めてくれそんな人を探すわよ」

そう言っただけでレイラが周りを再び見渡す。見た目、みんな綺麗に着飾っているため、本性はどういったものか分からない。

とりあえず、探すのもだがネーナとしてはあそこにあるソテーを食べてみたい。こっそり姉の目を盗み、机に近づこうとした時、レイラが急に振り返った。慌てて平静を装う。

「やっぱり単独行動は危険だね。一緒に動きましょう」

「え、う、うん……」

失態だ。何と言うグッドタイミング。まるでこの瞬間を狙っていたかのように振り返られた。もしかすると姉はネーナの考えやこれからする行動を全て見透かしているのではないかとさえ思う。

だがレイラは怒ると凄く怖い。それは妹であるネーナが一番良く知っている。ここは素直に従うのが正しいだろう。そう思っ
てレイラの傍に行くと、

「ちょっと、あなた達」

ひそひそとした小さな声だった。

だがその声は明らかにレイラとネーナに向けてかけられていた。
驚いて二人が声のした方を振り向く。そこには――

「人、間………？」

ひとりの少女が立っていた。年はおそらく14か15前後だろう。
軽いウェーブのかかった金髪を腰のところまで伸ばしていた。

だが少女は周りと少し違う。

服だ。周りと同じドレスなのはドレスだが、どこか控えめで目立たない。

「あなた達、機械人形ね？」

「！」

驚いている二人に、少女はにっこりと笑って小さな声で言った。

「ちょっと話があるんだけど、いいかな？ついてきて」

言うつと勝手に歩き出す。

二人は顔を見合わせると、少女のあとを追った。
もちろん、最大限の警戒をしながら。

第5話 ダンスパーティー（後書き）

誤字・脱字、文章がおかしいなど、いつでもご報告ください。
後日修正します。

第6話 警戒

少女とレイラとネーナは何も話さずに人ごみの中を歩いた。

人ごみを抜けたかと思うと、建物の中へ入っていく。そこは、今回のパーティーの主催者の家であるウィンストーヴの家だった。

（一体、どういいうつもりなの……？）

二人は最大限の警戒をしたまま後をついて行った。階段を上がり、いくつか並んだ部屋の一つの前で立ち止まった。

「どうぞ入って」

言われて部屋に入ろうとすると、

「！！！！」

中から数体の機械人形オートマタの気配がした。

ざつと感じただけでも6体はいる。目で確認できるのは4体。

「そのソファに腰かけて。ルイス、お茶を入れて頂戴」

少女が扉を後ろ手に閉めながら言った。同時に小さな影がちょこちよこと走って部屋の奥に入って行った。

大きな部屋だった。人ひとりが使うには大きいように思える。そして電気はなぜか、机とソファの位置しか点いていなかった。

「暗い……」

ネーナが呟く。それを聞きとった少女が答える。

「外ではダンスパーティーをしているから。ここから丁度庭が見えるの。逆に外からも見えてしまう。庭には沢山の電灯があるのに、屋敷からのこぼれた明りは邪魔でしょう？」

少女がソファに座る。その向かいにレイラとネーナも座った。

目の前に紅茶のカップが置かれる。それを合図にレイラが口火を

切った。

「まず聞かせて頂戴。どうして私達をここに呼んだのかしら？」

少女がにつこりと笑う。

「そんなに警戒しないで。緊張するわ」

「警戒して当然でしょう。見ず知らずの人間に突然呼ばれ、ここに連れてこられたのだから」

少女が肩をすくめて紅茶を口に運んだ。

「私はアンジェラ・ウィンストーヴ。ここの長子よ」

「レイラ。双子の機械人形。姉よ。こっちがネーナ。私の妹」

お互い自己紹介をする。しばらくの沈黙。やがて少女が苦笑交じりに言った。

「回りくどいことは嫌そうね」

「ええ、そうね。大っ嫌いだよ」

レイラは正直なことを言った。本当のことだ。

「あなた達、最近脱走してきたばかりね？」

「……そうだけど」

ネーナが警戒しながら小さく答える。

「どうだった？基地の中は」

「どうって……最低だったよ」

「でしょうね。あなた達が生まれて何年経った？」

何故そんなことを聞くのだろう。

「4年、だけど」

「なら基地にいればあと一年で処分だった、ってことね」

「……回りくどいことは嫌いだと言ったはずよ」

多少なら我慢するが、だんだんイラついてきた。一体何が言いたいのだ、この少女は。大体そんなことを聞いてどうするといふのだ。

「もしこのまま脱走を続ければ、いずれは見つかって即処分される」
アンジェラが持っていたカップを皿の上に戻す。
そして正面からレイラとネーナをまっすぐ見つめた。

「よかったら、この屋敷に住まない？」

「!?!?」

全く意図が読めない。一体どういつつもりでそんなことを口にするのだ。

レイラとネーナの警戒は最大限だった。だが今はそれ以上に警戒している。

「……どういつつもりなの？」

「どういつつもりも、言葉通りよ。ここで一緒に住みましょう？」

「だから、何故そういう話の展開になる！」

思わずいつもの冷静さが崩れて口調が荒くなる。

だがアンジェラは特別気を悪くしたわけでもなく、肩をすくめるだけだった。

「やっぱり、簡単にはいかないわね……」

何が『やっぱり』だろう。突然そんなことを言われても、相手が何を企んでいるか分からないのに、そう易々とイエスとは言えないに決まってるだろう。

「わかったわ。ちゃんと説明しましょう」

アンジェラがにっこりと、裏のない笑顔で語りだした。

第6話 警戒（後書き）

あれ、気づいたらめっちゃ長くなってた。
誤字・脱字、文章がおかしいなど いつでもご報告ください。

第7話 血の繋がった

少女、アンジェラ・ウィンストーヴは唐突にこう言った。

“この屋敷に住まない？”

と――。

「例えばの話なんだけどね」

説明すると言った後、彼女はそう言った。

「【双子の機械人形^{オートマター}】って何だと思う？」

レイラとネーナが顔を見合わせ、首を傾げる。その角度や動きま
でピツタリ一緒だった。

「何って、双子、じゃないの？」

ネーナが恐る恐る言った。当然の答えだ。

「そうね。確かにあなた達はそう思うでしょうね。じゃあ質問を変
えましょう」

アンジェラが紅茶を口に運ぶ。一口飲むと口を開いた。

「あなた達【双子の機械人形】にとって、お互いの存在は何？」

二人は答えなかった。何をどう答えればいいのか、わからない。
どうしてそんなことを聞くのかもわからない。

答えない二人を見て、アンジェラは空いてる手で人差し指を立て、
言った。

「私が【双子の機械人形】ならこう考えるわ。仮に私が姉の立場だ
として、双子の妹は私にとって――世界で唯一血の繋がった家族、
ってね」

紅茶のカップを皿に戻す。立てていた指も下ろして、両手を膝の

上に置いた。

真剣なまなざしだった。

「人間ってね、二人の人間の間に生まれるでしょう？生まれた人間は、産んだ二人の人間の血が混ざってる。それは地球上の生物はどれも同じ。犬も鳥も植物さえも――。なら機械人形は？この場合、【完成品の機械人形】は別よ？感情がないんだもの」

「・・・・・・」

「人間の子は、みんな親と似てる部分を持つてるでしょう？それは遺伝子を持つているから。じゃああなた達は？機械人形の元となってる水晶が一体何なのか、まだ説明はされてない。そして一つの欠片から一体の場合だと、遺伝子というものはあっても意味は無い。けれどここであなた達【双子の機械人形】を思い出してみて」

再びレイラとネーナが顔を見合わせる。今度は首をかしげること
はしなかった。

「あなた達双子って、どこか必ず似てる部分があるでしょう？」

言われて三度顔を見合わせる。みたひ確かにレイラとネーナは似ている。
黒い巻き髪というところと身長、能力も色違いなだけだ。

二人の反応に納得したのか、アンジェラが肩をすくめる。

「似てる部分があるってことは、つまりね？あなた達は血が繋がった唯一の姉妹ってことなのよ」

「ちょっと待って」

レイラがアンジェラの言葉を遮って片手を上げた。

「『血が繋がった』って、私達は機械人形よ。そんな赤い液体が流れているとは思えないのだけれど。現に私達が眼を交換するために目玉をくり抜いても、血は出なかったわ」

「痛覚は？なかったの？」

「ええ。そうよね、ネーナ？」

突然話を振られてネーナが慌てる。そして慌てて首を上下に振った。

それを見たアンジェラが眉をひそめた。

「おかしいわ……。機械人形でも作りは人間と変わらないの。血液も、内臓も、双子で感情があるなら痛覚もあるはずよ。違うのは脳の作りと並はずれた身体能力、及び、人間が持ち得ない特別な力だと聞いているわ。……。もちろん成長しないのは当然だけ」

しばらくアンジェラが考えに浸る。

聞いた感じだとレイラとネーナは他の機械人形とは少し違うらしい。どうして違うのか、気にならないと言えば嘘になるが、今はそれよりも最初に言われたことの方を優先してもらいたい。

レイラの思いが伝わったのか、アンジェラが考えるのをやめて向き直った。

「……。話が脱線したわね。戻すわよ」

「ええどうぞ」

「あなた達二人が脱走したのは、壊れるのが嫌だったからよね？でも心のどこかでは、姉妹を失いたくない、なんて思わなかった？」

思わなかったはずがない。

自分の身はもちろんだが、姉妹を気にかけて当然だ。

「でもこのまま旅を続ければ、さつきも言った通り、いつかは捕まり即処分される。そんなの嫌でしょう？だからこの家に住まないか、

と聞いたの。ここにいれば少なくとも無条件に機械人形や軍人が出入りすることは無いわ。仮に無理に押し付けてきても少しでも時間を稼げればすぐに逃げられる」

「・・・・・・・・」

「唯一血の繋がった姉妹を守りたいと思うなら、一緒にここで住みましょう?」

部屋に沈黙が満ちる。

「お姉ちゃん、どうするの・・・・・・・・?」

ネーナが不安そうに裾を引っ張ってくる。二人とも今は警戒していない。その必要は無いと感じたからだ。

だがここに住むことによりメリットとデメリットを考えなければならぬ。

それはいくら力が均等に分かれたと言っても、もともと『頭脳』の力を持っていたレイラがすることだろう。

「・・・・・・・・ここに住むことでの私達のメリットは?」

「さつきも言った通り、少しでも軍の目を欺^{あそむ}ける。あとは衣食住もあるわ」

「デメリットは?」

「それはあなた達自身が考えることじゃないの?」

俯き、考える。

ネーナは守りたい。人間で例えられたのは不本意だが、唯一血の繋がった妹を守りたいと思ったのも事実だ。また衣と住も必要だ。食はエネルギーとなる物のことだから、寝ていれば自然に回復する必要はないだろう。

デメリットは・・・・・・・・思いつかない。

が、不安ならある。ここにいる機械人形達は何なのか、本当に安全なのか、彼女の家族は何も言わないのか・・・・・・・・。考えれば

考えるほど不安は募る一方だ。

だがどれもすぐに消えそうな不安である。

「・・・・・・・・わかったわ。住みましょう、ここに」

アンジェラの表情が明るくなる。が、

「ただし、この屋敷内における私達の行動は私達自身で決めさせていただくわ」

「それは好きにどうぞ。ただ忘れないでね」
「？」

「あなた達は私達の家族になったってことを」

全く、初めて会ったときからこの少女はよくわからない。突然呼んだかと思えば想像もしない話。例えもまた変わっている。そうまでして家族の一員にしたいのか。

アンジェラが席を立つ。そして右手を差し出し、

「では改めまして。アンジェラ・ウィンストーヴです」

レイラが立ちあがり、握手した。続いてネーナも。

周りですっと空気と化していた機械人形達のほっとした声が聞こえた。

第7話 血の繋がった（後書き）

長い・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！

申し訳ないorz

誤字・脱字、文章がおかしいなど、いつでもご報告ください。
また、アドバイスも頂けると泣いて喜びますよ
↑

第8話 写真の子

アンジェラに案内された部屋は、一人で使うには広すぎる部屋だった。

それもただ広いだけではない。お嬢様らしい綺麗に飾られた部屋だった。

「部屋は好きに使って構わないからね」

そう言い残してアンジェラは扉を閉めた。廊下を歩く音が、時計の音しかない部屋に響く。

改めて部屋を見ると、少し子供っぽい部屋だった。天蓋付きのベッドは白地に少し薄いピンクの花やレースの柄がついている。カーテンも同じ柄だ。

机も一応は勉強机みたいだが、ウサギやクマのぬいぐるみが置かれていた。衣装棚の中も服が入っていて、可愛いドレスだがサイズが小さかった。

まるで、つい最近まで誰かが使っていたかのように、綺麗に掃除されていた。花瓶まである。

「・・・・・・・・」

二人とも何も話さなかった。レイラは何もすることがないのでベッドに腰かけ、ネーナはまだ部屋の中のを物色していた。

「あつ。お姉ちゃん、これ見て！」

言われてベッドから立ち上がり、ネーナの傍に行く。机の前だ。

レイラが傍に来るのを確認したネーナがレイラにある物を見せる。

「これは・・・・・・・・」

可愛らしいたてに入った写真だった。

写真には二人写っている。一人はまだ幼さの残るアンジェラだ。椅子に座っていた。さっきの部屋で見た一番輝いていた笑顔よりも、輝いて見えた。

そしてもう一人は――。

「誰だろ、この子」

ネーナが呟く。

椅子に座ったアンジェラに抱きつくようにくっついてる女の子。まだ小さい。アンジェラは美しいエメラルドグリーンの瞳だが、その子は太陽に輝く海のような青い瞳をしていた。

子供らしい無邪気な笑顔。

「……わからないわ。でも、この部屋の持ち主みたいね」

「だったらどうして、私達がこの部屋使っているの？」

ネーナの問いには答えられない。何も知らないから。

何も言わずに写真たてを机の上に戻す。

この写真の子が誰なのか、知らないと言えば嘘だが、もうひとつ引つかかることがある。

「ねえ、ネーナ。アンジェラの言ってたことだけど」

「なに？」

「ここに住む理由よ。さっきはデメリットは無いって言ったけど」

「あるの？」

「いえ、今のところは無いわ。でも話が噛み合っていない」

そうだ。話がおかしかったのだ。

ここに住む理由となれば、もっと他の理由があるはず。「血の繋がった唯一の姉妹をなくしたくない」というのも理由には間違いないが、それだけでここに無理矢理住ませる理由はない。

「あの言い方だと、もっと他に理由があったはずだわ」

二人は悩む。きつと何かあるはずなのだ。

「………悩んでも仕方ないわね。直接聞きに行きましょう」

そうレイラが切り出した時、

「それはちょっと止めてほしいかな」

突然扉が開き、そこから二人の女性が入ってきた。

——いや、正確には女性型の機械人形オートマターが入ってきた。

「彼女にはいろいろあるのよ。でも直接聞くのは止めてあげて」
「その代わりに私達が説明するわ」

二人の機械人形はそう言って扉を閉めた。

第8話 写真の子（後書き）

ちよつと短いのかな？やっぱりちよつと長いか；

誤字・脱字、文章がおかしいなど、いつでもご報告ください。

また、アドバイス・コメントも頂けたら泣いて喜んで踊ります
↑

第9話 他の理由

「私はレイって言うの。こっちが妹のメイ」

二体の女性型の機械人形オートマタは言った。

レイと言われた方は黒い中国つぽい服を着ていた。短パンにニーソックスだ。特徴的なのが、左肩から垂らした赤い三つ編み。

メイは同じく赤い中国つぽい服で短パンにニーソックスだった。またレイとは反対に、黒い三つ編みを右肩から垂らしていた。

レイラとネーナのことは説明する必要はないだろう。おそらくさつきも同じ部屋にいただろうから。

「説明してくれないかしら。他の理由を」

レイとメイは窓によりかかるように立ち、レイラはベッドに座った。ネーナはと言うと勉強机の椅子に座っていた。

メイが口を開く。

「あなた達はさっきいた部屋で何体の機械人形の気配を感じた？」

「6体……」

レイラの答えにレイが頷いた。メイが続ける。

「アンジェラはね、まだ6歳ぐらいの時かしら、5年間感情を捨てられなかった双子の機械人形が壊される瞬間を目にしているらしいの。私達がここに住むようになってまだ一年だから、『聞いた』って形になるのだけれどね」

レイラもネーナも何も言わなかった。ただ黙って話を聞くだけ。別に反応を期待していたわけでもないらしく、メイは続けた。

「アンジェラが言うには、その時の機械人形の殺され方は最悪だったらしいわ。今は二体とも同時に壊してるらしいのだけど、当時は姉か妹、どちらか一方を粉々に砕いてからもう一体も壊してたらしいの。人間で言えば、目の前で姉妹が殺されるのを無理矢理見せられてから自分が殺されるのと同じよ。もし姉妹が自分より先に死んでしまった時の絶望感ってわかる？」

問われても尚、レイラとネーナは黙っていた。それに対し、レイが肩をすくめる。

「アンジェラが見た機械人形達もね、残された一体がまるで人間のように涙を流して、先に壊された機械人形の名前を必死に呼んでたそうよ。人間なら絶対にする行動ね。でも軍は、人間なら酷だからと言ってしない殺し方を機械人形なら当たり前のように実行した。それを見て以来、壊される瞬間を見ることは無くなったそうだけど、風のうわさで逃亡した機械人形達も同じ末路をたどると聞いて私達を保護するようになったのよ」

「……つまり、ただのボランティアね」

「そう言われたらそうね」

レイとメイの二人が同時に肩をすくめる。やはり双子だ。

つまり先ほど話していた『姉妹を守りたかったら』といのも間違いはなかったわけだ。

「じゃあここに住んでる機械人形も全部双子なの？」

ずっと黙っていたネーナが乗り出して聞いた。

「全部ではないわ。メイドのように動いている普通の機械人形の方が多いくらい。でも、そうね。アンジェラの傍にいるのは全部双子だわ」

レイが答えた。それにネーナが「へえー」と感嘆の声を吐き出した。

「今ここにいる双子の機械人形は？」

「あなた達を含めると8体になるわね」

相当な数だ。一体いつからこれだけ集めるようになったのだろうか。一年で双子が生まれるのは大体3組から5組程度だ。8体ともなれば3年近くは経っているだろう。

外ではパーティーが終わりに近づいてきたらしく、音楽は流れていなかった。聞こえるのは人のざわつきだけ。

その様子を見てメイが時計を眺める。時刻は21時ぐらい。

「そろそろ戻りましょう、レイ」

「ええそうね」

レイとメイは扉に向かった。それをレイラが何も言わず見送る。が、ネーナが二人の足を止めた。

「待って！」

二人がネーナの方を振り返る。

ネーナは先ほどの写真を二人の前に差し出しながら、

「この子、だれ？」

と、アンジェラの横の女の子を指さした。

「っ！」

それを見たレイとメイは何故か息をのみ、そして周りを見渡した。

「……まだ“ジュリア”の写真が残ってたなんて」

「きつとアンジェラよ。私、前にこの写真を引き出しにしまったわ」

「あの、話がわからないんだけど」

ネーナを置いて話していた二人はまるで何もなかったかのように、

「ごめんなさい。このことはまた日を改めて話すわ。今は、ちょっと……」

そう言い残して、二人は出て行った。

第10話 誕生日

窓から太陽の光が射していた。

「うん、ん……」

昨日の夜、気づいたら眠っていたらしい。オートマター機械人形は寝るということが必要としないが、それでも寝るとエネルギーの回復につながる。牢屋の中でもいつもネーナは寝ていた。

「あれ、お姉ちゃん……」

ネーナはベッドの上で寝ていたらしいが、レイラが眠っていたのかは知らない。だが少なくとも、この部屋にはいなかった。もう起きたのだろうか。

レイラがいないのは気になるが、じっとしていても仕方ないので、ネーナはベッドを下りて廊下に出た。

丁度その時、廊下で黒い三つ編みの機械人形と会った。確かメイと言ったはずだ。

「おはよう。寝てたの？」

メイがお姉さんのように話しかけてきた。

ネーナがこくん、と頷く。そして、

「お姉ちゃん知らない？」

「お姉ちゃん……」

メイの目がみるみる大きくなっていく。何かおかしいと言っただろうか。

と、突然メイが笑いだした。

「な、何？何か変なこと言った？」

「いいえ、別におかしくはないわ。ただ、双子なのに『お姉ちゃん』って呼んでるなんて、珍しいから。やっぱりいるのね、『お姉ちゃん』って呼ぶ機械人形が他にも」

まだメイは笑っている。だんだん恥ずかしくなってきた。

「あの、それでお姉ちゃんは？」

「ああ、そうね。ごめんなさい。あなたのお姉さんは見てないわ」
「そう……」

「食堂に朝食用意してるから、後で来てね」

「どうやらそれを言いに来ていたらしい。言うとメイはネーナの横を通り過ぎた。」

「むう。お姉ちゃん、どこ行つたのよ……」

*

「はい、どうぞ」

こんな朝早くに、突然ノックがした。普段なら朝食に行く時間なので起きていてよかった。

入ってきたのは昨日やってきたばかりのレイラだった。妹は一緒ではないらしい。

「どうしたの？こんな朝早くに」

「それは申し訳ないと思うわ。でも話があつて」

「そう。そこに座つて」

「結構よ。すぐに出て行くから」

少し部屋の中が寒い。アンジェラは椅子に掛けてあつたブランケットを羽織つた。

「何？」

「“ジュリア”のことよ」

突然レイラの口から出るはずのない名前が出た。わずかに眉をひそめる。

「……どこでその名前を？」

「昨日の夜、レイとメイからあなたが私達をここに住ませる“もう一つの理由”を聞いたの。その帰り際にね、ネーナが一枚の写真を

二人に見せた。それを見て呟いてたのよ。『ジュリアの写真が』ってね」

そう言われて思い出す。

確かあの部屋は、ジュリアがいつ帰ってきててもいいように、いつもきれいに掃除して、しまってたはずの写真も机の上に置いたのだ。

「ジュリアって誰？」

レイラの鋭いオッドアイが輝く。

アンジェラはため息を一つした後、正直に答えた。

「……ジュリアは私の妹よ。昨日で8歳になったわ」

「そのジュリアは昨日見かけなかったけれど」

「そりゃそうよ。だってジュリアは——もうここにはいないもの」
「？」

「この街ってね、おかしいのよ。“一家に産んでいい子供は一人”。そういうのがあってね、二人目以降は7歳の誕生日の日に家から出なきゃいけない法則があるの」

レイラは何も話さない。返ってそれが苦痛に感じた。

「でも家を出てから一年、つまり8歳の誕生日の日に家に帰ってくることが出来る。その時に自分の家で暮らす覚悟を決めれば、貴族ではなく養子として、そこで暮らすことが可能なの。だからどこでもそうなんだけれど、二人目以降の誕生日にパーティーを開いて子供を迎えるの。昨日のパーティーもジュリアの誕生日だったから、開催されたのよ」

「……けれどジュリアは帰ってこなかった」

黙っていたレイラが口を開く。ここは黙ってて欲しかった。いや、言ってもらえて助かった。自分で言えば涙があふれたから。でも他人に言われても涙が零れそうになる。

「そう。ジュリアは帰ってこなかった。それともう、“一人で生きる”って意思表示なの。ジュリアはもう二度と帰ってこない。もう会えないのよ……」

レイラに顔が見えないように俯く。もうそろそろ涙が抑えられなくなる。

レイラは黙っていた。こちらを察してくれたのか、ただそこにいるだけだ。

「……ごめんね。こんなこと言って」

「構わないわ。それに、聞いたのは私の方だもの。ただ一つ言わせて頂戴」

謝罪と同時に、レイラは言った。

「そんなに妹が愛おしくて会いたいなら、自分から会いに行きなさい」

アンジェラの目から涙が一粒、床に向かって落ちた。

第10話 誕生日（後書き）

日付変わったけど投稿する。
つまりは本日一つ目の投稿。

第11話 姉妹を想う気持ち

涙が床で跳ね返る。

次の言葉が紡ぎだせなかった。ただ涙が頬を伝うだけ。

「…………妹に会いたい気持ちはわかるわ。でも向こうに会いに来てもらうのを待つ？馬鹿馬鹿しい。そんなに会いたいなら自分から行動を起こしなさい。姉ならそれぐらいできるはずよ」

何も言わないアンジェラにレイラはそう言って出て行った。
気持ちが試行錯誤する。

私はアンジェラ・ウィンストーヴ。

ブランド洋服会社の社長令嬢。

貴族の長子は15歳の誕生日まで公の場に出ることは控えなければならぬ。
ばならない。

15歳の成人の儀より、自由を保障される。

二人目以降は7歳の誕生日に家を出なければならぬ。

ただし8歳の誕生日の日のみ、帰ることが許される。

その時に養子として住むのは認めよう。

ただし帰ってこなかった場合は、二度と家には帰れない。

“会いたければ自分から行動を起こしなさい”

レイラの言葉が深く刺さる。

そうだ。自分から動かなきゃ。

馬鹿みたい。

妹に帰って来てもらうのを待ってるなんて。

私、お姉ちゃん失格ね。

ジュリア。

こんなお姉ちゃんでも、会いに行くことを許してくれる？

アンジェラは涙を拭いた。

次に顔を上げた時には、今までの情けない表情は消えていた。

*

廊下に出て、扉を背にレイラは立っていた。

そこにパタパタと誰かが走ってくる音がした。

「お姉ちゃん………？」

ネーナだ。起きたらいなかったレイラを探していたのだろう。

ネーナの姿を認めると、レイラは扉から背を離して自分の足でネーナに向かった。

そしてそのままネーナに寄りかかった。

「お姉ちゃん？」

「ごめんなさい、ネーナ。少しだけこうさせて」

ネーナの位置からレイラの表情はうかがえないだろう。逆に言えばレイラもネーナの表情は分からない。

「………何か、あったの？」

「いいえ。何もないわ。ただ一つ聞かせてくれないかしら」

「何？」

一呼吸置く。体重をネーナに預けたまま言った。

「私は今、ちゃんとあなたのお姉ちゃんで、居れてるかしら」

ネーナの息がほんの少し、詰まるのがわかった。だがすぐに柔らかい声で、

「大丈夫。お姉ちゃんはお姉ちゃんだよ。私のたった一人の、ね」
よかった。

先ほどアンジェラには少きついことを言った。だが言ったことと同じことを、自分は出来ている自信がなかった。愛おしい妹の姉でいらなくなるのが怖かった。

「私からも聞いていい？」

ネーナがレイラの背中に腕を回しながら言った。

「お姉ちゃんのこと、『お姉ちゃん』って呼んじゃ、おかしいかな」
「・・・・・・何よ、そんなこと？」

何を当然なことを。

「『お姉ちゃん』と呼んで頂戴。そっちの方が、嬉しいわ」
「・・・・・・ありがとう」

生まれて初めて、自身の目から涙が流れた。
また、服越しにネーナの涙の冷たさも感じた。

第11話 姉妹を想う気持ち（後書き）

ズドンと暗い話に。。

誤字・脱字、文章がおかしいなど、いつでもご報告ください^^d

第12話 食事の場

「ひとつ、聞いてもいいかしら」

朝日が差し込む食堂。

そこに今、人間のアンジェラと機械人形オートマターが6体そろっていた。

アンジェラが食事の手を止めて「ん？」と首をかしげた。

「どうして私達まで一緒に食事をしているのかしら？」

今レイラの前に並んでいる豪華な料理の数々。一人一人のために作ったとは思えない量だ。

その料理達をネーナ、レイ、メイ、他二体の機械人形が当たり前のように食べていた。ネーナはただの好奇心からだと思われるが、他の四体が当たり前のように食べてるのは納得がいかない。

レイラの言葉に一瞬ネーナの動きが止まるが、それでも食べる手は休めなかった。

「もしかして、そんなことを気にして食べてないの？」

アンジェラが笑顔のまま言った。

「そんなことって！私達は食べる必要がないのよ！？眠る必要だつてないわ。なのにどうして、わざわざこんな！」

「そんなに怒らないでよ」

アンジェラがスープを一口すすった。

「確かに、あなた達は眠りが必要としないし、食べる必要はないわでも眠るとエネルギーが回復するのと同じで、何かを食べるとエネルギーが回復するって考えたことない？」

「ないわね、残念ながら」

「そう。あなたの《力》は花卉だそうね。ネーナから聞いたわ」
きつ、とネーナを軽く睨む。当のネーナはびくつとして目線をそらした。

簡単に能力を教えるなんて、心を許し過ぎだ。

「レイとメイの能力はね、『筋力強化』なの。見た目にはわからないけど、必要とあらば筋肉が強化されて大の男の人の倍以上の力を出せるようになるわ。でもそういう能力ってね、不便なことに人間と同じで体力を使うの。もちろん眠れば回復するけど、それって戦いが終わってからよね。それだと遅いわ。だからこうやって最初にエネルギーを蓄えておくの。そうすることで、二人はもっと強い力を発揮できるわ」

「食べなくても大丈夫なんだけどね」

レイがつけ足した。本当にただ食べているだけのようだ。

「それに、家族みんなで会話できる時間って、食事の時ぐらいでしょ？」

それが本当の理由か。

人間らしい人間だ。呆れる。

「そういう割には他の二体が居ないみたいだけど」

「ああ、あの子たちは……………」

アンジェラが食事の手を止めて俯いた。

「……………いろいろあるから」

いろいろある。

機械人形にも人間のように複雑なことがあるのだろうか。

俯いていたアンジェラが顔を上げる。すでに笑顔に戻っていた。

「さ、食べましょう」

そう言って再び手を動かす。

レイラは目の前に置かれたスープを見た。

薄黄色で皿の底が透けて見える。その周りに浮かぶ細かく刻まれた野菜やクルトン。これらを人間は摂取しないと生きていけないのだ。

仕方なくスプーンを持ちスープをすくった時、

「クリスとルイスはどこ!？」

思いっきり扉を強く開け放ち入ってきた女性がいた。

第13話 母親

「クリスとルイスはどこ!?」

突然入ってきた女性はどこか慌てた様子で、綺麗に結った美しい金髪は一部ほどけかかり、汗で化粧も落ちかけていた。

女性は入ってくるなりすぐに二つの椅子の元へ向かった。

そこに座っていた二体の機械人形オートマターの腕を掴み、無理矢理立たせた。見た目的にまだ小さい二体の機械人形は女性の手を振りほどこうと必死になっている。

「あなた達、前に言っておいたでしょう!?今日は大事な服の発表会があるって!なのにこんなところで何を悠長な……!」

「やめてください、お母様!!」

慌てたようにアンジェラが椅子を立った。そして女性の元へ歩み寄っていく。

二体と女性の間に割って入り、

「クリスとルイスは会社のためにいるわけではありません!私が作っただんです。この子達の親は私のはずでしょう!？」

「アンジェラ、いくらあなたが作ったと言ってもあなたはまだ成人の儀を終えてない子供。あなたには関係ないわ。そこをどきなさい!」

「嫌です!クリスとルイスは私の……!」

「しつこい!」

女性が右手を振り上げた。そのままその手はアンジェラの左頬を叩きつけた。

「!」

部屋に響き渡る音。その音でまだ椅子に座っていたレイラ、ネーナ、レイ、メイは立ちあがった。

叩いた手を握り締め、女性が尚も言い放つ。

「何度も言ってるでしょう！あなたはまだ子供！あなたに機械人形を自由に扱う権利なんてないのよ！」

再び一体の機械人形の手を掴む。

その手を一番近くで見えていたメイが掴んだ。女性が驚いてメイの方に顔をやる。

手を掴んだメイの目はとても冷めていた。

「お言葉ですが、ディアナ様。クリスとルイスを作ったのはアンジエラ本人です。当初の企画の注意事項を覚えていますか？その中には“成功した機械人形は作った本人の自由に扱ってよい”とありました」

「それはまだ子供のアンジエラには関係が！」

「子供だから関係ないとか、一人の人間として恥ずかしくないのですか？大人も子供も関係ない。同じ人間でしょう？」

ぐつとディアナが唇を噛みしめる。そして無理矢理メイから手を振りほどいた。

「うるさいわね、人形ごときが！お前ら機械人形なんか人間に人間の気持ちかわかってたまるか！」

部屋の空気が変わった。

一瞬のことだった。

“人形ごとき”

人形ごとき？

違う。私達は違う！

私達は意志を持つ双子の機械人形。人間の感情を持っている！

「な、何よっ！」

突然の空気の変動にディアナがうろたえる。

「人間ごときに——」

ゆっくりと、レイラが顔を上げた。

ディアナの顔が恐怖にひきつる。
「私達の気持ちかわかるかっ!!」

レイラのまわりで黒い花弁が舞い踊る。

「やめてっ!」

突然の声に皆が硬直した。花弁の動きが止まる。

レイラの動きを止めたのは、まだ俯いたままのアンジェラだった。
「やめて。お母様を傷つけないで」

す、とアンジェラが顔を上げる。左頬は赤かった。

「お母様。メイの言うとおり、クリスとルイスを作ったのは私です。
二人を自由にする権利を持っているのは私です。あの企画が会社の
ためのものだとしても、私がこの子達の母親です。なので、どうか・

・・・・・」

「・・・・・ふん。こんな我がままな子だとは思わなかったわ。

ジュリアの方がまだ可愛かったわね。勝手になさい」

ディアナは誰にも止められず部屋から出て行った。

静かになった部屋。

花弁たちが自然に消えて行った。

そんな中、アンジェラが呟いた。

「ごめんなさい。一人に、して」

言つとふらふらと部屋から出て行った。

第14話 親子の印

アンジェラが部屋を出て行ってから、残された機械人形達^{オートマター}はただ椅子に座って何も話さずに過ごしていた。

やがてレイラとネーナのまだ知らない機械人形が二体立ち上がった。

「あの、ごめんなさい！ 私達のせいで……」

「私達のせいで、折角の食事が……」

二体は今にも泣きそうな顔で立っていた。それをレイがなだめていた。

「……あなた達が、クリスとルイス？」

「あ、はいっ」

レイラの声に、慌てたように一体が返事をした。

返事をした機械人形は黒い髪を肩のところで切りそろえていた。

青い瞳が遠く離れていても輝いて見えた。

「あたしがクリスです。こっちがルイスです」

「妹のルイスです」

ルイスと名乗った方は金髪で、同じく肩のところで切りそろえていた。ただクリスと違うのはその髪が少しふんわりとしているところだ。

二体は仲がいいのか、ずっとお互いの手を握っていた。食事の時はさすがに離していたが、アンジェラがディアナと対立しているときも二人で身を寄せていた。

レイラはため息をひとつと言った。

「教えてくれない？ あなた達のこと。さっきの話だと、あなた達は軍から抜け出したのではなさそうね」

二人は顔を見合わせる。次にレイとメイに目をやり、許可を求め

ているようだった。

レイとメイの二人が頷くと、クリスとルイスがレイラとネーナのところに歩いてきた。

こうやって近くで見ると二体はとても小さくて、立つとレイラの胸のあたりまでしか身長がなかった。

「あたしとルイスはマスターに作られたんです。数ヶ月前にウィンストーヴの会社内の企画で、『機械人形を作る』というものが開催されたんです。会社の目的は機械人形をモデルに服を作って、その服の披露会に機械人形を出すことだったんです」

「その企画にはまだ子供であったマスターも参加可能でした。なので参加したんです。参加者は社員もいたんでおよそ500人。その中で成功したのはたった一人、マスターだったんです。そしてその時に生まれたのが、あたしとクリス」

「まだ子供なのに、と噂が広まっていた。あたし達の母親になったマスターはあたし達をレイとメイと同じように傍に置くことにしたんです。でもディアナ様がそれを許さなくて……」

「それでさっきみたいな喧嘩が起こったのね」

レイラが結論を口にする、クリスとルイスは同時に頷いた。

「これがあたし達がマスターの物である印です」

言う二人は、自分のスカートをめくり、右足の方のスカートを腰の近くまで持ち上げた。

クリスが足の一部を指さす。

よく見ると、そこに「Angelia」と記されていた。

「これは……!!」

「マスターの名前です。軍以外の機械人形はこうやって、その身にマスターの名前を刻むんです。これで、あたし達は親子であること

を証明できるんです」

ばっ、とスカートを下す。中のフリルが膨らみ、スカートの動きを鈍くさせた。

「でもさ」

クリスとルイスの向こうで、椅子の上で膝を抱えたネーナが言った。

「あのディアナって人の言ってたこと、許せないよ。母親は、アンジェラなのに」

そう言っ たきりネーナは黙り、その顔を抱えた膝の中に隠してしまった。

第15話 白い霧

色とりどりの薔薇が咲く庭園。

そこで楽しそうに走り回る少女。

「——ジュリア」

走り回る少女——ジュリアにアンジェラは呼びかけた。ジュリアはすぐにアンジェラの元へ走ってきて、その勢いで抱きついた。

「ジュリア、明日の誕生日、何が欲しい？」

ジュリアは首をひねってしばらく考えていた。やがて、

「何もいらない！ジュリアにはね、アンお姉さまが居てくれればそれでいいのっ！」

影のない無邪気な笑顔でジュリアは言った。

そんなジュリアの頭を、アンジェラは愛おしそうに撫でていた。

*

「っ！？」

突然視界が開けた。

先ほどの庭園は消え、変わりに周りはミルクのように真っ白で霧がかっていた。

（そうだわ。私、あのあと部屋に戻って、ベッドに入って……）

ではさっきの庭園は夢だったのだろう。

ジュリアの、7歳の誕生日を迎える前日の夢――。

懐かしい夢を見たものだ。あの時のジュリアの言葉はとても嬉しかった。心に響いた。

だが逆にその言葉が、アンジェラを縛り付けるようになっていた。

「ジュリア………」

ふと、視線を周りに移す。

真っ白で霧がかった世界。ここは一体どこだろう。まだ夢の中だろうか。

試しに手の甲をつねってみた。痛い。夢ではないらしい。

オートマター
機械人形の仕業だろうか。

「これが、貴方の一番想う人………」

突然、背後から声がした。

振り返ると、白い少女が立っていた。髪は雪のような白で肌も殆ど色を持っていない。服も白い。唯一色がついてるのは赤い瞳と髪飾りのピンクのリボンだけだ。だがそのリボンも薄く白に近い。

手には水晶のようなものを持っていて、少女はそれを見ていた。

「………だれ？」

「だれ………」

アンジェラが聞くと少女が持っていた水晶が消えた。まるで霧のように。

「私はサン。実体をもたない感情を持った機械人形」

そう言って一礼する。

「サン太陽――？感情を持った、機械人形？」

「はい」

「だったらもう一人は？感情を持って生まれるのは双子の機械人形だけよ」

言った瞬間、サンの表情が暗くなった。

そして小さく言った。

「お願いがあります。アンジェラ・ウィンストーヴ様」

（私を、知ってる……！！？）

サンは両手を胸の前で組み合わせて、目を瞑って懇願するように言った。

「妹を——^{ルナ}月を探してください」

第16話 妹

“妹を——月探して下さい”

目の前の白い少女はそう言った。

懇願するかのように手を組んだサンはぎゅっと目を閉じていた。アンジェラはどう答えるべきか分からずにいた。

「……」 “実体をもたない” って、言ったわよね。それはどういうことなの？」

サンが目を開けた。手は組んだままで言った。

「私達は感情を持って生まれ、更に5年間感情を捨てきれませんでした。そのために処分を決定されました。でも私とルナの能力は『人と人の中を行き来すること』。だから、なんとか体が壊れてしまいう前に、見物に来てた人達の中に逃げたんです。でもその拍子にルナがどこに行ったのか分からなくなっ」

サンの瞳が悲しそうに揺らぐ。

「いろんな人の中を渡り歩いて、やっと私に合う器——つまり貴方を見つけた」

「器？」

「はい。自由に行き来出来ると言っても、相性があります。なかなか相性が合う人がなくて、すぐに他の人に移らないといけないんです。でも貴方の体は私と合った。私と貴方はどこか共通点がある」 共通点。それがどこなのか、アンジェラはもちろん、サンにも分からないらしい。

「私達の体はもうありません。今は貴方の中にしか居れないんです。きっとルナも同じはず。実体を持たない私は自らの足でルナを探することはできないんです。貴方に頼るしかないんです。お願いします！どうか、ルナと一緒に探してください！無償^{タダ}では言いませんだから！」

サンは必死なようにアンジェラに頭を下げていた。

慌ててサンに顔を上げさす。

「理由は分かったわ。でも無償^{タダ}じゃないって………」
サンが顔を上げて言う。

「ルナを探して頂く代わりに、貴方の妹・ジュリアを探します」

「！？」

「先ほど私は言いました。私と貴方はどこか共通点がある、だから相性が合う、と。おそらくルナと相性が合うのも、貴方の妹だと思います。ご存じの通り、機械人形^{オートマター}と人間の気配は違います。私が貴方の中に居るということは、今、貴方から放たれる気配は機械人形と人間の気配が混ざっています。今の貴方と同じ人を探せば、その人の中にはルナがいます。その人物は——」

「——ジュリア」

サンが頷く。

「確証はありません。でも97%の確率でそのひとは貴方の妹です」
サンの真剣な目。あまりにも白いために消えてしまいそうだが、真剣な赤い瞳がその存在を示していた。

アンジェラはしばらく考える。

確かにサンの言っていることはこちらにもサンにとってもプラスになることだろう。

それに、サンの提案はアンジェラが固めた決意と一緒に。

「わかったわ。サン。貴方の妹を探しましょう」

サンの瞳が嬉しそうに揺らいだ。

すっ、とアンジェラに寄ってくる。足音はなく、まるで泳いでいるようだ。

「ありがとう、アンジェラ」

近くで見るサンの笑顔はその名の通り、太陽のような輝きを放っていた。

第17話 目の変わり

初めて会った時とは打って変わって眩しい笑顔を見せる、サン。それに対してアンジェラも微笑み返した。

「それで、私はどうすればいいの？」

当然のことだが、妹を探すと言ってもアンジェラには気配などわからない。双子の機械人形オートマターを見つけるのは大抵感か雰囲気からだ。

「貴方はジュリアを探してくればそれでいい。ルナは私が貴方の中から見つけます」

「私の中？」

こくり、とサンは頷く。そしてアンジェラの手を握った。

手の中に物体の感触があった。サンの手が離れるとそつと手を開く。

そこには満月のペンダントが光っていた。

「それを常に身につけてください。そのペンダントが私の目の変わりとなり、私はそこから外の世界を見れます。また、気配も感じることができます」

淡々とサンは説明した。

アンジェラはただ手の中のペンダントを見つめた。これがサンの目の変わりとなるのだ。

す、とサンがアンジェラから距離をとった。

「サン？」

「そろそろ時間切れです。人間である貴方は長時間、私の世界に滞在できない」

やはりここはサンの世界なのか。よくわからないが、アンジェラの中には今、“アンジェラの世界”と“サンの世界”が共存しているのだろう。

アンジェラが頭の中を整理していると、突然白い光が現れた。その光の根源はアンジェラ自身の足だった。

「!？」

光は進行を続け、徐々に足全てを包み込んだ。

「大丈夫。危害はありません」

当然のようにサンは言うが、初めてこれを目にする者からすればとても落ち着いていられない。

やがて光はアンジェラの視界をも半分近く隠し始めた。

「私のことは他の機械人形に言っても言わなくても、どちらでも構わない」

最後に聞こえたのは、そんな言葉だった。

*

灯りが一つもついていない一室。

そこに二体の機械人形がいた。

一体は少し長めの金髪で碧眼の少女だ。紫と白を強調された服が目立つ。

もう一体は機械人形にしては珍しい、男だった。まだ少年のような顔立ちで、眉間にしわを作っていた。服は特別目立つわけではないのだが、赤っぱい髪が何よりも存在感を出していた。

何を考えているのか分からない瞳で少女が呟いた。

「……………どうするの」

聞こえるか否かという小さな声に、少年は普通に答える。

「壊す。あいつらも同じなんだ。結局、機械人形なのに人間と生きることを選んでる」

「……………いつ」

ぼつりぼつりと紡がれる小さな言の葉と、怒りに満ち溢れる言の葉。

互いに交わされる言葉はとても幸せな言葉とは思えなかった。

「……………今はまだ動けない。何かきっかけを見つけないと……………けど」

少女が顔を上げる。空虚な瞳が少年を映す。

「……………大丈夫、もうすぐだ。もうすぐ、あの人間が動くはずだ」

暗い部屋の中で、4つの緑の光が輝いた。

第17話 目の変わり（後書き）

誤字・脱字、文章がおかしいなど、いつでもご報告ください。

第18話 赤と黒の三つ編み

「クリスとルイスのことは説明の必要はなさそうね」

そう切り出したのはメイだ。

アンジェラが自室に戻ってから、一同は食器を片付け、再びテールの椅子に座っていた。特に話題がなく沈んだ空気を、今メイが払うかのように切り出したところだ。

クリスとルイスのことは大体わかった。結局二体は会社の企画でアンジェラによって生み出され、マスターであるアンジェラと行動を共にしている。だが「会社の企画だから」という理由でディアナは二体をアンジェラから離そうとしていた。そういったところだろう。

「じゃあ後は私達とあの二体のことだけね」

言われて思い出す。まだレイとメイ、それに残りの二体のことを聞いてない。

「私達の能力が『筋力強化』ってことは、聞いたわよね？」

レイラはこくりと頷く。能力のために食事をしていたはずだ。

だがどうやって脱獄したかなど、そういう類のものは聞いていない。

レイラの考えを読み取ったのか、メイが続けた。

「私達はね、一年前に軍を脱獄して街中をさま迷ってたのよ。数日間さま迷っていると、偶然アンジェラに出会った。そのときはまだジュリアが居たわね。たまたま二人に話しかけられた私達は逃げようとしたのだけれど、相手は『軍に差し出す』などといった意図は全くないと答えたのよ」

「それでそのままウィンストーヴ家についてことね」

なんて単純な話だ。それだとレイラとネーナも似たようなものだ。

だがメイはこの話を長く話すつもりはなかったらしく、すぐに別の話題に移った。

「レイラとネーナはお互いの眼を交換したのよね」

何故それを、と最初感じたが、考えてみれば初めて会った時の「痛覚」の話で「眼を交換した」と言っていた。

「私達はね、交換じゃないけど、髪で繋がってるの」

「髪？」

レイラの言葉にメイは頷くと、レイの隣に立った。

右肩に垂れさがる黒い三つ編みを撫でながら、メイは言った。

「私達は生まれた時、力が私のみに偏っていた。それも《力》だけ。姉のレイには力の欠片もなかったの。どのみち感情があつたから牢屋に入れられたのは変わらないけれど。私達も貴方達と感情だけは消したなくて、力がお互い均等に分かれれば、もしかしたら出られるんじゃないかと考えたの」

「そこで私は本来両肩に垂れていた二つの赤い三つ編みを切り落とした。メイも左側の黒い三つ編みを切断したの。そしてそれを、私の左側に接続した」

「そうすることで私の黒かった三つ編みはレイの赤に変わっていき、力も均等に分かれた。《頭脳》の力は持ってなかったけど、最近では別々に使用したりするから賭けにでたの。結局、採用されなかったけどね」

「でも私達には時間がなかった。あと数カ月で私達は処分される予定だった。だから、能力を生かして脱走したの」

時節レイが会話に加わりながら、メイの説明を援助していた。

特に脱走の際の深い話は無いらしく（レイラとネーナにもこれと
違って無いのだが）、レイが次の話に移そうとした。

だがその前に、

「マスター、調子どうなんでしょうか……」

マスターの身を案じるルイスの言葉によって、一同は一度アンジ
エラの部屋に向かうことになった。

第19話 現実

サンの世界から抜けてから、次に目に入っただのは自分の部屋の天井だった。

どうやら元の世界——現実に戻ってきたらしい。

おそらく庭での出来事は夢で間違いないだろう。だがサンのことは現実にあったことは確信を持ってない。夢の続きで新しいものを見ていたということもあり得る。むしろそっちの方が頷けるだろう。
オートマター
機械人形の能力は個々それぞれ違う。似ているものもあるが、人の中を行き来する能力”など初めて聞いた。

やはり信じられない。夢、だったのだろうか。

アンジェラはゆっくり体を起こした。すでに頬の痛みはない。ふと視線を布団の上に下ろしたとき、自分の首からぶら下がっている物に気づいた。

消える直前にサンがアンジェラに渡した、満月のペンダント——。

胸元で光る満月は、窓から射す太陽の光に反射して輝いていた。それに触れながら改めて実感する。

やっぱりあれは、夢じゃ、なかったんだ——

まだそんなに時間は経ってないと思っていたが、それでも二時間ほど眠っていたらしい。太陽も大分高く上がっていた。

アンジェラがただ何も考えず窓の外を眺めていると、扉をノックする音が聞こえた。

「はい？」

もしディアナやお父様が来たのだとすると、このような応接に怒るだろうが、基本的に両親は自らの足でアンジェラの部屋までは来ない。おそらく機械人形だろう。

「あの、マスター、お体は大丈夫ですか？」

どこかオドオドとした声。クリスだ。

「大丈夫よ。入って構わないわ」

その声に静かに扉が開かれる。現れたのはクリスとルイスの他、食事の場に居た4体の機械人形達がいた。

扉が完全に開かれ、アンジェラが全員の姿を確認したとき、機械人形達の表情が一変した。

「？ どうしたの、そんな幽霊でも見るような顔して」

軽くとぼけてみたが、その声に6体はなんの反応も返してくれない。

やがてレイ、メイ、レイラ、ネーナの間に緊張が走る。

「……アンジェラ、どうしてあなたの中から、機械人形の気配がするの」

混乱と緊張と不安が入り混じった声でレイが静かに問いただす。

（——サンが言っていたのはこういうことだったのね）

別れ際にサンはこう言った。

“私のことは他の機械人形に言っても言わなくても、どちらでも構わない”——と。

それはいくらアンジェラが、“自身の中にサンがいるのを隠しても隠しきれない”、とそう言っていたのだ。

だが何故こういうことになったのかは説明しなければ伝わらない。

「ちゃんと話すわ。入って頂戴」

アンジェラの声に、ようやく機械人形達は扉を閉め、それぞれ椅子に座ったり壁に寄り掛かったり、またアンジェラの傍に寄ったりと行動を起こしてくれた。

第20話 小さな決意

オートマター
機械人形達がアンジェラの部屋に入ってきて30分。アンジェラはゆっくりと先刻あったことを一通り話した。

機械人形達はしばらく何も話さずにアンジェラの声だけに耳を傾けていた。

「つまり、あなたはサンの妹を探さなければならぬと。そう言いたいよね」

レイがアンジェラの説明を一つにまとめた。アンジェラが頷く。
「それで、あなたは探すの？」

続いてレイラが言った。これにもアンジェラは頷いた。

「探すわ。サンは私の中にしかいられないのだから、私が探さなきゃ誰が探すの」

「でもマスターはまだ成人の儀を終えてないので自由に行動出来ないのじゃ……」

ルイスが不安そうに言う。クリスも同じように見上げていた。

そんな二人の頭を優しくなでると、アンジェラはベッドから降り、窓の方に近づいた。

そして突然、レイラに向かって言う。

「ありがとう、レイラ。あなたのおかげで決心がついたわ」

機械人形達が首をひねる。だがレイラだけは分かり切った表情で座っていた。

窓辺に立つと、そっと胸元で光る満月のペンダントに触れる。触れたペンダントはただ冷たいだけだったが、窓から差し込む太陽の光によって暖かいものに思えた。

おそらく機械人形達からすれば、今のアンジェラの表情は逆行によつて見えないはずだ。

静かに目を瞑る。小さく深呼吸して再び目を開く。

顔を上げ、機械人形達の顔を見渡す。みな、次の言葉を待っていた。

「私は――」

ペンダントをぎゅっと握りしめながら、決めただけの決意を口にする。

「私はルナを探すと同時に、ジュリアを探すわ」

誰が何と言おうとも揺るがない、静かな、そして小さな決意を――。

*

さむい。

ここはさむい。まだ3月だから、冬の名残がある。

空は清々しい青空だというのに、そこには太陽の光が差さず、とても暗かった。

そこにいるのはボロボ布を纏う数人の人々。

中にはまだ子供だと一目でわかる小さな影もある。

小さな影はボロボロになった服のポケットからある物を取り出す。出てきたのはポケットに入れるには大きな、茶色に腐った林檎――。

いつの日かに貰った林檎。貰った時はとても赤く熟していた林檎。気づけばその林檎はとても食べられるようなものじゃなくなつて

いた。

だが影はその林檎を大切そうに両手で包み込む。

——これは、とても大切な

彼らが与えてくれたもの――

大切に大切に、林檎をポケットにしまっ
そして空を見上げた。

どこまでも青い空に浮かぶ白い雲。

今日は少し風が強く雲の流れが速い。

強い風が影の被るフードをたなびかせ、フードが頭からふわりと
落ちた。

空を見上げる瞳は、とてもとても深い蒼の瞳をしていた。

第21話 揺るがない

オートマター
機械人形達の間の空気が緊張感に満たされる。
その様子を、アンジェラはただ静かに見守った。

「ジュリアを探すって、屋敷を出るってことですか!？」

誰よりも先に我に返ったのはルイスだった。アンジェラの宣告に慌てて身を乗り出す。

その反応に他の機械人形達もそれぞれに反応を起こす。

場の空気が混乱に満たされようとした時、宣告したアンジェラが再び口を開いた。

「屋敷を出なければジュリアは探せない。そうでしょう?」

「……分かってるの、アンジェラ。ディアナ様みたいなことは言いたくないけど、あなたは成人の儀を終えていない。まだ己の身の自由は与えられてないのよ?」

レイの言葉にアンジェラが静かに答える。

「分かってるわよ、そんなの。勝手なことしたらきつとこっ酷く怒られるわ。でもそんなの百も承知よ」

揺るがない決意を力強く口にする。

「私は屋敷を出てジュリアを探す。お母様やみんながなんて言おうとも、出て行くわ」

機械人形達の位置からは窓からの逆光によりあまり見えなかったが、だがアンジェラの顔には子供ではない、大人の決意の表情が刻まれていた。

みなは何も言えずに固まっていると、たった一人、決意を分かっていたレイラがため息をついた。

「アンジェラ、その決意、絶対揺るがないわね？」

「ええ。感謝してるわ、レイラ。ありがとう」

「別に感謝されたいからアドバイスした訳じゃないわよ」

そっぽを向くレイラに、アンジェラは苦笑した。

「私は屋敷を出て行くけれど、みんなはどうする？ここに残るか、私と来るか。強制はしないわ」

双子達は互いの顔を見合わせる。

そして誰よりもアンジェラを母親として慕っている二体がベッドから飛び降り、アンジェラに抱きついた。

「私達もマスターと一緒にいきます！マスターは私達の『お母さん』なんです。母親について行って当然です！」

「マスターがどこに行こうとも、どこまでも一緒にします！」

無邪気な二つの笑顔がアンジェラの心を温かくさせた。

「……………ありがとう」

「私達も行くわ」

レイが口を開いた。

「私達を助けてくれたのはアンジェラだもの。命の恩人を助けるのが、今の私達の役目じゃない？」

「でもあまり無理はしないでね」

大人の表情を見せるレイとメイ。二人の言葉にアンジェラは頷いた。

残ったネーナがレイラを覗きこむ。

「どうするの、お姉ちゃん」

「ねえ、ネーナ。あなたは何を望んでこれから生きていきたい？」

突然のレイラの言葉にネーナが驚いていることが遠くからでも分かった。

「えっと、楽しく生きていきたい……」

「そうね、私もよ」

レイラが椅子を降り、アンジェラに向き直った。

「ここに残っても、きっと同じ日の繰り返しよ。だったら、少しでも楽しめる方を私は選ぶわ」

レイラの後ろにとことことネーナが近寄る。

二人の答えを確認すると、アンジェラは言った。

「明日の午後三時、この屋敷を出るわ。準備をしておいて」

第21話 揺るがない（後書き）

リアルでは「今日の三時」だったけど、この後の話を全部見て行くと、ゆうに20話ぐらい同じ日の話になっちゃうんで、強制的に変えてみる（笑）

リアルでは書かなかった話もちよっただけ入る予定なり。
予定だぜ、予定。。。

第22話 4つの碧眼

アンジェラの決意を聞いた後、アンジェラは準備があるからと部屋に籠り、機械人形達オートマターはそれぞれ与えられた部屋へと戻ろうとしていた。

メイも途中まではそのつもりだった。

レイの背中に声をかける。

「レイ、レイラとネーナにあの二人のこと教えてあげないと」

「・・・・・・一緒に来るかも分からないの？」

「それを今から確認しに行ってくるわ」

別にひそひそ話をしていたわけではないので、いつもと変わらないうちに会話すると、メイは先頭のレイラを追い抜いて先に進んだ。

「？メイ、どこに行くのかしら」

話は聞いていなかったようで、レイラが不思議そうにこちらを見ているのが分かった。

「今から残りの機械人形のところに行くのよ。その二人のことは私が説明するわ」

追ってレイの声が聞こえた。二人のことはレイに任せてメイは先に進む。

廊下を少し歩くと階段を上がる。一階分だけ上ると目的の部屋へと向かう。

立ち止ったのは他の部屋と何の変哲もない普通の部屋。その扉を三回ノックする。

返事はない。だが中で物音がするのは分かった。

そしてそれが、扉の影で武器を構えているのも。

「メイよ。話があつてきたの」

その声で武器の気配は消える。同時に静かに扉が開かれる。

明りもついてないしカーテンも閉め切っている薄暗い部屋の中で、4つの緑色の光だけが不気味に輝いている。

そのうちの二つがゆらり、と動き、一歩進み出たのが分かった。

「話って何だ」

声変わりするかしないかというまだ幼さの残る少年の声。その声はメイに対し、敵対心を向けているのが分かった。

「アンジェラがここを出て、ジュリアを探す決意をしたわ。正確には、ジュリアとアンジェラの中にいる『サン』という機械人形の妹の『ルナ』を探すんだけど」

「だからなんだ。関係ないだろ」

「関係ないわ。でも私達はアンジェラと共にこの屋敷に出ることにした。シエリル、ミシエル。あなた達はどうするの。ここに残って、居なくなったクリスとルイスの代わりにディアナ様の人形になる？」

「はっ。その言い方だと、ほぼ強制じゃねえか」

「そんなつもりはないわ。ただ選択してほしいの。アンジェラと来るか、ここに残るか」

少年は何も答えない。もう一体の方も一切発言せず、ただ傍観しているだけだ。

やがて少年が口を開く。

「いいぜ。一緒に行ってやる。だが条件がある」

「条件？」

「ああ。お前らはあの人間と一緒に口——ジュリアを探すんだろ？俺らは俺らで別に目的がある。俺らはそっちを優先させてもらうぜ」

メイはしばらく考えた。目の前の二人をじっくり観察する。
今までのこの二人の言動を全て思い出す。

「……いいわ。アンジェラにはそう伝えておくわ」
「ああ」

少年の声を聞くと、メイは部屋を出た。後ろ手に扉を閉める。
突然とても大きな疲労感がメイを襲う。

（ああ、やっぱり、あの子達は何かを隠している）

先ほどの会話で、以前から感じていた『何か』がじわじわと、確
信へと近づいていった。

第22話 4つの碧眼（後書き）

『何か』が分かるかなー？

こつこつ先へ繋げる『謎』って難しいよねー『何か』がバレてしま
ったら、うち泣くよ

第23話 指名手配

「この屋敷にはね、私達の他にもう一組機械人形オートマターがいるの」

メイが一人でどこかに行ってしまい、その間に食堂に戻ったレイラとネーナは初めて、もう一組の機械人形の存在を知らされた。いることに驚いたのではない。それに関して言えば、時々壁越しに全く知らない気配を感じていたので、居ても不思議ではない。更に加えると、メイが向かう先はおそらく機械人形だろうと予想は容易に出来た。

「その二体つてずっと姿を見せてないわよね。どんな双子なの？」
機械人形も第一印象は大事だ。それ次第ではマスターの扱い方が変わったりもするからだ。

一同が椅子に座つたのを確認すると、レイは言った。
「そうね……説明するよりも見てもらった方が早いかな」
言つと席を立ち食堂から出ていった。すぐに戻ってきたレイの手には、一枚の紙が握られていた。

「これを見て」
す、とレイラとネーナの前に差し出す。二人は紙の上に目を走らせた。

紙には何人かの人間の写真が写し出されていた。数人いる中でも一番目立つのが、一番上に大きく載せられているまだ幼い男女。名前は男の方に「ミシエル」、女の方に「シェリル」と表示されていた。

意味が分からず視線を更に上に上げる。

写真の上には赤い大きな文字で「指名手配」と書かれていた。

「これは……」

「見ての通り、それは指名手配犯の顔と名前よ」

レイは静かに言う。

「その写真の殆どは人間だけど……一番上の二人は、機械人形よ」

「!？」

「機械人形って、脱走したから指名手配されたのかしら。だったらおかしいわよ。この二人が手配されるなら、ここにいるクリスとルイス以外全員が追われる羽目になるわ」

「そうね、確かにそうだね。でもその二人は違う」

驚くネーナとは正反対に冷静に答えたレイラに、またレイも何も変わらず静かに言う。

「分かると思うけど、その二人は双子。私達の仲間よ。二人も私達と同じで感情を持っている。」

でも見て分かると思うけど、ミシエルは双子の機械人形には珍しい『男性型』。普通は女性型だけれど、男性型となれば、基地の奴らはいくらでも研究したくなるのは当然よね。

私達が脱獄したのは半年前で、まだ軍にいるときに聞いた話になるわ。

二人が初めて起動したとき、どちらもピクリとも動かない『ただの人形』だったそうよ。でも外見だけで男と分かるミシエルの対応は後に回して、女のシエリルには感情があるのか、また力はちゃんと備わってるのか、調べなければならなかった。だから兵士達はミシエルとシエリルを別々の部屋に入れようとしたらしいの。

そしたら突然、全く動かなかったミシエルが暴れだした。

最初はただのバグだと思われたの。男性型についてはまだ何も判明していなかったから。

でもミシエルはこう言ったの。『シエリルを離せ』って。

もしただのバグだったらこんなこと言わないでしょう？だから兵士はすぐに二人を別れさせた。男性型でも感情があるなら扱いは同じ。ただ暴れ回るミシエルには特別にベルトでその体を固定されてたらしいけどね。

逆にシエリルは感情はないものだと思われてたの。《頭脳》の力はなかったみたいだけれど、《力》があつたからシエリルの採用が決まった。

初めて採用される日、感情のないシエリルは暴れることはないだろうと思われてて、兵士達は彼女になんの警戒もしてなかった。でもそれが過ち。

今までただの人形と化していたシエリルは突然力を解放して、傍にいた兵士たちを惨殺。そのあとミシエルの部屋にたどり着き、ミシエルを連れて脱獄。

その一ヶ月後に私達も脱獄したのだけれど、そのときに聞いた話では、シエリルが殺したのは、基地にいた兵士の6分の1だそうよ。6分の1って、ただの支部にすぎなかったあの基地じゃ相当なダメージよ。それに、あの二人はとても危険だわ。

だから、二人を速急に確保して壊す必要があるの」

ここでレイは一息置いた。あまり話し慣れていないらしく、疲れたような溜息も聞こえた。

クリスとルイスはすでにこの話を知っていたらしく、何も口出しせずにその場を見守っていた。

「じゃあなんでその二人がここにいるの？」

ネーナの疑問。率直だと思うが、だが今聞くべきことの一つだろう、何も言わないでおく。

「さあ、それは知らないわ。アンジェラの話だと、庭でボロボロになった二人がいて助けて、そのままここにいらしいわ。あの二人がここに来たのは、私とメイがここに来た数日後だったから、私達

もいろいろ忙しくてあまり覚えてないのよ」

困ったようにレイは言った。

「……どちらにしても、アンジェラが無理矢理保護するでしょうけどね」

レイラも素直な感想を言った。それに対してレイも「確かに」と笑った。

「今メイが二人にどうするか聞きに行ってるわ」

「来るのかな？」

「私達、一度もミシエルさん達と話したことないです……どこか不安そうにクリスとルイスが言った。どうやらこの半年、二人はあまり顔を出さなかったようで、すぐに慣れそうな二人がまだミシエルとシェリルに慣れていなかった。」

特に話すこともなく、ただ時間だけが進んでいく中で、メイが戻ってきた。

ミシエルとシェリルも一緒に行くらしく、これで機械人形全員が出ていくことが決まった。

「？　メイ、どうしたの？」

戻ってきたメイは、どこか疲れたような表情をしていた。

顔色をうかがわれてメイが驚く。だが、

「大丈夫、何もないわ」

そう言った声も、どこか疲れたように、不安そうに聞こえた。

第23話 指名手配（後書き）

今回はレイの台詞が長め。すんまそ。

第24話 インプット

翌日。アンジェラが指定した時刻、機械人形達オートマターは食堂に集まっていた。

機械人形は食を必要としないし、衣類も時々交換するだけで構わない。だが人間であるアンジェラにはいろいろと準備があるらしく、まだ食堂に来ていなかった。

今食堂にいるのはレイラとネーナ、レイとメイ、クリスとルイス、そしてミシエルとシェリル。

レイラとネーナはミシエルとシェリルの双子に会うのは初めてだった。

この食堂で会ったばかりの時、一応名前だけは名乗っておこうとしたのだが、相手はすでに新米である二人のことを知っていたらしく結局何も会話がなかった。

「・・・・・・・・」

四人の間どころか、食堂では誰も話さない。

「あ、マスター見てきますね・・・・・・・・」

この空気に耐えかねたのか、クリスとルイスは手をつないで部屋を出ていった。

*

廊下を小さな影が二つ、ちょこちょこと走っていた。

「ねえクリス、あまり走るとディアナ様に怒られるよ?」

「大丈夫だよ。ディアナ様は今仕事で中なんですよ?」

「そうだけど、やっぱり使用人達に言われちゃったりとか……」

「ルイスって本当に心配症だね。大丈夫だよ。ほら、誰もいないじゃん！」

クリスがくるり、と振り返り、両手を大きく広げる。確かに廊下には二人以外に誰もいなかった。

それを確認して安心したのか、ルイスに笑顔が戻る。

「でもマスター何してるんだろ」

「準備って言ったらちよつと長いよね」

再び小さく走り出したクリスとルイスは、いつものように話した。

二人が会話する内容は大体はマスターであるアンジェラの話だ。

クリスとルイスは誰よりもアンジェラを慕っている。母親だからというもあるが、アンジェラはディアナや他の人間に比べてずっと機械人形に優しかった。

クリスとルイスが生まれて初めて見たものはアンジェラとディアナの喧嘩。

内容は今でも変わらないことだった。

“この企画は会社のためのものであって個人のためものではない”

“だからクリスとルイスは会社のために働いてもらう”

“でもそれだと注意事項に反している。作ったのはアンジェラであつて――”

“所詮子供だ。関係ない”

アンジェラとディアナによる二人の「これから」についての喧嘩。最初はただお互い口で言い合ってるだけだった。社員達は双方に味方していたが、圧倒的にディアナの味方の方が多く、アンジェラ

の味方だった社員はディアナの「意見するならクビにします」という言葉により、皆ディアナの方へと移っていった。

味方が一人もいなくなってもただ一人、アンジェラは反抗していた。

まだ14になったばかりだったと言うのにアンジェラの反対する理由はしっかりしていて、その内容は今でも二人の頭の中にインプットされていた。

目覚めたばかりの二人にとって、どちらが正しくてどちらが間違っているのが全く分からなかった。

だがどちらについて行くかは最初から決まっていた。

——お母さん………？——

アンジェラはまだ二人に触れていなかった。水槽のようなところの外からただこちらを眺めていただけだった。だが誰が母親かぐらい分かる。

二人が完全にアンジェラを母親と認識しようとした時、

——ディアナが思いつきりアンジェラの頬を殴った。

まだ子供のアンジェラの頬を何のためらいもなく殴ったのだ。

アンジェラ自身も殴られたのは初めてだったようで、殴られた勢いのまま床に倒れた。ただ果然とディアナを見上げていた。

クリスとルイスも同じだった。目覚めたときに初めて見たものが口喧嘩で、その次に見せられたのが我が子を殴る母親の姿。

恐怖した。

ただただ恐怖した。人間と言う存在に。

その時はディアナも疲れきっていて、二人の対処については後ほど決められていた。一時的な自由な時間が二人に与えられた。

誰が認めなくても二人にとって母親であるアンジェラは、優しく二人に話しかけた。

だが人間に対する恐怖のせいで、母親すらも恐れていた二人はアンジェラとも話せなかった。

いつかディアナのように殴られるのではないか――。

アンジェラと話せるようになったのはレイとメイが来てからだ。感情を持った機械人形と初めて出会い、先にアンジェラに慣れてもらった。そしてアンジェラが優しいという事実を教えてもらい、なんとかアンジェラを母親として、マスターとして認識するようになった。

あの時の自分達は酷いと思う。母親を信じられなかったのだから。でも今も人間を信じられないのも事実だ。

アンジェラは優しい。誰もが望む『優しいお母さん』。

だが全ての人がそうではない。その事実を生まれてすぐに見せつけられたクリスとルイスにとって、人間とは最も信頼できるもので最も信頼できないものだとして認識してしまった。インプットされてしまったのだ。

認識してしまっただけ、今もそれが取り消されることはなかった。

第25話 早足に

「マスター。みんな食堂に集まっていますよー?」

アンジェラの部屋の前で、ルイスが扉をトントンと叩いた。中から返事はなく、変わりにごそごそという物音が聞こえてくる。

「まだ準備中なのかなー」

「しょうがないよ。マスターはいろいろ準備しなきゃいけないんだから」

「そうだね。もう少し待つてよ?」

二人で扉の横にちょこん、と座る。

無言。

何か会話してもいいのだが、ずっと一緒にいると話すこともなくなってくる。目の前がただの床ではなく、めまぐるしく変わる景色なら、きっと会話は途切れない。だが何も動くものが無いと会話は始まらない。

ただ手を繋いでそこにいるだけ。

そういう関係が、クリスとルイスだった。

しばらくすると部屋の中の音が消え、代わりにこちらに歩いてくる音が聞こえた。

部屋の扉が開かれる。

「あら?何してるの?」

当然部屋から出てきたのはアンジェラだ。廊下で小さく座っているクリスとルイスを見て、目を丸くする。

「あ、みなさん食堂で待っていますよーって伝えに来たんです」

「ああ、そうなの。ありがとう。すぐに行くわ」

クリスとルイスが立ちあがり、服についた微量の埃を払い落とす。

食堂まではそれほど遠くはないが、何故かアンジェラは小走りだった。

何故小走りなのか、疑問に思いながらも二人もスピードを合わせた。

＊

「お待たせ。さ、早く行きましょう」

準備を終えたらしいアンジェラは食堂に來ると、中には一步も入らずすぐに出発すると促した。

「クリス、何かあったの？」

小さめの旅行鞆を持ったアンジェラは、オートマター機械人形達の先頭を小走りで進んでいた。何故か急いでいるようだ。

早く妹を探したいという単純な気持ちからかもしれないが、他に何かあるかもしれない。そう思いレイラはクリスに聞いたが、

「え、さあ……。わからないんです」

どうやら呼びに行っていたクリスとルイスも何も聞いていないらしい。

知らないことを無理矢理聞きだしても仕方ないので、レイラもみんなとスピードを合わせた。

当然玄関に向かうものだと思います、階段を下りると皆がそのまま廊下を進もうとする。

だが、アンジェラはそのままは進まず、突然普段は使うことのない廊下を進みだした。

「？」

皆一様に同じ疑問符を頭上に浮かべるが、お構いなしにアンジェラは進む。

「この方向って……」

レイラとネーナには分からないが、どうやら他の三組の機械人形はこの先に何かがあるのか知っているようで、疑問符の代わりに今度は「まさか」という表情を浮かべる。

それほど長くない廊下を進むと、同じ屋敷の扉とは思えないほど古びた扉があらわれた。

ただ無言でその扉を開ける。

扉の向こうは影により少しくらい庭だった。

「何してるの。早くしないと使用人たちに見つかっちゃうわ」

「!!!」

機械人形達の間が「やつぱり」「まさか」「?」の三種類で満たされる。

「まさかとは思うけど……こっそり抜け出すつもり？」

「まさか」と思ったレイラとネーナ。代表してレイラが言った。

「?」と疑問符を浮かべるだけのクリスとルイスの上に、更に「?」が付け足される。

それぞれの感情を無視して、アンジェラが首をひねる。

「そのつもりだけど、何？」

「やつぱり」と思ったレイとメイが喰ってかかる。

「そのつもりって、ディアナ様には言っていないってことでしょ!? 何勝手なことしてるの!」

「いくらジュリアのためだと言っても、家を留守にすることぐらいちゃんと伝えなきゃ!」

「そんな必要はないわよ」

怒りを爆発させようとしているレイと、心配して言っているメイに、アンジェラはしれっと答えた。

「お母様達にはその必要はないわ。私がいなくなっただって何も困らないもの。私は、まったく役立たずの娘だもの。ジュリアの方がよっぽど可愛がってもらっていたわ」

レイとメイが言葉につまる。どうやら言い返すことが思いつかないらしい。

レイラからすれば言い返せる言葉はいくらでもある。だが、きつと過去に何かあったのだろう。下手に何も言えなかった。

「……そんなことはどうだっていいだろ。行くなら早く行くぜ」
なんの感情も抱かなかったミシエルがアンジェラを抜いて先に裏門を出ていった。シエリルも無言でついていく。

続いてアンジェラが、クリスとルイスが出ていった。
これ以上何を言っても仕方ないと思ったのか、レイとメイもため息をつきながら後を追う。

ネーナはこれから起こることにわくわくしているのか、足取り軽く出ていく。

そんなそれぞれの背中を見つめながら、レイラも裏門を抜けた。

第26話 差

裏門を抜けると、そこは太陽の光が殆ど当たらない、薄暗い路地だった。

人が数人横になって歩けるほどの小さな路地に、複数の物体がいた。それらは全て人間で、家もお金も失った者達だった。アンジェラ達がその者達の前を通るたびに、汚れた布を纏った人達はこちらをじと、と見つめた。

少しの間この街を逃げ回っていたレイとメイだが、それでもこの雰囲気にはなかなか慣れない。幾度も通ってきた道であるのに慣れないというのに、おそらく初めて通るであろうアンジェラは全く気にもせずに進んだ。

クリスとルイスの二人は小さく身を寄せ合い、ミシエルとシエリルもまたアンジェラ同様進んでいく。レイラは道の端に座る人達を観察するように眺めるように歩き、妹であるネーナは何を考えているのか分からない瞳で前だけを見つめていた。

薄暗い路地はそう長くは続かない。しばらく歩くと馬車や豪華なドレスを纏った人達が行き交う大通りに出た。

「やっぱりお金がないと何もできないから、一度下してくるわね」

言つとアンジェラはある小さな店に入っていた。どうやら銀行のようなものらしく、アンジェラは自分のお金を下ろしに行ったらしい。

「ちょっといいかしら」

店に入っていくアンジェラの後ろ姿を見送っていたメイに、レイラが言った。

「お金って、アンジェラはまだ子供だけれど、持っているものなの

かしら」

ああそうか、と心の端で思う。基地にいた時には街について何一つ教えられない。だからこの国の「子供は一家庭に一人まで」という法を知らなかった。ならば今下ろしに行ったお金が一体何なのか、知らなくて当然だろう。

「今下ろしに行ったのはアンジェラのお金よ。この国では生まれてから一年ごとに、個人にお金に加算されるの。その額は歳によって全く違うけれど、ある程度自分で下ろせるような歳になれば、自分で自由に使えるようになるわ。家によっては親が管理して、そのお金の所有者である子供は一切触れられないというところもあるけど、芯がしっかりしているアンジェラは自由に扱うことが出来るの」

納得したのかしていないのか、レイラは腕を組んだ。

説明不足だったのだろうか、とレイラ本人に尋ねようとすると、

「ねー、あの服なに？すっごい綺麗！」

当然はしゃいでいるのはネーナである。初めて見る物に目を光らせていた。

「あれは……」

「あ、これおいしそう！なんていうの！？」

答えようとするが、ネーナは答えを待たずして次々に疑問を投げてくる。だがどれも回答を出されることはなかった。

「……質問の内容を変えるけど、彼らは何故、ああして道の隅に座ってるのかしら」

好き勝手し放題のネーナに呆れていると、腕を組んで考え事をしていたらしいレイラが顔を上げた。

「何って……当然だけど、国の人達全員が裕福な暮らしをしてるわ

けじゃない。生まれたときから親の財産が少なく、幼いころからこうして歩いている人に食べ物要求する人達は裕福な人たちの倍近くは居るわ」

「彼らには誰も、お金を与えないの？」

「親切心から渡す人もいるけど、やっぱりお金持って潔癖症に近い人が多いから。誰も触れようとしらないの」

道を見渡すと、豪華なドレスやタキシードによって隠されているが、薄汚れた布を纏った人達は沢山いた。中には老人からまだ幼い子供まで。ある者は通行人をただ眺め、またある者は空腹のあまりドレスの裾を引っ張っていた。触れられた人は例外なく、蹴り飛ばしてその場を去っていく。

「……可愛そうにね。ただお金がないだけなのに、この差。私人間なら絶対に許せないわ。こんなにも自由を奪われて……」

「そうかしら」

今まで幾度も思ってきた考えを、レイラは簡単にあしらった。

「確にお金がないと出来ることも減ってしまうわ。でもどこへだつて行ける。服はあんなだし、空腹には耐えられないけど、お金がなくなつて何だつて出来るのよ。自由がなくて可愛そうなのは……
……そうね、アンジェラのような裕福な人かしら」

「え？」

どういう意味——。そう続けようとした時、レイラはネーナの後を追って歩き出した。同時に店からアンジェラが帰ってくる。

「ん？どうしたの、メイ？」

「……アンジェラ。変なこと聞くけどいい？」

先ほどのレイラの言葉を反復するように、“自由を奪われた人”に尋ねた。

「アンジェラは今、自由がなくて苦しい？」

「は？」

よっぽど馬鹿らしい内容だったのだろうか、聞いたことないような素っ頓狂な声が上がった。

「あー、ごめん。今のやつぱり無しで——」

「そうね……」

あまりの恥ずかしさに先ほどの問いはなかったことにしようとしたが、それをアンジェラが許さなかった。

「今までは自由がなくて相当苦しかったけど……今こうして家を飛び出してからは、こんなに少ないお金でもちよつと幸せかな」

言いながら両手に抱えた袋を見せる。自分の持っているお金の一部だろうが、相当少なかった。

「……こんなに少なくないの？」

「構わないわよ。できるだけ低予算で生きるつもりだから」

いつでも突然なアンジェラは、やはり突然に踵を返してはしゃぎ回るネーナ達の元へ走っていった。

メイはというと、しばらくアンジェラとレイラの言葉の意味を考えて、誰にも分からないように微かな笑みを浮かべて、みんなの後を追った。

第27話 宿へ

「問題なのは、これからどこで夜を過ごすか、よね……」

必要最低限の賃金を下ろした後、それぞれ自由にしていた機械人形達はアンジェラの元へと戻り、これからについて意見をまとめることにした。

が、その必要があるのはアンジェラだけだ。

人間であるアンジェラは寝起きする場所が必要となるし、食事も必要となる。もちろん、衣服や他にも必要なことは沢山出てくる。だが機械人形はあくまで人形。寝る必要もなければ、食事を摂る必要もない。衣服だって使えなくなるまで使えばそれで済む話なのだ。

そんなことは百も承知でアンジェラは皆に意見を聞く。

誰も何も答えなかった。

レイラとネーナは街についてはあまり知らないし、他の者達だって例外ではない。

例外が居るとすれば――。

「ミシエル、どこか泊めてもらえそうなところはない？」

そう。ミシエルとシェリルの二人だ。

二人は脱獄してから指名手配されながらも、しばらく街を徘徊していた。少なくとも宿ぐらいは知っているはずだ。

アンジェラの問いにミシエルが迷いもせず頷いた。

「人の家だ。宿じゃない。それでいいなら」

人の家というところに少々疑問を抱くが、
「わかったわ、ありがとう。是非案内してくれないかしら。話を通
さないかね」

ミシエルとシェリルが無言で歩き出す。その後を皆もついて行っ
た。

*

後ろを他の機械人形やアンジェラがついて来ているのを感じなが
ら、ミシエルとシェリルは無言で歩く。

目的の家まで大分近づいたところで、シェリルがそつとミシエル
に近づいて言った。

「ミシエル、約束」

「わかつてる」

相変わらず聞こえるか聞こえないかという小さな声でシェリルは
声を発する。それに対して難なくミシエルも答える。

『約束』の内容が何を示すのかは、二人と向かっている家の住人
にしか分からないことだ。

「だが」

肯定の声を聞いてシェリルが離れようとした時、またミシエルが
口を開いた。

「その約束を破るのは俺たちじゃない、あいつらだ」

その言葉にシェリルの顔は全く変わらない。ミシエルも同様だ。
頭の中でこれから起こることを予測する。おそらく、考え通りに
事が進むはずだ。

たとえそれが、ミシエルの望んでいないことだとしても。

しばらく歩くと、大きな門で囲われた、また大きな屋敷が見えてきた。アンジェラの屋敷には敵わないが、それでも一般人からすれば十分な大きさだ。

「ここ？」

ミシエル達が足を止めると、当然後ろにいたアンジェラと機械人形達も止まる。こくり、とミシエルは頷いた。

「シエリル」

合図を送ると、シエリルが力を解放した。右手に大きな鉄の扇子があらわれる。

それを見て機械人形達が警戒した。

「大丈夫だ。攻撃はしない。向こうに合図を送るだけだ」

それは本当のことで、シエリルは自身の手にあらわれた大きな扇子の一部を抜き、それを空いてる窓へ向かって投げ入れた。中に特に被害はなかったらしく、大きな物音はなかった。

やがて窓の中から太陽の光が反射する。確認したらしい。

「こつちだ。裏門から入る」

言っと何の躊躇いもなく門を開けて入った。後ろで躊躇う気配を感じたが、やがて全員が門を抜けたの確認すると、最後のシエリルが門を閉めた。

棺の完成だ。

誰の棺になるかは、これからの楽しみだ――。

第28話 監視

何度かここに来ていたらしく、ミシエルとシェリルは慣れた足取りで、迷わずにある部屋へと向かっていた。その後ろを、アンジェラと機械人形達がついて行く。
オートマター

階段を上り、三階にたどりつくのと廊下をまっすぐに突き進む。一番つきあたりの部屋の前で、二人の足が止まった。

そこは先ほど、シェリルが扇子の一部を飛ばした部屋だった。ミシエルが戸を三度叩く。

「どうぞ、入って」

中からは少女の声が聞こえた。迷わずにミシエルは戸を開ける。中にはとても可愛らしい少女が居た。

栗色の腰まで届く髪の一部を、簡単に一つで結び、服もどこか制服を思わせる凝ったデザインをしていた。

そのあまりの可愛さに思わずアンジェラが息を飲んでいると、

「気をつけて。機械人形よ」

機械人形達の中で一番前を歩いていたメイがそつと囁いた。

「えっ？」

人間であるアンジェラには、目の前の少女が機械人形だと言うことには気付かなかった。

少女は悪意のない微笑みを、一行に向けた。

「初めまして。ランカと申します。お察しの通り、私は機械人形です。感情のある双子の、ね」

その言葉を聞いた瞬間、先ほどよりも緊張感が高まった。

「そう固くならないで。妹はアンナと言うのだけれど、あの子は今

お勉強中だから」

「勉強？」

「ええ、まあ」

ランカは笑顔を絶やさずに答える。

今の様子だと信用しても大丈夫そうだ。ミシエルとシェリルの知り合いの様だし、一日ぐらいなら部屋を貸してもらえるかもしれない。

そう思いアンジェラがその話を切り出そうとした時、

「ランカとアンナって、あの『人間の生活』してるって……？」

この場でただ一人、全く警戒せずに困惑しているのはネーナだ。ネーナは目の前で微笑む少女を凝視したまま、何かを考えるかのように呟いていた。

『人間の生活をしている機械人形』

それはアンジェラも聞いたことはあった。だがただの迷信だと思っていたが……。

「あら、私達のことを知ってるのね？」

ランカはあっさりとその言葉を真に受けた。

目の前で止まっていたミシエルとシェリルが歩きだし、ランカの前へと立った。

（なんだろ、この感じ……）

「あなたの言う通りよ。私達は『人間の生活』をしてきたの。とっても裕福で、何の不自由もないわ。でもね、ただ一つだけ、私は絶対に許せないことがあるの」

「……監視ね」

ポツリとレイラが呟いた。その声に、ランカの笑みが深まる。

「あら？どうして分かったのかしら？私でも気付くのに2年

「かかつちゃったのに」

レイラは何も言わない。レイもメイも、クリスとルイスの二人も何も言わず、ネーナも固まったままだ。

そんな一行には構わず、ランカは部屋の中を歩きだした。

「私達はね、ここでいろんなことを勉強したのよ。所謂、家庭教師。私達は機械人形だと最初に教えられたけど、他の機械人形達もこうやって勉強してるんだと思ってたの。お金は沢山あったし、何か欲しいものがあれば何だっけ用意してくれたわ」

「……」

「でもね、人間は用意してくれないの。一日だけの友達なら沢山来てくれたんだけど、恋人とか、そう言う人は一切いなかったわ。それから、なんとなく不思議に思ったのよ。“どうして私達はこの屋敷から出られないのか”。全く結論が出なかったわ。でもある日、私はたまたま勉強に疲れてて、間違えて階段を下りてしまったの。地下へ行ってしまったのよ。引き返そうとしたんだけど、目の前の薄暗い扉がどうしても気になっちゃって、思わず開けちゃったのね。そこには何があったと思う？」

「……」

「……答えてほしいかったんだけど、言うわね。……カメラ室よ。そこには真っ暗な部屋の中に沢山のモニターがあって沢山の部屋が映し出されていた。部屋を見渡すとビデオみたいなものがあって、それを見て初めて、『私達は監視されてるんだ』って気付いたの。……それからは私は全ての勉強を拒否し、妹であるアンナ以外の人と合うことも全て拒否したわ」

「……それで、あなたは何を思ったの」

ここでようやく、絞り出すような声がアンジェラから発された。楽しそうに部屋を歩いていたランカの足が、こちらに背を向ける形で止まった。

「このまま監視されてここで暮らすなんて嫌。まっぴらごめんよ。何が楽しくて、何が悲しくて私達は人間の実験体モルモットにならなきゃいけないのよ。こんなところから出てってやる。今すぐにでも！」

楽しそうだったランカの声がとても冷たいものになった。力を持たないクリスとルイスが後ろで震えている気配が伝わってくる。

「でもね、力を持たない私達じゃ、ここから抜け出すなんて不可能だわ。人間は憎い。でも、感情を持つ双子の機械人形として生まれてきた私達自身も憎い。結局何が悪いの？——全部よ。全部、全てが悪いのよ！」

くるり、とランカが振り返る。

先ほどまでの笑みは一切消えて、変わりに今は惨酷な殺人者のような笑顔を浮かべていた。

「そこで私は考えたのよ。この地球上の機械人形と人間を、一匹残らず駆逐しようって！」

「そんなことは不可能だわ。この地球に、一体どれだけの機械人形と人間がいると思ってるの」

できるだけ相手を挑発しないように、慎重に言葉を選びながらアンジェラは言った。

「そんなことは分かっているわよ。付け加えれば、私達には力がないから余計に無理よね。でもね、もしそこに私達の“同志”がいたら、どうする？」

言い終わるか言い終わらないかのうちに、空気が変わった。

気付けばシェリルの両手には大きな扇子が握られていた。

「！まさか……っ」

一行が状況を把握し力を解放しようとした時にはすでに遅く、扇子から巨大な風が巻き起こった。

第28話 監視（後書き）

長くて申し訳ないm（――）m

第29話 冷めた笑顔

「あゝ！もう無理、やめやめゝゝっ！」

大きな部屋にたった一人、机に向かっていた少女がペンを放り投げた。

少女は栗色の髪の一部を二つに分けて結び、制服を思わせる服装をしていた。

「作曲なんて絶対無理！先生ムチャ言い過ぎだよっ」

誰に向かつて言っているのか、少女は大きな声で言った。

「作曲をしたいと言ったのは私^{わたし}ではありません、アンナ様でしょう」
「そうだけどもゝ……」

机の上に置かれたモニターの中で女性が呆れたような表情をした。

少女——アンナはそのモニターに向かつて話しかける。

「でも先生だって賛成してくれたじゃない」

「これはあなたの発想力を高めるいい機会だと思ったからです」

「こんなに難しいなんて思わなかったの！難しいなら難しいって言うてよ！」

「先にお伝えしましたが、アンナ様は貸す耳をお持ちでは、あり、ま……ガッ……せっ」

「は？」

モニター越しに話していた“家庭教師”の声がおかしくなる。スピーカーの故障だろうか。

「大体、アンナさ、まはっ……ご自分……ガッ……でな、にか……っを」

「ちよっと、先生？スピーカーおかしいみたいなんだけど……」

女性にアンナは話しかけるが、向こうは聞こえていないらしく言葉が続けようとする。

ただのスピーカーの故障ならこちらの声は正常に向こうに伝わる

はずなのに伝わらない。機械そのものが故障しているのだろうか。そう思ってもう一度話しかけようとすると、ぷつん、と画面が消えた。

「あ、れ……？先生？おーい……」

何度も呼びかけながらスイッチを押したり叩いたりしてみても、まったく何の変化もない。

「おっかしいなあ……」

そう呟いたとき、突然上の階から窓が割れる音がした。続いて地響き。

「なにっ!？」

先ほどから連続して起こるアクシデントにアンナは戸惑い、焦った。

地響きが止むと、現状を把握するよりも先に足が動いていた。

「お姉ちゃん……っ」

怖かった。

生まれてこの屋敷に来てからずっと姉と一緒にいた。勉強も遊びも全て一緒だった。

なのに半年前、突然姉は自ら勉強を放棄した。あんなに楽しそうだったのに。

ずっと疑問には思っていた。

その姉の居る部屋から窓が割れる音がした。

嫌な予感しかしなかった。

ただひたすらに走って、時節起こる地響きに足を止めながらも階段を駆け上がった。上りきると曲がって突き当たりの姉の部屋へと飛び込む。

「お姉ちゃん!」

パンツと勢いよく扉を開けて部屋を開けると――

――突然、突風が襲ってきた。

「っ!？」

思わず目を瞑ってしまった。だがそれも一瞬のことで、突風は襲っては来なかった。柔らかな風が来るのみだ。

何故部屋の中でこんなに大きな風が出来ているのか。窓が壊れたぐらいではこんな風は起こらない。

部屋を見渡すと、部屋の真ん中の方に誰かがいるのが分かった。

数人いるなかで機械人形オートマタの気配もいくつかある。

一体誰なのか分からず、そのまま視線を彷徨わせると、風の発生源である人物が映った。

「シェリル!？どうして……っ」

アンナの声には一切反応せず、シェリルは手に持った巨大な扇子で風を作り続ける。その後ろには兄のミシェルがいた。その更に後ろには――

「お姉ちゃんっ!」

ミシエルの後ろには姉――ランカが立っていた。

先ほどのアンナの声に、ランカが気付いてこちらを見つめる。

その表情はアンナが今までに一度も見たことがない、冷めたものだった。

「あら、アンナ。勉強はもう終わり？」

「っ？」

「ちょっと待っててね。部屋に現れた虫は綺麗に排除しないと」

言つと視線を風を中心へと戻す。

風の中で数人の誰かが苦しそうにしている。

その様子を見て何が何だか分からないが、気付けば叫んでいた。

「お姉ちゃん止めて！何をしてるの！？なんでこんなつ、シエリルも攻撃をやめて！シエリル！」

必死に姉とシエリルに叫ぶが、二人はまったく聞いてはくれない。

「つ……ミシエル！シエリルに止めさせて！このままじゃあの人たち、酸素が足りなくて死んじゃう……！」

「それでいいのよ」

冷たく言い放ったのは姉である、ラン力だった。

第30話 嘘偽り

目の前にいるランカは、自分の知るランカではなかった。
まるで別人のようだ。

「そうよ、これでいいのよ。死んじゃえばいいのよ。私達を縛る人間なんて！」

アンナには姉の言っている意味が分からなかった。

いや、本当は分かっていた。“私達を縛る”という単語が何を意味するのか。

怒り狂った姉はもう回りなど見えていない様子で、目を見開いて叫ぶように言う。

「どうして私達が監視されなきゃいけないのよ！何のために実験なんかっ！ずっと幸せだと思ってた。なのに、こんなこと……！実験されるぐらいなら、不採用として牢屋に居た方がよかったわ！」

「……そんなことない！」

気付けば叫んでいた。一瞬自分の口が勝手に動いたことに驚いて何も言えなくなったが、それでもアンナの意志とは関係なく言葉は紡がれる。

「実験されるのは私だっていやっ！でも、それでもここでお姉ちゃんと過ごしてきたことは嘘じゃない！例え実験でも、楽しかった！お姉ちゃんは楽しくなかったの！？」

「……確かに、モニターを見るまでは楽しかったわ。でもあれは全て偽り。それを知った時から私の世界は崩れたの。全部嘘だったの

よ！」

姉とこんなに喧嘩したことはなかった。いつも一緒だった。楽しかった。

収まらないランカは続けて何かを言い放とうとするが、一瞬の大きな風がその場の空気を乱す。

「！」

驚いて風の発生源の方を見ると、ミシエルを庇うようにシエリルが立っていた。手は止まり、今は風を作っていないことが伝わる。

ミシエルの横を見ると、そこには黒い花弁が数枚、針のように刺さっていた。

二人が今までに見たことがないもの。慌てて竜巻の中心の方を見るとそこにはすでに竜巻はなく、変わりに一人の人間と数体の機械^{オート}人形の姿が確認できた。

人間の方はやはり酸素が足りなかったらしく、息をするので精いつぱいのように見えた。機械人形達は呼吸は乱れているものの、戦闘態勢を崩してはいなかった。

「その子の言う通りよ……」

機械人形達の内、一体が口を開く。黒い髪を下に二つで結び、白いワンピースのオッドアイの機械人形だ。手には黒い花弁が握られていて、こちらに刺さっている針もその機械人形からだと知ることができた。

「あなた達の過ごしてきた時は全て監視されて、決して自由なものではなかった。でも、何も知らなかったときは楽しかったでしょう？その時の気持ちは嘘じゃないわ」

「いくらあの時が楽しかったとしても、もう戻れない。全てを知った今、ここでまたいつも通りに笑って過ごせと言うの？馬鹿げてる。出来るわけないじゃない！」

もう妹のアンナでも手がつけられないほど荒れてしまったランカ。次のランカの言葉が、多くの者のこれからの人生を変えることになる。

「ここでこのまま生きるのなら牢屋の方がマシ。死んだ方がマシなのよっ!!」

「なら死ねば？」

一瞬、この場の全員が、今の言葉を誰が発したのか分からなかった。

妹である、メイも気付くことが出来なかった。

言った人物は、集団から離れて、柵に近づく。

赤い三つ編みを揺らしながら、柵の中から通常より少し大きな果物ナイフを取り出す。

「牢屋もこのことと同じぐらい地獄よ。死にたいなら勝手に死になさいよ。一人で死ねないと言うのなら、私が手助けしてあげるわ」

言つと、レイは全く状況を読みこめていない一同の前で、同じく読みこめていないランカに向けて果物ナイフを投げ放った。

「っ！ダメ、お姉ちゃ……っ！」

気付けば、勝手に足が動いていた。初めて喧嘩した、姉の元へ。ただ本能だと思う。姉を助けたい。それだけの、姉への思いだけで。

丁度姉とメイとの間に立った瞬間。

自分の体に先の尖った異物が突き刺さるのが分かった。

第31話 実験体の幸せ

突然、妹の背中が自分の視界を奪った。

一体何が起こったのだろう。

この屋敷に機械人形達オートマタがやってきて、それらを排除するためにシエリルの扇子が大きな風を作った。あともう少しというところで、勉強中だったはずのアンナが部屋に飛び込んできて、初めての喧嘩をした。そこまではかなり正確に覚えている。

その後は突然風が消えてミシエルのすぐそばに黒い針が数本刺さっていて、それは風の中にいた機械人形の一体の力だったはずだ。それから――

それから？

自分が何かを言って、目の前に集まっている機械人形のうちの一体、赤い三つ編みの中国服のような少女が何かを言いながら食器棚に近づいて、それで……

棚の中から果物をナイフを取り出して。

それを、自分に向けて投げ放って……。

(……そうだ)

殺される。そう直感したんだ。

なら何故、自分は今生きている？生きて、こんなことを考えている？

何故、目の前に妹が両手を広げて立っている？

「あ、アンナ……？」

ただ突然と前を見つめていると、アンナの体がこちらに傾いた。

「あっ」

反射的に駆け寄り、落ちた時の衝撃を減らすために抱きかかえる。

脱力した妹の体がずしり、ともたれかかり、その場に膝をつく。

腕の中でアンナは目を閉じたまま、動かない。

声が出ずにただ見つめることしかできないでいると、座り込んだ自分の膝から服にかけて少しずつ濡れていくのを感じた。

ゆっくりと見下ろすと、床が少しずつ赤く染まっていくのが見えた。

その発生源が妹の胸部からだということが、嫌でも視界に入り理解させられた。

「ああ、わ、たし……？」

誰かがそう呟いて崩れ落ちる音が聞こえた。
だが今はそんなことは全く気にならない。

「アンナ……？なんで、こんなこと……」

話しかけても目を開かない。か細い息が聞こえるだけ。

「ねえアンナ、起きて……目を開いてよ。なんでこんなことしたのよ！どうしてあなたがこんな目に……！」

目の奥が熱くなる。

敵だったはずの機械人形達と人間がこちらに走ってくる。ミシエルとシェリルは動かずに、ただこちらを見下ろしていた。

機械人形の一体が刺さったナイフをそっと引き抜いた。すると血が逆流したのか、アンナの口から勢いよく大量の血液が吐き出された。

「アンナ！？」

「おねえ、ちゃん……」

目を開こうとしているのか、瞼が少し動こうとしている。

「お姉ちゃん、生きて……」

目を開こうとしながらアンナはか細い声で言った。その言葉には

つと我に返る。

「どうしてこんなことしたの……？」

恐る恐る尋ねると、アンナの唇が動いた。

「楽し、かった……嘘で、作られた、生活、でも、幸せだっ、た……。お姉ちゃんに生きて、ほしかった、か……ら。偽り、でもいいの……おね、ちゃんと、一緒なら……どんなに、っ、つらくても……」

途切れながらも少しずつ、アンナは言葉を紡いでいった。

ランカが何か言おうとすると、脱力されていたアンナの右手が少しずつ持ちあげられた。その手はランカの左頬へと行き着き、そつと優しく撫でる。

アンナの口の端が歪む。

「……生きて、ね。大好き、だよ、おねえ……ちゃ……」

持ちあげられたばかりの右手が再び床に向かって落ちようとする。その手を落ちてしまう前に、ランカが拾った。

「なんて、幸せそうな顔、してるのよ……」

閉じたままだったアンナの目が少し開き、こちらに優しく微笑んでいた。

ずっと溜まっていた涙があふれ出してきた。

人間がす、とアンナの目を閉じる。微笑みを浮かべたままのアンナは、優しく床に寝かされた。

妹が、死んだ。

機械人形である自分たちに「死ぬ」という単語はおかしいかもしれない。だがこれは「壊れる」のではなく「死ぬ」のだ。

今までこの屋敷から出たことのなかったランカとアンナは、自分たち以外の人間や機械人形と触れ合うことは殆どなかった。

だから、誰かの死に直接あうことなど、一度もなかった。

なのに目の前で初めていなくなったのが、自分が唯一大切にしていた妹だった。

「なんで……」

涙は止まらず零れ落ち、アンナの頬の上で跳ね返る。

「私の、せいで……」

気付けば、目の前で起きた事実のことしか考えられなくなり、そして叫んでいた。

「私が、こんなことしなければ……屋敷から出ようなんて考えなければ、アンナは死ななかった！どうして、私はただ、アンナとずっと一緒に生きていければ、それでよかったはずなのに……！」

「ランカ……」

人間の弦きが聞こえた。今はこちらを憐れむような視線も言葉も、ただの雑音でしかないように見えた。

止まらない涙はずっと頬を流れ落ちて、アンナの頬の上で跳ね返っては今度はその頬を伝って床に落ちていく。

何も言えなくなつて嗚咽だけが漏れだす。ランカだけではない。

他の者達も何も言わなかった。

ただ一人を除いて。

「ほら、言つた通りだろ」

それは誰かに話しかけるかのようであり、また独り言のようにも聞こえた。

「約束を破るのはお前らだ。最初から分かったことだ」

この中で唯一の男性型であるミシエルが言葉を紡ぐ。

勝手に耳がそちらを向いてしまい、溜まった涙が溢れても次の涙は出てこなかった。

自然に次の言葉を待ってしまう。

だが次に発せられたのは言葉ではなく、殺意のこもった刃物だった。

「っ!？」

背中に大きな物が突き刺さった。刃物の切っ先が貫通して、少しだけ腹から突き出していた。

驚いて涙で濡れたままの瞳で後ろを振り返ると、一部が抜けた扇子を持ったシエリルと、明らかな蔑みの目でこちらを見下しているミシエルが視界に映った。

「お前、約束覚えてるか？」

ミシエルが何かを聞いてくる。

約束？なんだったっけ……思いだせない……

少しずつ視界がぼやけてくる。

「『俺達と一緒に旅をする』、じゃなかったか？」

そうだ、そんな約束をしていた気がする。

「けどお前達は結局姉妹のことしか目に入ってなかった。俺達のこととはどうでもよかったんだ」

少しずつミシエルの言葉が遠ざかる。自分の体が傾いていつてることを、ゆっくりと感じた。

「約束を破ったのはそっちだ。もう俺達は自由にさせてもらっぜ」

頬が濡れた床の上に当たるのがわかった。

ふと目だけを動かすと、すぐ横に微笑んだままの表情のアンナが目に入った。

アンナの頬の上で跳ね返った涙の一筋が、まるでアンナの涙かのように流れていた。

（ごめん、ね……）

意識が遠くなる中、力を振り絞って手を伸ばす。こちらに放り出された指先に触れる。

（これで、ずっと一緒だね、アンナ……）

第31話 実験体の幸せ（後書き）

とっても長くなってしまったorzだってキリが悪かったんだもの！
↑

こんなに長ければ誤字脱字が多いはず……！
もし何かあったらお知らせください！後日修正しますので……！

第32話 事実

「ああ、わ、たし……？」

壊れて死んでしまった一体の機械人形から一番離れた位置でレイが膝から崩れ落ちた。オートマター

そんなレイに気を使っているのはクリスとルイスだ。気を使うというよりか、アンナの死を目にしたくないようにも感じ取れた。

そしてその後すぐ――

目の前で、残された一体も死んだ。

「ふん。妹が死んで生きる目的を失ったんだ。今一緒に死ねて本望だろ」

アンジェラ達が目の前で倒れている二体の『器』を呆然と見つめている中、輪の外でランカを殺したシエリルと全てを拒絶する言葉を放つミシエルが輪を睨みつける。

機械人形達とアンジェラはまだ理解しきれず、『器』を見つめ続けた。後ろではレイが泣き崩れ、こちらから目を逸らしたクリスとルイスがレイを抱いていた。

「……して」

ぽつり、とネーナが言った。

「どうしてランカを殺したの？」

ネーナの目からは透明の雫が零れていた。雫は床や肌の上で跳ね返らず、そのまま服に吸収されていく。

ネーナの言葉に、ミシエルが当然だというように見下しながら言った。

「お前らは姉妹のことしか目に入っていない。二つで一つなんだ。片

方が死ねば、もう片方も生きる目的を失い、放っておいても自らその体を滅ぼすだろう。それを今、一緒に死なせてやったただけだ」

「……っ！」

きつ、とネーナが濡れた瞳でミシエルを睨みつける。

「だからってこんなこと酷いよ！生きていたら、他に目的が生まれるかもしれないのに……！」

「戯言だ。なら聞こう」

ミシエルの右腕が上がり、人差し指を立てた右手をネーナにつきつける。

「お前は、お前の大切なレイラが死んだら、どうする？」

その言葉にネーナは答えられず、アンジェラとメイが警戒心を強める。

「例え話だ。今死ぬ話じゃない」

肩をすくめてミシエルは笑った。その態度に対してアンジェラの中に怒りが生まれ始める。

だがミシエルの怒りはそれ以上らしく、突然笑みを消して、無表情で続けた。

「俺達はランカを信頼しようとしていた。アンナはこのことを知らなかったからな。だが実際はどうだ？アンナが死んだ途端、俺達との約束は忘れ、ただ妹のためだけに泣いた。妹さえいればそれでいい人生だったんだ、そいつにとって。お前たちも一緒だろ？……俺達も一緒だ」

紡がれる言葉に機械人形達が反応し、またアンジェラも反応した。アンジェラにとっても、妹はその存在自体が生きる理由のようなものだったからだ。

「俺もシエリルさえいればいい。シエリルも俺さえいればそれでいい。でも人間はそれを邪魔する。人間の兵器となった機械人形もな。俺達はそれが許せない。あいつらは家族を殺そうとするんだ。双子の機械人形の家族は姉妹だけだから、ただの“姉妹思い”って思うかもしれない。けど唯一の家族を守ろうとして何が悪いんだよっ！」

声に少しずつ感情が混じり始め、表情までもが険しくなっていく。隣に立つシエリルの表情は相変わらず無表情だが、扇子を持つ手に力が入るのが遠くても確認できた。心の中ではミシエルに相応するぐらい、激しく感情が上下しているのだ。

その様子を見つめたまま、アンジェラ達は誰も動かない。

「人間は、自分の家族を守るために、国や国民を守るために戦争してるんだろ！だったら俺達が起こす行動も同じだ。家族を守るために壊すんだ。機械人形を、人間を。俺達を邪魔する奴ら全部！」

「ふざけないでよっ！」

誰も行動を起こさなかった中で、泣き崩れていたはずのレイが叫んでいた。

「あんた達の言いたいことは分かったわ！でも、そんな理由で他の人の幸せを奪わないでよ……！」

「……お前、分かってんの？」

突然泣き叫ぶレイをいぶかしむかのように見ながら、ミシエルは言う。

「お前が、そこで寝てる二人の幸せを奪ったんだよ」

「……！」

紛れもない事実を言われてしまい、レイが口ごもる。何も言い返すことができず、ただ溢れ出る涙を止めることもできずにいた。

「お前はアンナを殺した。たったその一つの行動がランカの幸せも奪ったんだぜ」

その事実はいく人だけではなく、誰にも否定することが出来ないことだった。

これは人間にも言えることで、たった一人の死が例えば家族の人生を変えるきっかけとなってしまう、その家族の変容によっては近くにいた者までも変わってしまう。いつ終わるか分からない連鎖となってしまうのだ。

今この場でも同じことが言える。アンナの死によってランカは周りが見えなくなってしまう。信用しようとしていたミシエル達は裏切られたことになり、また新たな死が生まれた。この二人の死が、恐らくこれからこの場にいる全員の人生に何かしら鎖を掛け、歩むはずだった人生を曲げてしまうのだろう。

それが自分にとって殆ど関係のない事実だったとしても、周りが変われば自分も変わってしまうのだ。

恐らく今この時点ですでにレイの人生は変わった。今はただ後悔に苛まれているだけだ。

自分の怒りを全て打ち上げたのか、ミシエルの表情は奇妙な優しい笑みに変わっていた。

「お前達も生かしておけば、これからの俺達の人生に支障をきたすだろう。だから、ここで殺す」

その言葉にシェリルが再び扇子を構えた。

今度はこちらの機械人形達の反応も早く、それぞれが身構えた。

部屋の中に再び大きな竜巻が生まれ、二人の男女を除いた全てを

のみこんだ。

第33話 敵わない

大きな竜巻が、アンジェラと機械人形達をのみこむ。
オートマター

先ほどよりも大きな風。ただでさえ息苦しかったのに、今度こそ息をする間も許さぬかのように風が遅い来る。

それでも目を開いて前を見ようとすると、目の前に赤い服と黒い三つ編みが立ちはだかった。

「メイ!？」

「喋らないで……そこから動かないで」

立っているメイの足は震えていた。風で強く押されているのもあるが、他にも理由がある。それはメイの目の端に移る『器』が示していた。

恐怖しているのだ。機械人形にもいつかは訪れる、『死』に。

ふらつく足を無理矢理押さえつけながらそれでも前を見据えると、同時に顔の横を何かがよぎった。

何かを理解するより先に、アンジェラのひと房の髪が風に舞った。

「!?!?今の……っ」

続きを言うよりも先にメイの手が動いた。

いつの間にか手には先ほどアンナの体に突き刺さった果物ナイフがあった。それで何かを弾き返したのだ。

弾き返された、銀色に光るもの。

シェリルの扇子の一部――

風でこちらが思うように動けないうえに、さらに刃物を加えていた。

これで終わらせる気なのだ。

だが扇子にも限りはあり、時節通り過ぎる程度だ。おそらく他の機械人形達のところにまで飛んでいるのだろう。

そこまで考えて、改めて他を気遣う。

レイラとネーナは自分達の身は自分で守れるだろう。心配は無用だ。

だがレイとクリス、ルイスの方はどうだろうか。

クリスとルイスは戦闘能力を一切持っていない。レイは《力型》だが、自らの行動に悔み、とても戦える状態ではない。

目の前に立つメイも助けに行きたいはずだ。だが人間であるアンジェラを守るためにそこを動くことができない。

私は、どうして……

機械人形達はこんな中でも生きるために力を使い、自分を守ることができる。

だがアンジェラはどうか。

人間は機械人形のように力を持っているわけではない。持っていないとしてもそれは作られた武器だ。手元になければなんの意味を果たしはしない。

改めて自分の愚かさを知った。

子一人では生みの親に敵うことができない。結局は親という権力を見せつけられ、すべての意志をねじ伏せられてしまう。

それは親子関係だけではない。機械人形と人間という関係にも言えることだ。

何の能力も持たない人間は、戦うことを知っている機械人形に敵わない。

「なんで、わたしは……」

悔しさに俯くと、胸元で満月のペンダントが揺れているのが目に映った。

それを認めた途端、ペンダントをぎゅっと握って目を瞑った。そして必死に呼びかける。

（聞こえる！？サン、聞こえたら返事をして……！）

＊

「聞こえています」

突然聞こえた声に目を開けると、そこは以前に見た真っ白で何も
ない世界だった。

そしてその中に紛れるように、赤い瞳のサンが立っていた。
何も言わず、ただそこに立っているだけのサンに、アンジェラは
言った。

「前に言ってたわよね。ペンダントを通して外が見えるって」

「はい」

「ならお願い。みんなを助けてほしいの！」

何が起きているのか分かっているのなら話が早い。単刀直入にア
ンジェラは言った。

だがサンは目を細めて言う。

「分かっているはずです。私達の能力は『人と人の中を行き来する
こと』。直接攻撃を弾くことはできないのです」

「……分かってる。それは分かっているわ！でも、みんなを助けたい
の！」

今こうしてサンに頼っても、結局それはサンの力。自分の力では
ない。

だがそれでも、みんなを助けたかった。

しばらくすると、小さな声が返ってきた。

「今起きている攻撃は風。どんなことをしても手でつかみ取ること

はできません。強いて言えば、他の機械人形がしたように同じ風で抹消させること」

聞き返すようにサンは言う。

「だけれど、敵の目をくらませば一瞬でも力は弱まる。私が出れることは相手に隙を作ることがせいぜいでしょう。それでもよろしいですか？」

確認の裏に、申し訳ないという色が見えた。

だがそれでも構わない。アンジェラは強く頷いた。

それを確認すると、サンが近づいてくる。

「なら最後にもう一つだけ確認を。隙を作るには、貴方の体を操る必要があります。私にその体を預けていただけますか？」

ず、と手が伸びる。

「私に体を預ければ、貴方に体が戻ってくる保証はできません。乗っ取ることは容易ですが離脱することはとても難しい。もしかしたらずっとここに閉じ込められるかもしれません。それでも？」

とても丁寧に、サンは説明した。

アンジェラは人間だ。人間が出来うることはその体で簡単にできるが、それ以上のことをしようとすれば体は壊れてしまう。

今サンがアンジェラにしようとしていることは、サンとアンジェラの心を入れ替えること。サンがアンジェラの器を扱う権利を得ることになる。

それはすなわち、人間の体は機械人形の体に対応するように作りがえられるということ。

機械人形のそれへと変わった体を人間が扱うのは難しい。そう言っているのだ。

だが完全に機械人形の体になるわけではない。人間の体が一瞬だ

け変わるだけのことだ。

「……ええ。お願い」

「……目を閉じて」

肯定すると同時に、サンも言った。言われたとおりに目を閉じる。体が浮遊するような感覚に襲われた。

第34話 一瞬

風は、容赦なく機械人形達を包み込み、風に紛れる刃物もまた髪や服を切り裂いていく。

「くっ……！」

また扇子の一部がレイラの右頬をかすめていった。

「お姉ちゃ、このままじゃ……！」

隣に立つネーナが悲鳴のような声を上げる。

分かっている。このままでは自分とネーナどころか、この場にいらる全員の体力が持たない。現に体自体は小さく作られているレイラとネーナは、足が浮いては必死に耐えるという動作を何度も繰り返していた。

この風を消すにはもう一度先ほどのように風を作りだすのが妥当だろう。だが最初とは全く風の強さが違う。花弁を散らしてもすぐに吹き飛ばされ消えてしまう。

それでもなんとかしようと口を開いたとき、

「——アンジェラ!?」

別の方向からメイの声が聞こえた。そちらに顔を向ける。

アンジェラは座り込んでいた。突然がくりと崩れ落ちたのだ。

だがそれも一瞬のこと。すぐにアンジェラは立ちあがる。

そして何の躊躇いもなくその場に立ち、レイラの方を振り返った。

その目は綺麗な海色ではなく、燃えるような赤い色をしていた。

「!」

それを見ただけで、今のアンジェラはアンジェラではないことを悟った。

アンジェラの姿でそれは言った。

「今から私の力で敵に隙を作ります。風が止む瞬間に敵に攻撃を。一瞬なので見逃さないでください」

ただそれだけ言うと、シェリルの方を向き直る。

「待って！それって……」

ネーナが困惑してアンジェラに問い返す。だが何をするか悟ったレイラは、同じように前を見据えた。

聞こえるか聞こえないかのカウントダウンが始まる。

「3」

静かに目を閉じ、焦る気持ちを抑える。

「2」

まだ花弁は生み出さない。ただ力を解放していつでも動けるように準備する。

「1」

何もせず、聞こえるカウントと敵だけに意識を集中する。

「0」

カウントが「0」を唱えた時、瞼越しに部屋全体が白い光で包まれるのが分かった。

一瞬だけ風が止んだ。

その瞬間を見逃さず、レイラは素早く手の中に黒い花弁を生み出し、それを光に怯んだシェリルに向けて舞い散らせた。

「っ！」

針のように尖った花弁は扇子を持つ手の甲に突き刺さった。手から扇子が離れる。

「シェリル！」

突然の反撃にミシェルが倒れたシェリルに寄りかかる。

もう風は襲ってこない。アンジェラの方を振り向くと、当のアンジェラもこちらを振り返って呟いた。

「ありがとう」

それだけ言うと、再びアンジェラの体は崩れ落ちた。

*

白い空間の中からアンジェラは全てを見ていた。

その空間の中に、サンが帰ってくる。

「……ありがとう。みんなを、助けてくれて」

帰ってきたサンに、アンジェラはすぐにお礼を言った。

サンはそれに返すことはせず、別のことを口にする。

「あまりここにいますと戻れなくなります。今すぐ戻った方がいいでしょう。まだ向こうも安心できる状態ではないので、早く行ってあげてください」

サンなりの気遣いなのだろう。なんの表情も見せずに告げた。その言葉に頷くと、すぐに足元から自分の姿が消えていった。

第35話 理由

すべての風が消え、金属製の扇子の落ちる音が部屋に響いた。

「シェリル！」

シェリルの手から血が滴り、駆け寄るミシエルの足音が響く。

数瞬後、アンジェラの体が崩れ落ちる。

「アンジェラ!?」

一番近くでその身を守っていたメイが抱き起こす。

しばらく揺すり続けると、ゆっくりと、アンジェラの目が開いた。

「メイ……」

「大丈夫、アンジェラ？」

「大丈夫……シェリルは……？」

重たい体を、引きずるように無理矢理立ちあがる。その様子を、先ほどと何の変わりもなく、レイラが見つめていた。

恐らく体を引きずっているのは、己の内にいるサンと体を交換したときの代償なのだろう。まるで自分の体では無いかのように、手を開いては閉じてを繰り返していた。

だが万全ではな自分の体よりも、今は敵となっているシェリルの身を心配するところは、アンジェラらしい。

誰にも見えぬように少しだけ笑みをこぼすと、レイラも再びシェリルとミシエルに向き直った。

「お前ら……よくもシェリルを……！」

完全な憎しみと憤怒に光る碧の瞳。

その瞳を哀れとらえながら、一歩踏み出した。

「ミシエル、もう止めてくれないかしら。私達は戦う理由は無いですよ」

決して手を差し伸べる訳ではない、ただ無意味な戦いを終わらせ

たかった。

「戦う理由が無い、だと……？」

怒りを隠そうともせず、ミシエルは食い下がった。

「言っただろ。人間と、その機械人形オートマターは俺達の幸せを奪うんだ。俺達が起こしていることは、全部人間と同じことなんだよ。俺達の幸せを守るために戦う。手っ取り早いところから殺す！理由が無いはずが無いだろ！」

説得しても無理なのか。

これ以上このまま戦い続ければ、二人を壊さなくてはならなくなる。今戦うことを止めてくれれば、その必要はなくなる。

そのほんの少しの希望に賭けてみたが、聞く耳を持ってくれない。手の中に黒い花弁を生み出す。そのままその手を目の前に二人に向けて突き出そうとするが、

「待つて、レイラ」

これからレイラがしようとすることに気付いたらしい、アンジェラが静止した。逆らおうとしたが、現時点でのマスターはアンジェラだ。言われたとおりに行動を止める。

汗を流しながらアンジェラは言った。

「ミシエル。あなた達の言いたいことは痛いほど分かるわ」

「……人間のお前に何が分かる」

「分かるわよ。私が今こうして出てきてるのは、唯一の妹を探したいからだもの。血の繋がった、唯一の姉妹を、ね」

その場にいた全員が、思い出したかのように息を呑んだ。

「私には、あなた達と違って父と母がいるわ。でも、私にとっては他人と同じ。ただ血の繋がっているだけの存在。でもジュリアは、姉である私を慕ってくれた。いくら小さくても、私の唯一の理解者

だった」

よろめく体をメイが支える。支えられながらも、その目はミシエルとシェリルだけをとらえていた。

「立場は変わっても考えは一緒。そう言ったのはあなた達よ。……だったらこんなことは止めて、手を組みましょう?」

レイラとは違って、アンジェラは諦めずに手を差し伸べた。

だが、その手を何の躊躇いもなくミシエルは振り払った。

続けて何かを言おうと口を開いたが、それをシェリルの傷を負っていない手が止めた。

「シェリル……?」

「……アンジェラ・ウィンストーヴ。貴方の言いたいことは間違いない。ここで同盟を組めば、私達兄妹の願いは格段と早まる」
苦痛に歪んでいた表情は、今はただ憎しみに燃え、アンジェラを見据えていた。

「だけれど、手を組んだからと言って、貴方達は、人を、機械人形を壊すことを、拒む。それは目に見えて明らかなこと。組めば、私達の希望は、消えてなくなってしまう」

差しのべられた手がわずかに震えた。シェリルの言うとおり、手を組んでも殺し壊すことは初めから考えに入れていなかったのだ。

それは他の機械人形と同じこと。いくら姉妹が大切でも、だから壊す理由には繋がらない。

「再度、確認する……。私とミシエルの願いは、幸せになること。叶えるには、すべての人間と機械人形を、絶やさなければ、ならない。そのためには、貴方達も殺す。同盟など、初めから無意味なもの」

ゆつくりと床に落ちた扇子を拾い上げる。血が鉄の上を流れた。ネーナが身構え、メイもアンジェラを守るためにその手に力を加えた。ただ一人、レイラだけが何もせず、静かに見つめていた。シエリルは言った。“すべての人間と機械人形を絶やす”と。要約すれば、世界中から人間と言う生物と機械人形という異物を取り除くということ。

「その願いは、今でも変わらない。私は、ミシエルを守るために、殺す」

すべてを殺すと、機械人形であるシエリルが言う。

「でも、実質的に、殺すことが出来るのは、私だけ。……それでいい。ミシエルは、自分の力で、その手を汚す必要は、ない。自分の身を守るために、使ってほしい」

「え？」

アンジェラが疑問符を浮かべた。

「私一人じゃ、すべてを殺すことは、できない。だから、私は——」

すべてを絶やすということは、機械人形である自分をも殺すということ。

扇子が持ち上げられ、持ち主の首元に据えられた。

「——ミシエルに力を授け、ここで絶つ」

第36話 兄妹

持ち主の首に据えられた鉄製の扇子が、鈍く光った。

突然の行動に、真っ先に反応したのは兄のミシエルだ。扇子を握る手を掴み、離そうとする。

「なっ、何してるんだよシェリル！何考えて……っ」

「離して」

「うわっ！？」

だがシェリルはその手をたった一言で振り払った。わざわざ扇子を使わずとも、能力の風を引き起こすことなど容易なのだ。

風に吹き飛ばされたミシエルの体がアンジェラ達の足元に叩きつけられた。

アンジェラは一瞬だけミシエルに目をやったが、すぐに視線を戻す。

「……何を考えてるの、シェリル」

今から自ら死のうとしているシェリルに向かって、静かに問いかける。

据えた扇子はピクリとも動かず、またシェリルも静かに答えた。

「すべての機械人形^{オートマター}を絶やす。その願いを叶える為には、私達も死ななきゃいけない。すべてを絶やすのだから」

「すべてを壊すことは不可能と言ったのはあなたよ。ここであなたが居なくなれば、ミシエルの願いは叶わなくなるわ」

二人の願いを叶えるには、シェリルの《力》が必要なのだ。ここで居なくなってしまうえば、《力》を持たないミシエル一人では叶えられなくなる。二人の願いを叶えるために言ったことではないが、今のシェリルを止めるにはこの方法しかない。

だがそれでもシェリルの考えは変わらないらしい。先ほどよりも諦めの色が強くなった瞳で言う。

「絶やすことが不可能でも、人間と機械人形がミシエルに近づかないようにすることは、ミシエルが死なないようにすることは出来る」

手に力が入る。

「！？やめろ、シェリル！！」

背中を強く打ち叩いていたミシエルが驚いてその体を起こす。ふわり、と今まで一度も見せなかった笑顔が、シェリルの顔に刻まれる。

「生きてね、ミシエル兄さん。ずっと、大好き」

静かに目を閉じると、ゆっくりと腕を引いた。場に居る機械人形達が息を呑み、自殺行為を止めようとレイラの腕が動く。だが間に合わない。

それでもアンジェラが走り出そうとした時、

「やめろおおおおおおおおおおお！！！！」

部屋にまだ幼さの残る男の子の叫び声が響いた。

同時に大きな風が生まれ、目に見えない風はそのままシェリルに向かつて勢いよく吹きつけた。

シェリルが作った風よりは小さいが、だが勢いが強すぎた。

みなが状況を読めず啞然としていて、足もとで倒れていたミシエルが走り出した。

「シェリル！！」

叫んだ声は紛れもなくミシエルだ。

ならばこの風も、ミシエルが作ったというのか。

だが今はこの状況を分析している場合ではない。走り出したミシエルに続いてアンジェラも駆け付けた。その後ろをレイラとメイもついてくる。

一瞬で床が血の海と化した。

「シェリル！おい、シェリル！！」

ミシエルに抱きかかえられたシェリルはぐったりとしていた。紫と白を基調とされたドレスは次第に真っ赤に染まって行く。

その赤は、シェリルの喉元から溢れていた。

握っていたはずの扇子は先ほどの風で壁に突き刺さっていた。

急いでミシエルとは反対側に座ったが、どう見てももう助からない。一目でわかった。

自分が出れることは何一つないと感じると、その体に触れることができず、ただ俯いた。

ただミシエル一人だけが、必死にその肩を揺すっている。

「ひっ」

一番遅くに行動したネーナが息を詰まらせた。戦うために作られた機械人形が血の海を見て息を詰まらせるなど、なんて人間らしい行動だろう。

涙を流しながら、なおもミシエルは泣き叫ぶ。

「なあシェリル！頼むよっ、目を開けてくれ！！」

何もできないのはアンジェラも、機械人形達も同じ。ただこの光景を、静かに見守ることしかできない。

閉じていたシェリルの瞼が震えた。

「！シェリルっ？」

「……ミ、シエル」

どうやら扇子は声帯機能を果たす部品の手前までしか刺さらなか

つたらしい。機械らしい機械音を混じらせながら、シェリルは声を発した。

だがそれだけで、持ちあげようと震える手は上がらない。もう機能を停止しようとしているのだろう。

「……兄さん、大、すき……ずっと、ずっと……」

「ああ俺も大好きだ。だから、死なないでくれっ、シェリル！」
少しずつシェリルの瞳から色が消えていく。

その瞳が、ゆっくりとレイラの方を振り向いた。

「レイ、ラ……これを」

呼ばれたレイラがアンジェラの横に膝をつき、上がらないシェリルの左手を探った。

取りだされたのは、ずっとシェリルが使っていた扇子をそのまま小さくしたようなブレスレットだった。

「使い方、わかる、でしょ……？おしえ、て、あげて……ね……」

「……ええ」

消えそうな微笑みを作ったシェリルに、レイラも同じように微笑み返した。

それから、シェリルの声が聞こえることはなかった。

「シェリル……？」

最後に自分の力で閉じることが出来なかった、虚ろな瞳がミシェルを見上げていた。

「うそ、だろ？なあ！シェリル！！」

シェリルは動かない。何も言わなかった。

この沈黙が、すべてを拒むことを否定した。

静かにアンジェラが開いたままの瞼を閉じる。

「そんな、シェリル……」

あとに残ったのは、生きる意味を失った、哀れな機械人形だけだ

つ
た。

第37話 ケルデン街へ

三体の機械人形オートマターが機能を停止し静寂が満たす部屋。そこに外からの沢山の足音が響き始めた。騒ぎを聞きつけた家の主やその使用人達だろう。

「ここに居てはまずいわ。メイ、ランカとアンナを」
「分かってる」

いつまでも悲しんでいる場合ではない。すぐにアンジェラはしつかり者のメイに指示した。

続けてレイラに指示しようとする、ミシエルに抱きかかえられたシェリルの体に白い布が被せられた。

その布を被せた者を見上げると、先ほどまで泣き崩れていたレイが立っていた。

「レイ……」

「……もし私がアンナを、ランカを殺そうとしなかったら、シェリルも死なずに済んだのかしら」

「……さあ。それは私にも、誰にも分からないことよ。けれどももう終わったの。今は、三人を静かな地で眠らせることしかできないわ」
「……そうね」

精一杯、これ以上レイを傷付けないように言葉を選んだ。それにレイはただ悲しげに微笑んだ。

ミシエルの腕の中からシェリルを抱き上げると、

「シェリルは私が連れていくわ。ランカとアンナは、メイが」

「ええ。ケルデン街の教会に集まりましょう」

素早くアンジェラが待ち合わせ場所を指示する。

二つの白い体を抱き上げたメイが、ガラスの抜けた窓に足をかける。

「じゃ、先に行ってるわ。無事で来るのよ」
窓から二つの影が消えた。

「……誰に言ってるのよ」

誰も居なくなった窓に向かって、アンジェラは苦笑した。

少し離れた場所でもまだ震えているクリスとルイスに近づき、その頭を撫でる。その行為により少しばかり安心したのか、二人の震えがおさまった。二人にひとつも傷が無いことからして、おそらくレイが力を振り絞って守ってくれたのだろう。

再び振り返り、残ったレイラ、ネーナ、ミシエルに告げる。

「これ以上ここに居ては危険だわ。すぐに出ましょう」

*

ケルデン街。そこはアンジェラの家があるファイス街の隣に位置していた。

ケルデン街は、国の中で何に対しても一番を誇っていた街だった。金、食物、人口、土地面積、どれをとっても必ず一番だった。

そのために、貧困生活をおくる者と貴族も多く、またその格差もどの街よりも大きかった。

ある日、ついに貧しかった者達が暴動を起こし、ケルデン街は火の海に吞まれた。立派に建てられた屋敷は全焼し、柱などという残骸しか残らなかった。食物も全て消えてしまった。

何に対しても一番を誇っていたケルデン街は、暴動による死者もどの街で起こる暴動よりも大きく出た。

生き残った者達は他の街へ隠れたか、あるいは国自体から出て行ってしまい、街には誰もいなくなった。

「その街にも唯一残ったのが、とある教会なの。そこも焼けてしまつて屋根なんてないけれど、まだ建物の形を残しているわ」

道中、一行はこれから向かうところの説明をアンジェラから受けていた。

もう日が暮れる時間帯で、道は沢山の人で溢れかえっていた。そのおかげで血で汚れた服が目立つことはなかったが、少しばかり進みにくいのも事実だった。

馬車が一行の前を横切って行く。だがその馬車も思うように動くことができず、まだ目の前に居た。避けて通ろうにも人に邪魔されて進めない。

そんな中、ルイスがアンジェラの服を引っ張った。

「マスター、私とクリスはあそこの薬局でお薬買ってきます。先に向かってください」

「分かったわ。場所は分かるわね？」

「はい！ありがとうございます！」

アンジェラと軽く会話した後、数枚の紙幣を受け取ったクリスとルイスは手を繋いで別方向へと向かった。アンジェラがこちらを振り返る。

「……ああ、薬って貴方達の手当てね」

言われてレイラとネーナは顔を見合わせた。目の前のレイラは、確かに右頬に小さな傷を作っていた。今は止まっているらしいが血が流れていたことがわかる。

そうして止まっているとようやく馬車が動きだした。再びアンジェラ、ミシエル、レイラが歩き出す。

ネーナはというと、その後ろ姿と、《力》を持たない双子が消えた方向を交互に見比べていた。

後ろをついてきていなことに気付いたレイラが戻ってくる。

「何をしているの、ネーナ。はぐれるわよ」

「あつ、うん」

その声に慌てて走った。

姉の横を通り過ぎて前に行く二人に追いつこうとした時、

「間違つても、人間を好きになつては駄目よ、ネーナ」

「!？」

振り返ろうとすると、姉が横を通り過ぎた。再びネーナが最後尾となつた。

何故、今、姉は自分の考えていることが分かつた……？

ただそのことが頭の中で溢れた。

ネーナは今、アンジェラと、クリスとルイスの関係を羨ましく思つていた。

人間の手によつて生み出され、その人間が優しかったから、本来戦争の道具としてしか見られなかつた機械人形は家族として結ばれた。絆が生まれた。

血が繋がっていなくても、それでもお互いが認めた『親子』という絆。

軍人によつて生み出され、感情があるからと牢屋に閉じ込められたネーナ達には無縁の絆。それが、羨ましかつた。

欲しいと、思った。

人間と繋がれる、何かが。

だが姉はそれを許さない。機械人形は機械人形、人間は人間。その壁を壊すつもりはないのだ。

「お姉ちゃん……」

先を行き人ごみで少しずつ隠れていく背中に向けて、小さく呟く。

「ならお姉ちゃんとアンジェラの関係は、全部、偽物なの……？」

返ってくることはない疑問。
それはただ発されただけで、
空気へと溶けて行った。

第38話 墓

ようやく群衆の中から抜け出した一行は、先ほどまでいた街とは全く違う雰囲気を纏う空間へと出た。

沢山の人や店、夕食の香りなどは一切絶え、代わりに見えてきたのは、荒れ果てた土地と人工的な光の見えない空間だった。ずっと視線の先に沈もうとする太陽が見える。

アンジェラは一度その土地を眺め、複数の歪な形を保った建物のひとつに向かって再び歩き出した。後方を機械人形達オートマターがついてくる賑やかな街の端から歩き続け、ようやく形の残った建物に着いた。屋根の抜けた、壁にいくつものひびを作り今にも壊れてしまいそうな、傾いた十字架の立つ教会。

「ここが？」

隣にレイラが立ち、ひびの入った壁を見上げている。それに頷くと、中には入らずに教会の裏へと回った。

そこには先に屋敷を出たレイとメイがいて、三つの大きな穴が作られていた。それは一人一人が入るには十分な大きさで、三体の機械人形を入れるために作られたことがうかがえる。近くの木にはどこから持ってきたのか、大きめのシャベルが二つ立てかけられていた。建物の残骸に座っていたレイが立ちあがる。

「もう準備は出来てるわ」

「ありがとう。……でもちよつと待って」

そう言うつと疑問符を浮かべる機械人形達を置いてあたりを歩き回る。教会から少し離れた位置で足を止め、その場にしゃがんだ。

足元には小さな花が咲いていた。雑草と分類されるものであることが分かるが、これで十分だろう。三人分を地から抜き取るとみな
の元へ戻り、ミシエルに一輪手渡した。

「あなたが、シエリルに渡すのよ」

意味が分からない、という表情をしていたミシエルがそつとその

花を両手で包む。

残った花に関しては一輪をレイに、もう一輪は自分が持つことにした。

しばらくすると遠くから足音が聞こえ、薬局に行っていたクリスとルイスの二人が戻ってきたことに気付いた。その場に全員が集まったことを確認するとレイとメイに合図を送り、二人が三人の体をひとつずつ、穴の中へと入れていく。

瞳が閉じられた三体の機械人形。その一体一体にアンジェラ、レイ、ミシエルが花を置いていく。

メイはアンナに、アンジェラは真ん中で眠るランカに花を握らせた。二人ともが花を置き立ちあがると、アンジェラの視界の端にミシエルが映る。

ミシエルは妹の亡骸に花を握らせていた。固く機能しなくなった手に触れながら、優しく微笑みかけていた。

「ありがとう、シェリル。……ごめんな」

そう言うのと立ち上がり、レイラとネーナの後ろに移動する。

「アンジェラ、土、かけるわよ」

静かなメイの声に我に返り、うなずく。

「……お願い」

筋肉強化の《力》を持つレイとメイの二人が土をかけていく。

少しずつ、三体の体は見えなくなっていく。

振り返るとレイラとネーナの後ろで、ミシエルが今にも泣きそうな顔で立っていた。

「辛いなら、教会の中に入っていればいいわ。ボロボロだけれど、椅子はまだ残ってるはずだから」

「……いや、いい。最後までここにいる」

溢れそうになる涙を必至に堪えるミシエル。そんな彼に誰も手を差しだすことはしない。今は彼自身が、手を差し伸べられることを

望んでいない。それをこの空気から感じ取った。

やがて全ての穴が埋まり、地面に三つのふくらみが出来上がった。
「アンジェラ」

バラバラと屋根のない教会の中に戻って行く中、唯一人、ネーナがその場に残ってアンジェラの足を止めた。振り返るとネーナは三つの土のうちのひとつ、ランカのいる土を見つめていた。横髪によってその表情は読めない。

「なに？」

「変なこと、聞くよ。いい？」

以前にも似たようなことをメイに言われた気がする。そんなことを思いながら頷く。

ただ土を眺めながら、言う。

「どうして、こんなことするの？」

内容が分からない、そんなことを言われて何も言えなくなってしまう。これだけで返事を期待していなかったのか、ネーナの黒い左眼がこちらを向く。

「どうして、“お墓”なんて作ったの？」

泣いていたと、気落ちしていたのだと思っていたネーナの瞳は大きく見開き、何も映していない虚ろな色をしていた。そんなネーナに思わず後ずさりそうになるが、それを無理矢理止めて口を開く。

いつものように、口を開く。

「私は、機械人形にもお墓を作ってあげるぐらいのことはしてあげべきだと思ってるの。大人が聞けば馬鹿げたことだと思うかもしれないけれど、それはいけないことではないわ。生きて、人間と同じように感情を持って動いていたの。だったら、お墓ぐらい……」

「機械人形は“機械”なんだよ。人間みたいにその身が腐ることは

無い。腐って、土に還るなんてことはないんだよ」

あまりにも的確な答えに、次の言葉が言えなくなった。

目の前にいるネーナはいつもと同じネーナだ。どこも変わったところなどない。質問の内容が少しばかりレイラに似ている気がするが、そこは双子なのだ、似ていてもおかしくなどない。

そう自分に言い聞かせて再び口を開こうとすると、

「ごめん」

不意にネーナが小さく呟いた。驚いて見据えると、

「いきなりごめんね、アンジェラ。ちょっと確認したかったことがあっただけなの」

いつもの無邪気な、それでいて寂しそうな表情でネーナが笑った。何事もなかったかのように教会に入ろうとするネーナ。その背中を、今度はアンジェラが止めた。

「待って、ネーナ。……何かあったの？」

三人の死を目の当たりにしたために決して明るいわけではない。だがあまりにも普通すぎる行動に、言わずにはいれなかった。

振り返ることはせず、ネーナは答える。

「お姉ちゃんにね、言われたの。いろいろと」

「いろいろ？」

「うん。でもアンジェラには関係のないことだよ。これは私達姉妹の問題だから気にしないで」

再び歩き出そうとネーナの足が浮く。だがその足は何故か進もうとせず、地につま先をつけたまま固まってしまった。

これを好機と見たわけではない。だがそれを切っ掛けに、アンジェラの体が動いていた。

震えるネーナの右手を、そっと握っていた。

「深くは聞かないわ。貴方達二人の、大切な問題なのだから。でもね、相談ならいくらでも聞いて頂戴。私達はもう、家族でしょう？」

ネーナよりほんの少し高い位置にある頭が今は垂れ下がり、ネーナと視線の高さを合わせる。振り返るネーナの瞳は大きく見開かれ、オッドアイが揺らめいていた。

何かを言おうと口が震えている。だが次の言葉が紡ぐことができず、ただ口の開閉を繰り返すだけだ。

そんなネーナにただ微笑み、手を離れた。驚いたネーナが名残惜しそうに動き、離れたアンジェラの手を再び、今度はネーナから握っていた。

「わ、たしたち……っ」

「？」

やっと発せられた声は震え、それでもなお紡がれる。

「わたし、たち、家族……っ？」

単語を並べただけのような言葉に、躊躇いなく頷いた。

するとネーナの表情がみるみる和らぎ、一筋の涙が赤い右眼から零れ落ちた。

すぐに言葉なく涙を拭うともう涙は零れず、少しうるんだ瞳がアンジェラを映した。

「ありがとう、アンジェラ。変なこと聞いてごめんね」

「いいえ。いつでも相談してくれて構わないわ。私だけじゃない、レイやメイ、クリスやルイス、それにミシェルにだって相談しているのよ」

「うん。……ありがとう」

素直に頷いたネーナがぐるりと回り、教会の中へと消えて行つた。

第39話 意志

教会の中は静かだった。日も暮れ、空には星が散らばっている。アンジェラの屋敷に居る時も空を眺めたが、ここまで星が見える事はなかった。大きめのものが小さく映ったぐらいだ。

この教会からはとても美しく映る星。だが今は心からそれを楽しめる状態ではない。状況が状況だし、考えるべきことがたくさんある。

「……」

本来ならここでアンジェラが切りだすべきだろう。だがアンジェラはランカとアンナの死を目の前にしてから一度も休んでなかった。それは他の機械人形達オートマターも同様だが、それらはあくまで機械。人間であるアンジェラには休息が必要だ。だから誰も急かすことはしない。だが日が暮れてから大分経った頃、さすがにアンジェラの為に話を切りださなくてはいけないぐらい、時は過ぎていた。

「アンジェラ、これからどうするの？」

おそらく一同の中で一番平静を保っているのはレイラだろう。代表してそう言くと、星を見上げていたアンジェラが首を元に戻した。「どうするって？」

「……宿とか、食料の話よ」

まさか疑問が返ってくるとは思わなかった。さすがに驚いて、半ば呆れながらレイラも返した。

アンジェラはしばらく思案する様子を見せてから、ここまで一緒に来たアンジェラ曰く“家族”を見渡した。そこでようやく、人間は自分しかないということを感じ出したらしい。

「……宿と食料が必要なのは、私だけなのね」

その言葉に、今度は機械人形達が驚いていた。

再び考える仕草をするアンジェラ。誰も彼女を急かすことはしない。ただ静かに待っていた。

やがてその仕草をやめて、再び一同を見渡すと、

「今日はもうここで寝ましょう。食料はまた明日買い出しに出て、宿もその時に探しましょう」

「マスター、お腹空かないのですか？」

「ここ、寒くないですか？」

誰よりも早く反応したのは、クリスとルイスだった。二人は本当の母親であるアンジェラを心配しているらしい。

「大丈夫よ。それほど寒くはないし、今は食欲がないわ……」

機械人形の死とはいえ、やはり気持ちのいいものではない。食欲が出ないのは当然だろう。

このグループのリーダーが今日はこのままここで過ごすというのなら意義は無い。ならば次の問題だ。

「ミシエル」

この問題は、全員が無関係ではないが、話の中心となるのはミシエルだ。ミシエルの名を呼ぶと、俯いていた本人が顔を上げた。もう泣いてはいない。

無言で顔を上げたミシエルに、レイラは近づいた。そして手に握っていた物を差し出す。

手の中には、シエリルがその機能を停止する時に託した小さな扇子のブレスレットが入っていた。

ミシエルは何も言わずにそれを受け取ると、数秒ほどそれを眺めてからレイラを見上げた。

「これ、なんだよ……」

「シエリルが事切れる前に、貴方に託した物よ」

「俺に……？」

再び扇子を見つめる。今までシエリルが使っていた扇子を小さくしただけの様なブレスレット。見た目にはそれはただのブレスレッ

トにすぎない。使い道が分かるはずもない。

だが不思議なことが一つだけあった。

見た目に扇子だと分かったのは、今までシェリルが使っていたのを見ていたからだろう。だから扇子の形態が違っていても、すぐに扇子だと気付けるのだ。

その小さな扇子は、使う前のように畳まれていた。

「その使い方を、私は貴方に伝えなきゃいけない。その役割を、シェリル本人から渡されたわ。でもその前に、確認しなきゃいけないことがある」

「……？」

疑問符を浮かべたのはミシエルだけではない。アンジェラや他のドールズも同じだ。

この扇子の使い方を知っているのはレイラだけ。レイラだって、シェリルに触れた時に感じ取ったようなものだ。おそらく、このブレスレットを託す際に触れた者に使い方を自然に伝授するようにしていたのだろうが、伝授する相手を間違ってはならない。この中で選ばれたのが、レイラだ。

シェリルに信頼されたから、伝授されたのだ。だったら、間違いなく、それを受け取ったレイラが責任を持ってミシエルに伝える必要がある。

強くする権利がある。

これから伝えることは、レイラ本人がこの目で確認したことではなく、意思を通じて伝えられたものだ。レイラ自身も半信半疑というのが本当のところだが、伝えなければならない。

一度深呼吸すると、動揺し始めた気持ちを落ち着かせてミシエルを見据えた。

「この扇子の中には貴方の《力》が入っているわ」

「!？」

その場の空気が張り詰めた。その中で真っ先に反応を返したのは、ミシエル本人だ。

「待てよ……俺は《頭脳型》なんだ。最初から《力》なんて持つてないはずだ」

「ええそうね。でももし、それが別の場所にあったとしたら？」

「は……？」

「ミシエル、貴方の《力》は強すぎるのよ。感情の波が激しい貴方が、この《力》を使えば貴方自身を殺すことになる。そう判断したシエリルが自分の感情を殺して貴方から《力》を奪った。そしてその力が、この扇子の中に入っているわ」

ミシエルは何も言い返さなかった。ただ呆然としている。

だがその代わりに、アンジェラが口を開いた。

「感情を殺して、っていうのはよく分からないわね。どうして感情を殺して、隠れるように力を奪う必要があったのかしら？」

本当に不思議がつている口調だ。それにレイラはちゃんと答える。

「ミシエルには両方の《力》が備わっているわ。《頭脳》と《力》。それは私達、力が分かれてしまった機械人形の誰もが羨ましがるところよ。けれど《力》が強すぎる。きつとミシエルから《力》を奪うと本人に告げれば、貴方は怒るでしょう？どうして折角備わった力を奪うのか、って。貴方を苦しめてしまう。本当はその事がとても辛くて辛くて仕方がない。けれどずっとそのまま居れば、軍は無理矢理ミシエルに感情を消させ、一人だけ採用したのでしょうかね。そうなるぐらいなら、哀しむ自分を殺して貴方を救うべきだと、彼女は考えたのよ」

「……でも、俺はたとえ両方の《力》があつたとしても、軍に従う気はない」

「それは今の貴方が言っているのよ。当時ならどうかしら？感情がある限り、自ら軍に従うなんてことはないでしょうけど、きっと彼女を人質に取られたら貴方は従っていたはず。シェリルは、自分が足かせになることが嫌だったのよ」

「……」

無言で手の中の扇子を見つめる。星明りしかない中、その扇子が輝く事はない。

座ったミシエルに視線を合わせるように、レイラは膝をついた。

「この《力》は強い。下手をすれば貴方を呑み込んでしまう。シェリルは貴女を守るために力を奪った。けれどその彼女が、もう貴方に託しても大丈夫だと判断したの。もし使い方を間違えれば、また危険になるかもしれない。……それでも貴方はこの力を取り戻したい？」

伝授されたことの中に、確認してほしいということとはなかった。これはレイラの意志だ。

使い方を間違えればミシエルは死の淵に立たされることになる。ミシエルを守るために託されたものの、それで本人を殺してしまつては意味がない。

彼にそれを使う意志がないのに、無理矢理使わせる必要はない。無言で扇子を眺めていたミシエルが、視線を外すことはせずに口を開いた。

「あいつは、シェリルはさ……自分を殺して、何事もなかったように振舞うことで、今の俺を作ったのか」

「……そうね。哀しみ苦しんでいる自分を、貴方に見せたくなかつ

たんでしょうね」

「……………馬鹿だなあ」

そう言つと、扇子を持っていない手を額にやった。嗚咽が聞こえ始める。ミシエルはみんなが思っていたほど、強くないらしい。本当は泣き虫で、寂しがり屋らしい。

誰に言つてもなく、呟く。

「…………俺はさ、喜びもしてくれないお前を見て、すごく辛かったよ…………。本当のことを言ってくれば、俺はあんな身勝手な行動はしなかったのに…………」

ぎゅ、と手に力が籠った。

そして額にあてた手で両目を拭うと、今までとは違う、強い意志を込めた両目でレイラを見据えた。

「教えてくれ、コレの使い方」

コレと言つて手を開く。閉じたままの扇子が手の中で転がる。

「使い方を間違えれば、貴女は死ぬかもしれない。それでも？」

「ああ」

いつもより静かな声で、答える。

「これはシェリルが望んだことなんだ。アイツが初めて、俺に命令したんだ。だから——俺はこの力を使いこなす。自分のモノにしてみせる」

いつもよりずっとずっと強い意志が、教会の中にいる全員に伝わった。

その意志を汲み取ると、レイラはわずかに口をほころばせ、静かに頷いた。

第40話 悩み

翌朝。いつもと同じように強く照る太陽の熱を直に感じながら、アンジェラはその身を起こした。

いつもなら目が醒めればまず薄暗い部屋が目映る。そしてベッドから下りてカーテンを開け、そこで初めて太陽の光を受けた。だが今は当然違う。ケルデン街の崩れた教会には光を遮る天井はなく、昇った太陽がすぐに目に入る。アンジェラは朝一番に瞼を焦がした光に目を瞬きながら、周りを見渡した。

自分の座っている椅子のもうひとつ隣の椅子で、クリスとルイスが寄り添うように眠っていた。その隣の半分崩れてしまった椅子の上では窮屈そうにミシエルが横たわって眠っている。反対方向に首をひねると、アンジェラの座る椅子の下で、椅子にもたれる形でネーナが目を閉じていた。

「おはよう。目が覚めた？」

オートマター

まだ見ていない三体の機械人形の姿を探していると、背後から声がかけられた。

「おはよう、メイ」

そこに立っていたのはメイだ。黒の三つ編みを垂らしながら、覗き込むような形で見下ろしていた。

メイはそのまま膝をつく、椅子の背もたれに両肘を置いて、その上に自分の顎を乗せて今度は見上げてきた。

「調子はどう？昨日、結構参っちゃったみたいですぐに眠ってたようだけど」

「ええ、大丈夫よ。……レイは？」

身を心配してくれる言葉に素直に頷きながら、いつも隣に立っているはずの双子の姉の姿が見えないことを疑問に思い、そう尋ねた。もう一度教会内を見渡してみるが、やはりレイの姿はない。それどころか、レイラの姿もなかった。

「レイは見張り。いくらこの街に人がいないなんて言っても、ここは隣の街の境目なんだもの、誰かが来てもおかしくないでしょ？その見張り」

「そう。レイラは？あの子も見張り？」

「レイラは……」

そこで何故かメイは口籠った。一瞬だけ目を伏せたが、すぐに答えてくれた。

「レイラはお墓にいるわ。……本人は隠してるみたいだけど、結構悩み苦しんでるみたいよ」

*

『おしえ、て、あけて……ね……』

脳裏に、シェリルが最後に言った言葉がよぎる。機械人形としての機能を止める時、最後にレイラに向けて言った言葉。

手に触れた瞬間に伝わってきた、手渡された扇子のプレスレットの使い方。

《力》の取りだし方は簡単だ。閉じたままの扇子を、無理矢理に近いが自身の指で開けばいいだけだ。

だがもし力の主以外が開けば《力》はどこかに抜けて暴走してしまうだろうことが考えられるし、本人が開けたとしてもちゃんと本人の元へ帰るかも疑問だ。その辺りのことは伝授されていない。

正直、本当にミシエルにこの力を返していいのか、迷っている。

シェリルが大丈夫だと判断したのなら、大丈夫なのだろうと信じたい。だが端から見れば不安ばかりが募る。あそこまで感情が揺らいでしまうと、自分で抑えきれなくなってしまうのではないかと思

ってしまう。

だがそんな理由で《力》を返さないとなると、それはまるで軍と同じだ。「感情を捨てたら解放してやる」。今レイラが考えたことは最低なことだ。《力》を返す代わりに感情を捨てるなど、どうして言えよう。自分が感情を持つ機械人形であるということもあり、そんなことは言いだせるはずがない。

仮に言ったとしても、きっと後で後悔する。シェリルが許してくれない。

三つの土の山の前で、レイラは独り、沢山思案した。

こんな話、こんな悩みは誰に言っても、一番確かな答えは返ってこないだろう。伝授されたレイラにしか出せない答えなのだ。こんなことに他を巻き込む必要はない。

右手を固く握り、ミシエルに話を持ち出したのはいいが後悔している自分に苛立っていると、斜め前方に白いスカートが映った。

立っていたのはアンジェラだ。もう太陽もある程度まで昇り、目が覚めたのだろう。壁に片手をついたアンジェラが無言でこちらを見つめていた。

何も言ってこないことを不思議に思いながらも、レイラもそこから離れようとはしなかった。

目の端でアンジェラの様子を窺っていたが、どうやらアンジェラはどう声をかけるべきか悩んでいるらしい。何度か口を開いたり、足を浮かせたりしているが、一向にそれらが実行されることはない。その姿に半ば呆れて、仕方なくレイラが動いた。

「なに、アンジェラ？何か用？」

「あ……」

声をかけられたことに一瞬びくつと震えたが、やはり何も言えず俯いてしまう。

面白い人間だと、つくづく思う。

アンジェラは屋敷に居た機械人形すべてを自分の家族だと言った。クリスとルイスにとっては本当の母親だ。そして他の機械人形もアンジェラを本当の母親のように慕い、本人も悩んだり苦しんでいる機械人形に手を差し伸べ、本当の母親のように振舞っていた。

だがたまに何も言えなくなる。人間なのだ、それは当然の話だ。それにアンジェラはまだ14歳だ。まだ子供なのだ。分からなくても当然の話だろう。

一向に声を発することが出来ないでいるアンジェラを待っている、その背後からメイが姿を現した。

「アンジェラ、レイラ、私とレイはこれから朝食を買いに行ってくるけれど、二人はどうする？」

「どうするって、行った方がいいのかしら？」

「そうね……アンジェラには一緒に来てほしいけれど、レイラにはここで見張りをしてほしいかも。無理には言わないけれど」

肩をすくめるようにメイは言った。きっと中では他の機械人形がまだ眠っているのだろう。

「分かったわ。私はここで見張りをしている」

「ありがとう。じゃあアンジェラ、貴方の朝食を買いに行くわよ」

「あ、でも……」

メイに手を引かれながら、アンジェラが困ったようにこちらを振り返った。だがやはり何も言えない。

「……何か困ったことがあれば言うから、そこまで心配しなくても大丈夫よ」

アンジェラはレイラの前では何故か、母親ではなくまるで子供の様だ。本人は無意識だろうが、レイラの瞳にはそう映る。

子供のアンジェラにそう言うと、本人はどこか安心したように微笑むとそのまま壁の向こうに消えた。

その場に残されたレイラは静かに右端の山を見下ろした。そこは

シェリルが眠っている土だ。静かにそこに膝をつき、土に触れる。
「ねえシェリル、私は貴方と話したことが無いわ。あの時、戦いの中で初めて話したのよ。それも対立しながら。……なのに貴方は、出会ったばかりの私に《力》の使い方を伝えた」

触れた土の下から答えは返ってこない。だがそれでも、言葉を紡ぎ続ける。

「貴方はずっと、人間とそれに従う機械人形を恨み、同時にミシェルの仲間を探していたのね。優しい妹だわ」

土に触れていた手を離し、ゆっくりと立ちあがりながら、底で眠るシェリルに微笑む。

「貴方の兄は私が必ず、強くしてみせるわ。彼の仲間は、アンジェラとその子供達よ。彼がなんと言おうともね。だから安心して頂戴。もう彼を一人にはしないから」

小さな風がレイラの髪を弄ぶ。その風はまるで、シェリルが微笑んだようだった。

第41話 調達

簡単な朝食を調達してアンジェラ、レイ、メイが教会に戻ると、
機械人形達オートマタはすでに全員目を覚ましていた。

「遅くなってごめんなさい。パン一つずつしかないけれど……」

そう言いながら一体一体にミニサイズのフランスパンを手渡していく。

このような形の朝食は初めてだ。貴族であるアンジェラにとっては、大きな部屋で大きな机の上に沢山の料理を並べている風景が当たり前だった。

だが今は贅沢は言えない。外に飛び出してきたのは自分なのだ、これぐらい当然だろう。

それに、周りにはパン一つだけの朝食の人など沢山いる。それどころか、そのパンよりも酷い朝食を摂る者だっているはずなのだ。全員にパンを渡し終えると、自分のパンを頼張る。知らない小さな店のパンだったが、とても香ばしかった。

普段よりも口数が少ない食事を終えると、再びアンジェラは立ちあがる。

「ジュリアとルナを捜しに行くわ。ついでに、薬品とか必要な物……

服とかを買いに行きましょう」

「なら一応役割分担しとかない？」

昨日は沈んでいたレイがそう提案した。

「そうね。じゃあ、クリスとルイスは薬品の調達をお願い。昨日と同じ店で構わないわ。レイとメイは服をお願い。レイラとネーナ、ミシエルは……」

そこまで言いかけた時、不意にレイラが小さく片手を上げた。

「悪いけれど、私とミシエルはここに残るわ」

「はあ!？」

「シェリルに渡された力を、ミシエルに戻したいの」

反抗的に上がった声に、レイラが返す。ミシエル自身はアンジェラ達に協力したい、というより外に出たかったみたいだが、力を返すと言われた途端、反対する言葉は消えてしまう。

同行しない理由がそれであれば、無理強いはいしない。

「わかったわ。レイラとミシエルはここに残って、後のことはレイラに任せるわ。ネーナ」

最後に残ったネーナを振り返る。ずっとそこに静かに座っていたネーナが顔を上げる。

「貴方は私と一緒に、食料の調達をしましょう」

*

教会に残る二人を背後に、他のメンバーは街の方へ歩き出した。

「服って、アンジェラの服でいいのよね?なんでもいいの?」

「出来れば動きやすい方が嬉しいかも。でも無理にとは言わないわ。ただフリルは少なめで」

「動きやすさとなると、靴も見ておいた方がいいわね」

「そうなるわね。あ、そうそう」

食料や薬品はともかく、服はその人のサイズに合った物でないと意味がない。レイとメイが矢継ぎ早に質問してくる。

だがそれらの声を遮ってアンジェラは言う。

「服は私のものだけでなくていいわ。他の、貴方達ドールズの分も買っておいて」

「でもアンジェラ、私達に着替えは……」

隣を歩くネーナが口をはさんだ。反対側を見ると、クリスとルイスも似たような、疑問の色を浮かべた瞳で見つめていた。

「いくら必要ないとは言っても、ボロボロになってしまつては困るでしょ？一応よ一応」

確かに、機械人形に服を与えるというのは少し変かもしれないが、実際軍でも機械人形用の軍服はいくつも用意されているという話だ。民家に置かれている機械人形にも複数の服があつたっておかしうはないだろう。

それに、アンジェラにとってドールズは家族だ。自分勝手な理由で家を飛び出したアンジェラについて来てくれる、大切な家族なのだ。

その家族達の健康やそれ以外のことを気にするのは、当然のことなのだ。

ある程度歩くと自分のいた街であるファイス街に入った。

「それじゃあ、正午にここで落ちあいましょう」

その声を合図に、それぞれ二人ずつ散らばっていく。

正直一番心配なのはクリスとルイスだが、礼儀は誰よりもわきまえている。大丈夫だろう。レイとメイに至ってはなんの心配も必要ない。

アンジェラと共に行動することになったネーナを見ると、やはりというべきか、ネーナは目を輝かせて街を見ていた。

どうもこのドールは初めて見る物が新鮮なようで、よく周りをキョロキョロしている。姉のレイラとは大違いだ。

だがそこがどこか可愛くも見える。

ネーナを見ていると、まるで本当の人間の様で、機械であるというのを忘れてしまう。

「アンジェラ？」

じつと様子を見ていると、視線に気づいたらしいネーナが振り返

った。

「何でもないわ。さ、私達も行きましょう」

「うん！」

もしかしたら姉の視線が無い、という解放感があるのかもしれない。ネーナは昨日よりもずっと、楽しそうに街を歩いていた。

レイラは人間に対して強い反抗意識を持っている。人間の作った物に興味を示すなど、もってのほか、というのがレイラにとっては当たり前なのだろう。

対照的にネーナは人間の作った物に興味を強く示している。

何故同じ水晶から生まれた双子が、こうまで違ってしまったのか。双子だからこそ、全く正反対になってしまった可能性もあるが、そんなこと、誰ひとりとして分らない。

ずっと考えていても仕方がない、と考えを振り切り、アンジェラも歩きだした。

第42話 視察

「ね、これは買わないの？」

アンジェラ達がケルデン街を出てから二時間ほどが経ち、もう小一時間で約束の正午という頃。

食料の調達にアンジェラと同行していたネーナが、店頭に並べられたカモの肉を指さして言った。

「お肉なんて、すぐに腐っちゃうから無理よ。野菜も難しいけれど……できれば日光の下でも腐らないものがないわ」

「パンとか？」

「そうね。パンが理想だけれど、それ以外も欲しいわね」

「……よく分かんない」

ネーナが食料について詳しく知らないのは当然だろう。

オートマター

機械人形は本来食事を必要としない。そこに、半分無理矢理に近くアンジェラが与えているのだ。味も殆ど気にしない彼女達からすれば、腐ったものでも問題ないだろう。

しかし、人間はそうはいかない。腐った物を食せば腹を壊し、気分の良いものではない。

ネーナが肉を見て「欲しい」と思うのはもつともだが、金銭的にも買えそうにもなかった。

「水を買いますよ。少し多めに」

「アンジェラが全部飲むの？」

「そんなわけないでしょ。傷の手当てにも水は使えるのよ。手を洗ったりとか、他にもいろいろ」

「ふーん」

分かったのかどうか怪しい返事を返すと、ネーナはまた走り出した。次に目に入ったのは食器店らしい。さすがに今の自分達には必要がないものだ。

今のネーナが店内に入ると、売り物を壊してしまいそうではらは

らする。

「……ネーナ、食器は必要ないわ。行きましょう」

何か問題が起こる前にと、ネーナを呼び戻す。声に反応してこちらを振り返ってはいるが、名残惜しそうにそこから離れようとしている。

何にせよ、今アンジェラの両腕には沢山の食物が入っている。一度教会に戻って置いた方がいいだろう。

再度ネーナに声をかけて戻ろうとすると、

『気をつけて』

突然、頭の中に少女の声が響いた。

耳から入ってきた声ではない。脳内に直接響いたということは、サンの他にいないだろう。

（気をつける……？）

一瞬だけ聞こえた言葉を反復する。

『機械人形が、近づいています』

直接響く声はそう言った。機械人形は、機械人形と人間の気配を感じるができる。人間のアンジェラには到底できないが、サンには人間の体の中アンジェラにいても感じる事ができたのだろう。

もしこちらに近づいている機械人形がクリス達やレイ達なら、サンは注意を促したりしない。こうやって声をかけるということは、敵しかいないだろう。

荷物を抱えたまま周りを見渡し、それらしき姿がまだ見えないことに安堵した。今の内にネーナを呼び戻して、事が起こる前にここを離れるのが得策だろう。

先ほどとは違う意味でネーナを呼ぼうとすると、

「あんたが、アンジェラ・ウィンストーヴ？」

真正面に立つ少女にそう呼びかけられて、出しかけた声が引つ込んでしまう。

目の前の少女は白い髪をしていた。長いその髪をツインテールで結び、向かって右の前髪をヘアピンで止めていた。金色の瞳は好奇心で燃え、アンジェラの瞳を覗き込んでいた。

「！」

貴族でも、ボロ布でもない、だがフリルをふんだんに使った服をまとっている少女。数瞬間、彼女は目の前にいただろうか。覚えがなかった。

周りを見渡したために一度その場所から目は離れたが、それは本当に一瞬のことだ。わずかな時間で彼女はそこに、それも手の届く範囲に立っているのだ。

「だれ……？」

自分の名前を知られていたことにも警戒し、冷静に問う。

「あーあたし？」

軽い調子で少女は言った。

「あたしはイリヤ。機械人形だよ」

アンジェラの中で、サンの警戒心が強くなった。

丈の短いスカートを履いたイリヤは、前かがみになりながら、アンジェラの顔を下から覗き込んだ。だが視線はすぐに、アンジェラの胸元に向けられる。

そこには月のペンダントがぶらさがっていた。

「ふーん……」

目を細め、イリヤはペンダントを見つめた。

だがすぐに後退したかと思うと、後ろで組んでいた両腕を下ろし、少女は言った。

「あたしさ、あんたを連れてくるように言われてるの」

「私を……連れて？」

「そう。説得して連れてこいって。でもさあ」

敵だったならば、簡単に用件を言い過ぎだ。罾かもしれない。先ほどよりも強く警戒しながら、わずかに足に力をこめる。

下ろされた左手を開くと、その空気が変質していることが感じ取れた。

「ただ説得して連れていくだけじゃあ、面白くないよね？」

言ったかと思うと、今度はその腕を大きく振り上げ、そして勢いよく下ろした。

いつからそこに現れたのか、イリヤの左手には白い雷のようなものが浮かんでいた。それは距離など全く気にせず、周りに放電しながら剣のような形をしていた。

振り下ろされた雷の剣は、わずかにアンジェラから逸れ、すぐ横の地面に亀裂を作った。雷と地面が接触したときに生じた土ぼこりが視界を奪う。

目に入らぬように庇いながら前を見ると、いつの間にかイリヤの顔が目の前に肉薄していた。

「それにさあ……」

少女の口が不気味に歪められる。

姿を目視したときにはもう遅い。イリヤの右手がアンジェラの首を掴み、空に掲げるように軽々と持ち上げていた。抱えていた荷物が腕から滑り落ち、紙袋に入っていた林檎や梨が転がる。

「あぐっ!？」

突然気道をふさがれ、肺に残っていた酸素すらも口を割って出ていってしまう。

それでも酸素を求めて呼吸を繰り返していると、アンジェラの首を掴んでいるイリヤは、優しく可愛らしい笑顔を浮かべながら、こう言った。

「説得だけじゃあ、来てくれそうにないしね」

表情は笑っているのに、その瞳は殺意に満ちていた。

第43話 対照的

イリヤの手によって気道をふさがれてもなお、浅い呼吸を繰り返す。

荷物が地面に転がり、代わりに自由になった両腕でイリヤの細い腕を掴む。首を掴む腕から逃れようと必至にもがく。

通常の人間の女の子ならば、片腕で自分と似たような背丈の女を持ちあげるのは不可能だ。直前に話していたことも含め、この少女が機械人形であることは確固たるものとなった。

そして、人間であるアンジェラの力では、到底機械人形に敵うはずがない。

「くっ……！」

指先に力を込めるものの、その白い肌に傷一つ付けられない。

「あんたさ、いっぱいドールズ従えてるんだって？」

眼下の少女は楽しそうに笑う。

「ほんと、吃驚だよ。戦争の為に作られた機械人形を、自分の家族として扱ってるなんてさ。あたしのマスターも相当な馬鹿だけど、あんたはそれ以上の馬鹿だよ」

何も手にしていないイリヤの左手に、先ほどと同じ雷が生じる。

「で？今あんたの周りに機械人形は、あのちんちくりんの目の色が違う小娘ちゃんだけか。他は？いないの？」

どこか拍子抜けしたような表情に変わる。答えようにも答えられない。

『アンジェラ！』

自分の中でサンが叫んでいる。だが、人の中にいたままでは、サンは何もできない。そもそも人と人の中を行き来することが能力であるため、再びこの身を預けても、この腕から逃れられるかは疑問だ。

少しずつ意識が遠のいていく。飛びそうになる意識を必至に繋ぎ

とめ、イリヤを強く見つめる。

それは、見つめるといふより、睨むという表現の方が近かったかもしれない。

アンジェラの目が気に入らなかったのか、不機嫌そうに目を細めたイリヤの手に力が籠った。

「ムカツク」

ゆっくりと、指がより深く首に食い込んでいく。

「あんたのその目、ロゼッタそっくりだ」

もう無理だ。次第に朦朧としてきていた意識が完全に途切れそうになる。

「……マスター！」

遠くから誰かが呼ぶ声がした。この呼び方をするのは、クリスとルイスの他にいない。

消えかける意識で、かすれた声を振り絞ろうとする。

首の皮膚を伝って届いていたイリヤの熱が離れた。

いつの間にかイリヤは後方に跳び、着地と同時に生じた砂埃を辺りに撒き散らしていた。

突然のことで状況が判断できない。

ただ地に爪先が着いた時、自身の体重を支えられず体が前方へ傾くのが分かった。

同時に、傾いた自分の体が誰かに支えられたことも、分かった。足に力が入らず、そのまま支えてくれた人物に体を預ける。続いて慌てて酸素を求めて荒い呼吸を繰り返す。

首がヒリヒリする。強く締めつけられていた証拠だ。

ようやく息が整うと、まだ肩を抱いて支えてくれている人物を見上げた。

髪の短い、黒い少女だった。

向かって左の前髪をヘアピンで止め、後ろ髪が邪魔なのか、カチユーシャをしていた。凛々しく整った顔。それほど豪華でも貧相でもないフリルに身を包んでいる少女は、イリヤとは対照的な少女だ。「何すんのよ、イサラ！」

片膝をついた状態でこちらを睨んでいるイリヤが叫ぶ。その声に、イサラと呼ばれた黒い少女が振り返った。

「イリヤ、私達が仰せつかった命令は、アンジェラ・ウィンストーヴを説得して、主の元へ連れていくこと。暴力的なことは控えるようにと言われているはずよ」

「でも、説得して連れていくなんて無理に決まってるでしょ！現にそいつ、隙を見て逃げようとしてたんだから！」

「逃げようとするということは、あなたの接触の仕方が悪かったからでしょ」

二の句が告げなくなり、イリヤが口を紡ぐ。それを一瞥すると、イサラはアンジェラに向き直った。

「姉の無礼をお許しください、アンジェラ・ウィンストーヴ様。私はイサラ。イリヤの双子の妹です。すでに御承知だとは思いますが、機械人形です」

感情的に動くイリヤとは対照的に、静かで淡々としているイサラ。雰囲気からして双子であると直感はしたが、同じ双子でもここまで真逆の性格の機械人形も生まれるのだと、今更ながら思い知らされた。

ある程度息が整ったと思うと、アンジェラとイリヤを遠巻きに見ていた人垣の中から、クリスとルイスが飛び出してきた。

「マスター！」

「お怪我はありませんか！？」

目の前に知らない機械人形がいるというのに、二人は真っ先にア

ンジェラの身を心配した。マスターの身を案じるのはいいことだが、目の前の敵を忘れることはあまり喜ばしくない。だが非戦闘員の二人は、そのことを考える必要はないだろう。

「大丈夫よ……ありがとう」

身を案じてくれた二人に感謝を口にする。そしてすぐに、目の前のイサラに目を向けた。イサラの向こうで、イリヤが不服そうに立ちあがるのが見えた。

「貴方達は、私を、連れていくように言われてるのね？」

「はい」

「それは誰？何の為に、私を連れていくの？」

「説明はちゃんとします。ですが、それは私やイリヤの口からではなく、主に話していただきます」

「主……？」

機械人形の口から聞き慣れない主という名が出たことに困惑しているとおもむろにイサラが胸元のボタンを外し始めた。慌ててクリスとルイスが自分の目を両手で覆った。

下着が見える寸前で手は止まり、代わりにシャツをめくって胸元を見せつけてきた。

「これは……」

見せつけられた胸元には“Huie”と刻まれていた。

それは、軍の機械人形ではなく、個人のものであることの印。

「アンジェラ様。主が会いたいと仰っています。攻撃はしません。私達と共に、主の元へ」

第44話 伝授

アンジェラ達がこの教会から出て行った。

今、教会に残っているのはレイラとミシエルの二体だけだ。

だがレイラとミシエルは仲が悪い。別に二人が意図して嫌っているわけではないのだが、性格が合わないのだ。同じ人を恨んでいながら、それは正反対であると、レイラは感じている。

手中におさまった扇子を開く。まだ閉じた状態の扇子は、言われなければただの小さな棒のようだ。

「ミシエル」

調達に街へ向かった者達の背中が見えなくなると、振り返ってミシエルをうかがった。

声を出さずに、顔だけがこちらに向く。

「早速、あなたにこの力を返すわ。けれど……」

開いた手を再び握る。

「本当に、貴方は力が戻ることを望むのかしら？」

いつものレイラで言うところ、いつものミシエルが返してきた。

「望む。シエリルが返してもいいって判断したんだ。だったら、俺はそれに応える」

「これを開けば、貴方は力に飲まれるかもしれないのよ」

「それでもだ。それは俺の力なんだろう？ だったら、俺がその力を支配するんだ」

シエリルが死んだことにより、ずっとミシエルは沈んでいた。自分の所為で死んだようなものだったのだ。きっと、あの時大声で叫んだことを後悔していたに違いない。

だが、大切な妹がずっと守ってくれていた力が返ってくる。

その事実が、再びミシエルの意志を強くしたのだろう。

何も言わず、ただじっとその碧眼を見つめる。揺らぐことのない、強い意志が伝わってきた。

「……これを」

目が覚めたときからずっと手に持っていた扇子を差し出す。ミシエルは特に驚いた風でもなく、扇子を受け取った。

「その扇子をただこじ開ければいいだけよ。そうすれば、貴方に力が戻る」

「は？」

今度は驚いたように見上げてきた。

当然だろう。力が元に戻れば死ぬかもしれないと言っているのに、そんな誰にでもできる簡単なことで力が戻るものなのか。

普通に考えればそんなはずはない。取り出すのにも、もつと苦勞をするはずだ。

ただ、その力がどのように出てくるのかはレイラも知らない。シエリルと同じ能力であるはずだから、風の力で間違いないだろうが、一度にどれだけの量が出てくるのか。

風は目に見えない。掴めなければ、目視することすらできないのだ。

ずっとレイラの中に渦巻く不安はそこにある。

目視出来ず、手に掴むことすら出来ないものが、どうやって機械^{オート}人形の身体に戻るのか。

シエリルは鉄の大きな扇子を扱うことにより、風を生じさせ、それを能力として操っていた。いわば、物を使い、自分の力で能力を発生させていた。

だがこの小さな扇子の中に入っているのは、能力そのものだ。きつと取り出せば力の持ち主すらも襲い、そうでなければ逃げ出してしまうだろう。

言うだけ言って黙りこんでしまったレイラをどう思ったのか、ミシエルは扇子を裏返したりして見つめていた。

シエリルから伝授してもらったはずなのに、未だに分からない。

「これさ……」

不意にミシエルが口を開いた。ブレスレットを手首にぶら下げて、

扇子を太陽に照らしている。

「ここに、俺の能力が入ってるんだよな？」

「そうよ」

「じゃあ、さ」

その扇子はミシエルにはどのように映っているのだろうか。妹にしか見せなかった優しい視線を扇子に注ぎながら、ミシエルは言う。

「なんであの時、俺はシェリルを殺せたんだろな」

「え……？」

それだけ言うと、ミシエルが腕を下ろす。まだ眠気が残っているのか、そのまま瞳を閉じた。

今言ったミシエルの言葉が頭の中で反響する。

シェリルを殺せた。

昨日、アンナとランカの屋敷でシェリルに致命傷を負わせたのは自分だと、現実を受け止めた発言をした。

ならば、どうやってシェリルに致命傷を負わせたのか？

「……そういうこと、なの？」

脳内で何かが確かなものに固まっていく。ドロドロとした液体が形を成して固まっていく感覚だ。

「ミシエル！」

「おわ！？」

眠りの淵に立っていたのだろう、突然名を叫んだレイラの声に、吃驚してミシエルが飛び起きる。

「んだよ！いきなり大声出すなって！」

「いいから聞きなさい！」

額に血管を浮かばせたミシエルに近寄り、プレスレットをした手を引っ張る。椅子で寝転ぶ形でそこにいたミシエルが椅子から転げ落ちそうになり、慌ててもう片方の手で背もたれを掴むことで転倒を免れた。

怒りと混乱を緬い交ぜにした目で見上げるミシエル。
太陽を背に立ったレイラは、その瞳に強く命じた。

「扇子を開き、すべての力を解放しなさい」

第45話 “主”と《力》

「……あのさあ」

手を掴まれたままの姿勢で、呆れた顔でミシエルが言う。

「お前、昨夜自分で言ったよな。この《力》は強すぎるって。下手をすれば、呑みこまれてしまうって。そんな危険なものを、いきなり全部出せって言うのかよ」

「……」

確かに、ミシエルの言っていることは正しい。この力は強すぎると、ミシエル本人に忠告もしたし、自分自身にも何度も言い聞かせた。

だが、おそらくレイラの考えていることが正しければ、すべての力を解放しなければ、持ち主の元へは帰らない。

そして、持ち主が自分の持つ力で《力》を支配しなければ、ずっと気にしていたことが起こる。

ミシエルが解放された《力》に負ければ、ミシエルは身体を維持することはできないだろう。

おそらく、傍に居るレイラただでは済まないはずだ。

「あなたの言いたいことは分かるわ、ミシエル。でも、きっとこの方法で《力》はあなたの元に戻るはずなの」

「けど」

「いいから！」

「ああ、もう分かったって！」

少し強引だったかもしれない。ミシエルが掴まれた手を振り払った。

「言いたいことは分かったから。……でも、そんなに焦ることなのかよ？」

「それは……」

ミシエルの言うとおり、今焦ってする必要はない。出来るならば

早い方がいいが、そのためにはミシエルの気持ちとその気でなければいけない。不意なまま扇子を開けば、成功率が低くなることは、どんなことにおいても同じ話だ。

天井のない教会に静寂が訪れる。

次に何を言えいいのか分からず、ただ黙るしかなかった。きつとミシエルも同じ気持ちなのだろう。

ひたすらブレスレットに目を向けたまま、何も言うことはしなかった。

すると、不意にミシエルが立ちあがった。

「どこへ、行くの？」

慌てて後を追うと、ミシエルは無言で三つの土の山のもとまで歩いていった。一番右端の山の横で一瞬足が止まるが、すぐに先へ進んでいく。

瓦礫が散乱した街。おそらく二人が歩いているのは、馬車が横に三つは並ぶであろう大きさの道路だ。もちろん、道にも崩れた家の壁や焦げた枝が散らばっている。

ずっと道を進むと、先ほどまで歩いていたところより少し瓦礫が少ない通りに出た。前方だけではなく、左右にも道が開けていることから、大きな十字路だったのだろう。

そのど真ん中でミシエルが足を止め、振り返る。

「《力》、取り戻すぜ」

ただそれだけ言うと、ゆっくりとブレスレットをした手を、地面と平行に持ち上げた。

*

イリヤとイサラと名乗った二体の機械人形オートマターの後についていくと、通りに並んでいるどの屋敷よりも大きく、綺麗に剪定された広い庭を持つ屋敷へと行きついた。純白の壁に、二階すべてにバルコニーがある。窓も大きく、土地面積も相当な大きさだろう。道との境には、二メートルは超すであろう茨が屋敷を囲んでいた。

「こちらへ」

先頭に立つイサラが、表の門を開けた。もちろん、馬車を通す大きな門ではない。屋敷の使用人が出入りするような、小さな門だ。

アンジェラのいた屋敷とは比べ物にならないほど大きな屋敷だ。アンジェラ自身は、何度か両親と一緒にどこかの重鎮の屋敷に訪れたことはあるが、ここまで大きなところは初めてかもしれない。

これほどの豪邸を持つ人間が、アンジェラに会いたがっている。一体どれほどの力をもつ人間なのだろうか。少なくとも、個人で二体の機械人形を所持している上に、この豪邸なのだから、アンジェラのような社長令嬢より格上と考えるのが妥当だろう。

だが相手は味方ではない。もしかしたら敵でもないかもしれないが、敵だと思つてこの場をしのごう。

壮大な玄関を入ると、吹き抜けの天井に大きなシャンデリアが床を照らしていた。

クリスとルイスが声を出さずに驚いている。本当なら声を上げて騒ぎたいところだろうが、ちゃんと空気を読んでいるらしい。

「主は三階の奥の部屋です。案内します」

律儀に説明しながら歩くイサラの背中を追う。アンジェラとクリス、ルイス、それにネーナの背後にはイリヤが数歩の距離を置いてついてきていた。逃げださないように後ろについているのだろうか、最初から逃げるつもりなどない。

ふと、歩いていてネーナに視線が止まった。

あれほど街のことに関して好奇心旺盛だったネーナが、クリスとルイスが驚くほどの大きなシャンデリアを見ても、まったくはしゃがなかった。

ひょっとしたらそれほど豪華なものに興味がないだけかもしれない。そう思うことにする。

階段を上り、一番奥だと言われた部屋の前で足を止める。

「今主をお呼びします。少々お待ち下さい」

視線をこちらに投げながらそう言つと、イサラは茶色の扉を二度叩いた。

「主、アンジェラ様をお連れしました」

「——ああ、どうぞ。入ってもらつて」

中からまだ少年のような青年の声が聞こえた。
無言でイサラが扉を開けた。

部屋の中はとても整っていた。貴族らしい、綺麗に掃除されている。

だが肝心の“主”の姿が見えない。イサラに視線で入ってもいいかと問うと、同じようにイサラも無言で頷いた。

部屋の中に一歩踏み入れると、

「やあ」

部屋の左側から声が聞こえ、ゆっくりと視線をそちらに向ける。

人一人が使うには大きな天蓋付きのベッドに、片足を載せてズボンの裾の紐を結んでいる青年が、アンジェラの青い瞳に映った。

第46話 会談

ズボンの裾の紐を結び終わると、青年は足を床に下ろしてこちらに向かつて微笑んだ。

青年の姿を見た瞬間、アンジェラは絶句した。

青年の格好にまず驚いた。これから馬術の練習でもするのだろうか、引き締まった服装をしており、裾を締めるようになっていゝズボンを履いていたが、その足は黒の靴下に包まれているだけだ。ブーツは履いていなかった。この屋敷に限らず、国全体で部屋でも靴を履くのが当然であるのにも関わらず、青年は靴下のみなのだ。

微笑の上に、少々申し訳ないような表情をしながら青年は口を開く。

「こんな格好で申し訳ないね。本当はちゃんと出迎えるはずだったんだけど」

「まったくです!」

青年が言い終わると、扉の横に立っていたイサラがアンジェラの前に飛び出し、ずかずかと青年の前に立った。そして両手を腰に当て、自分より頭半分ほど高い青年を叱りつけた。

「彼女は突然の来訪者ではなく、主がお招きした方なのです。お住まいの屋敷に居なかったことで少々手間取りましたが、その間にも身支度は終えられたはずですよ。時間が短くなったのではなく、延びたのですから。なのにまだ靴を履いていないなんて!」

頭ごなしに、口答えをさせる間もなくイサラは言葉を並べていく。青年は困ったように何かを言おうとするが、イサラがそれを許さない。

この状況は一体どうするべきなのか。アンジェラにも、同行したオートマター機械人形達にも分からず、ただその場に啞然と立ちつくした。

まだ説教を続けるイサラを眺めていると、不意に背後から深い息が聞こえた。

振り返ろうとすると、それよりも先に妹であるイリヤが前に進み出ていた。

「イサラ、いくらなんでも怒りすぎだよ。客人が居るのにさ。主も主だよ。イサラの言っていることが正しい」

「いや、それは分かってるんだけど……」

「毎日毎日、使用人に手伝わせてるからです。着替えすら一人でまともに出来ないなんて」

「イサラ！お客様の前で恥ずかしいことを言わない！」

「事実を口にしただけです」

「あーはいはい。二人ともそこまでー」

まだ怒りがおさまらないイサラと、恥ずかしそうにイサラを口止めしようとする青年、そして呆れるように二人を制するイリヤ。何とも言い難い光景だった。仲がいいと言えはいいのだろうが、主とドール、そのどちらが“主”なのかが分からない状況だ。

さらに驚いたのは、イサラは礼儀正しいことは会った瞬間から分かっていたが、意外とイリヤも常識があり、口は悪いが周りの空気を読んで指示できるようだ。

しっかりしていないと言えば、人間の青年だろうか。

ふと、青年を眺めていると、どこか引つかかるものを覚えた。

だが結局、その正体は分からず、こちらに向き直った青年と再び視線を交える。

「改めて。いらっしやい、アンジェラ・ウィンストゥヴ。会いたかったよ」

そう言つと、右手を差し出す。その手を一瞬だけ眺めてから、
「アンジェラ・ウィンストゥヴです」

と言つて、右手は差し出さなかった。

期待に込えてくれなかったことが疑問なのか、青年は首を傾けた。すると、背後のイリヤとイサラが同時にため息をついた。

「主。自身の名を名乗っておりますん」

「あつ」

「ったく。なんでそれだけのことが分からないのよ……」

手を握り返さなかった理由は二人の指摘する内容もだが、本当は別にある。相手の目的が分からない。ただそれだけのことで、手を伸ばすことを拒んだ。

青年は困ったように手を引っ込めると、深く息を吸って再び口を開いた。

「名乗るのが遅れてごめんね。僕はヒューイ・ラスキン」

「ラスキン……？」

その名前に違和感を覚え、やはり出された手を握ることはしなかった。

「ラスキンって……」

背後でクリスとルイスが顔を見合わせる。ネーナはそれぞれが疑問に思っていることが分からないらしく、一人、首をひねっていた。警戒心は弱めないまま、アンジェラは声を発した。

「……失礼ですけれど、貴方の父上のお仕事は？」

ヒューイがきょとんとする。その後ろに立つイリヤとイサラは「やっぱりか」というような表情をしていた。

だがそんな二人の気持ちなど知らず、ヒューイは飄々と答えた。

「国軍の長官だけど？」

「……！！」

再び、アンジェラ達一行の間に緊張が走る。クリスとルイスは身を寄せ合い、ネーナは今にも攻撃しそうな勢いでヒューイを睨みつ

けた。アンジェラとて例外ではなく、いつでも逃げ出せるように足に力を込める。

それぞれの様子が変容したことに、慌ててヒューイが両手を前でひらひらと振った。

「そんなに警戒しないでよ！僕は父様とは無関係なんだから！」

「無関係？」

その一言に疑問を感じた。それで警戒を緩める訳ではないが、青年の言っていることに嘘はなさそうだ。

「そうだよ。僕は生まれてから7歳と15歳の誕生日の時にしか、父様に会ったことがないんだ。この部屋の家具も、みんな、父様が稼いだものであることには変わりないけれど、僕は父様がどんな仕事をしているか、なんて詳しく知らないんだ」

ヒューイの言っていることが真実なのかが分からず、イリヤとイサラの方を窺う。二人とも顔を背けることはせず、真面目な瞳でこちらのやりとりを見ていた。

嘘ではないと信じて良いだろう。静かに手を上げ、小さくなったクリスとルイスに警戒しなくてもいいと頷く。同じようにネーナにも目を向けたが――

――ネーナは警戒したまま、その警戒を緩ませようとしなかった。ネーナは姉のレイラと共に、軍で作られた機械人形だ。クリスとルイスのように、一般の人間に作られた訳ではない。自分達を戦争の道具として扱う軍に敵意を持って当然であり、その軍の長である人間の息子が、目の前にいるのだ。

「ネーナ」

一言、その声を掛けると、何かに弾かれたかのようにネーナが顔を上げた。

赤い瞳がいつも以上に赤く燃え、黒い瞳は何よりも深い色をしていた。

だが我に帰ったネーナは、自分の周りを取り巻く空気が、わずかに和らいでいることに気付いて自身も警戒を緩めた。

場を見計らったのか、何も言わず見ていたイサラが一步前に進み出た。

「申し訳ありません。ラスキンと名を聞いた者は、みな同じように質問するのですが、主が長官のことを血の繋がった親子であること以外を知らないのは事実なのです。お許しください」

「はあ……」

「それから、立ち話をさせてしまい申し訳ありません。紅茶を用意しますので、そちらの椅子にお掛けください」

言いながら、扉を入ってすぐ目に入ってきた二つ向かい合わせに置かれた椅子を促す。その言葉に従い、アンジェラは椅子の一つに腰かけた。その向かいにヒューイが座る。

どうやら他に椅子は無いようで、ネーナ達は窓際に立つてこちらを窺っていた。イサラは一度退室し、イリヤはヒューイの物であるベッドに座っていた。

イサラが戻るのを待たずに、口を開く。

「そちらのドールのお話ですと、あなたは私を連れてくるようにと指示していたようですが」

「うん。僕が二人に命令したんだ」

命令。その言葉に、やはり軍人の息子だ、と微かに感じられた。直接会ってないとはいえ、仕事が軍人だというだけで、物言いが似てくるのだろうか。

「実は君に会わせたい子が居てね」

「会わせたい子……？」

「そう。でもその前に、君がどこまで彼女のことを知っているのか、知りたくてね」

言っている意味が分からず、言葉を返せない。アンジェラが知っている人物なのだろうか。

部屋の扉が開いてイサラが入ってくるのと同時に、再びヒューイ

が微笑を浮かべたその口を開いた。

「君は、7歳の誕生日を迎えて以降のジュリアのことをどれだけ知っている？」

第46話 会談（後書き）

中学の時、ノートに書いていたところまで大体追いつきました。
ちなみにノートでは、ここの話が6話目でした。

第47話 会いたくない

青年、ヒューイの言葉に、その場に居る者達すべての間に緊張が走った。

中でも一際緊張し、動揺しているのは、向かいに座ったアンジェラだった。

「いま、なんて……？」

今青年の口から自分の捜している者の名前が出たことに、大きく動揺してしまうアンジェラ。

ずっと捜していた者の名前が、初めて会ったばかりの青年の口から紡がれたのだ。

アンジェラの反応には、ヒューイの方も予想はしていたようで、大して変化のない声音で同じことを口にする。

「7歳の誕生日を迎えて家を出ていった以降のジュリアのことを、君はどこまで知ってるんだい？」

再度紡がれた言葉により、先ほど耳に入った言葉は嘘ではなかったことが思い知らされた。

二人の間に置かれた机に、二つのティーカップが置かれた。

コトン、と小さな音が響くと同時に、何かに弾かれたかのようにアンジェラが立ちあがった。

「ジュリアを、知っているのですか！？」

ヒューイに問われたこととは違う言葉だが、質問の答えが返ってこなかったことは大してヒューイ自身は気にしていないらしい。優雅にカップの中の液体を口に含んだ。

「教えてください、ジュリアは今どこにいますか！？」

よっぽど困惑してしまったのか、アンジェラは初対面の男に対し、強く攻め入ってしまった。

なかなか答えてくれないことに苛立ちを覚え、一步足を踏み出すと、それを遮るようにイサラが割り込む。ただ無言で、主の元には近づけないように。

それでもイサラを押しつけるという選択肢もあるが、ここは自分が初めて踏んだ土地。下手なことをすれば、不利になるのは自分達の方だ。

ジュリアの名を聞いて取り乱したアンジェラだが、そのことが頭に浮かぶぐらい、まだ理性は飛んでいない。

イサラの鋭い視線をその身に浴びながらヒューイを半ば睨むように見ていると、ソーサーにカップが戻された。

「彼女に会わせてあげたいのは山々なんだけど、その前に僕の質問に答えてほしいな。その返答次第では……」

「……返答次第では？」

「会わせてあげられないかな」

さわやかな笑顔を浮かべるヒューイ。気持ちが焦っているアンジェラからすれば、その笑顔はさらに頭に血を昇らせる結果になるのだが、それを無理矢理抑え込む。

「……ジュリアのことは、あれから何一つ知りません。この間の8歳の誕生日パーティーにも、帰ってきませんでした」

「だろうね。ずっとここに居たからね」

「っ！」

アンジェラが喰ってかかろうとすると、イサラが腕を上げて制する。ただ無言の動作が、アンジェラに威圧感を与えた。

これ以上どうしようもないアンジェラに助け舟を出すかのように、窓ガラスに背を預けていたネーナが、いつもより数段暗い声のトーンで言った。

「ねえ、アンジェラは質問に答えたよ。会わせてあげてよ」

普段のネーナからは考えられないほど落ち付いた声だった。その声に、思わず息を呑み込むアンジェラ。

ネーナの言葉に、やはりさわやかな笑顔を浮かべるヒューイは答

える。

「そうだね。だが、残念」

カップを乗せたソーサーを机の上に置きながら、ヒューイは続きを口にした。

「君には悪いけれど、ジュリアには会わせられない」

「な……っ！」

会えると思っていたことを裏切られ、思わず強くヒューイに詰め寄った。だが、やはりイサラに行く手を阻まれてしまう。

視界の端に、窓際に立った機械人形達も同じように詰め寄ろうとしている姿が映った。だがクリスとルイスの二人は心配そうに身をよじっただけだ。

「先に言っておくと、ジュリアはここに今、君達が来ているのを知っているよ。その本人がどこにいるのかは、知らないけど」

「何故会わせてくれないのですか！すぐそこに、ジュリアが居るのでしょう！？」

「いや、多分今この屋敷の中にはいないよ。いつも食事の時以外は外に行ってるみたいだからね」

取り乱すアンジェラとは逆に冷静なヒューイは、嘘を言っているわけではないだろう。

だが今のアンジェラにとって、この男の放つ言葉は、すべて嘘のように思えてしまう。

「お願いです……！ジュリアに、会わせてください！」

半ばすぎる思いで強く言う。だがヒューイの表情に変化はなく、それは否定を意味していることをすぐに悟った。

「どうして……？」

何度言っても伝わらないということに気付くと、深い絶望が胸中に広がった。ヒューイとアンジェラの間を遮るようになげられていたイサラの腕に、もたれるように体を預ける。

会えると思っていたのに会えない絶望。その事実だけで、今にも倒れてしまいそうだ。

「マスター……」

心配そうなクリスの声が聞こえた。だがそれ以上の言葉は無い。一気に勢いを失くしたアンジェラを見て哀れんだのだろうか。ヒューイが席を立ち、イサラの後ろからアンジェラの肩に手を添えた。体を預けていたイサラの体が離れ、代わりに青年の大きな手に肩を支えられる。

「僕は君達の敵じゃない。だから、出来るなら君達姉妹を会わせてあげたいと思っているよ」

「じゃあ、なんで……」

「ジュリアがそれを望んでいないから」

「……え？」

「ジュリア自身が、君会いたがっていないんだよ」

とどめを刺すかのように出た言葉に、ついにアンジェラの膝が崩れた。

そのまま転倒しないように、ヒューイが優しく下ろしてくれる。

「うそ……」

「本当のことだよ」

ただただ呆然とするアンジェラに、ヒューイは言葉に申し訳なさそうな色を混ぜながら、静かに事実を口にした。

「ジュリア自身もね、君に会いたがっていたんだよ。でも、あの家は自分の居るべき場所じゃない、あそこには帰りたくないって、強く拒否したんだ。たまたま出会った僕のこの屋敷で今は暮らしてるけど、やっぱりここも居場所じゃないみたいでね、ほとんどここにはいないよ」

何も返せないアンジェラに、なおもヒューイは言葉をかける。

「でも彼女は、君のことはすごく信頼してた。もしかしたら、君なら捜してくれるかもしれないって思ってたんだよ。実際、君はこうして捜しに来てるね。でも、ちょっと遅かった。もう見捨てられたと思ったジュリアは、決してあの家には帰らないことを誓ったんだよ」

まだ何か言い足りないかのようにヒューイの口が開くが、その口から声は出ない。

代わりに部屋には、アンジェラのすすり泣くような声だけが響いた。

おそらく今のアンジェラに何を言っても意味は無いと思ったのだろう。青年はただ優しく、か弱い女であるアンジェラを抱きしめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4794j/>

ふたつでひとつ。

2011年10月7日03時17分発行